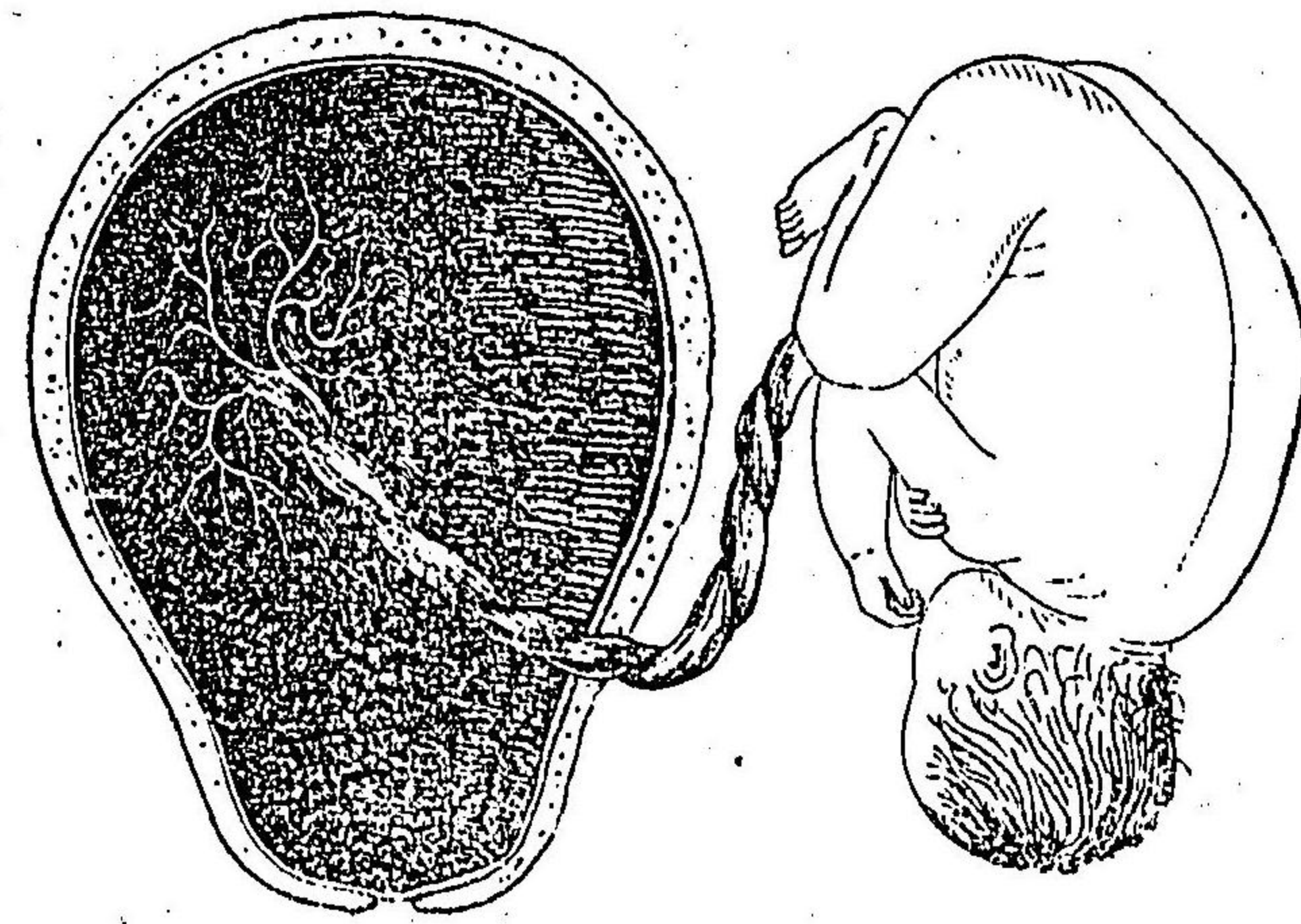


圖五十二第

圖四十二第

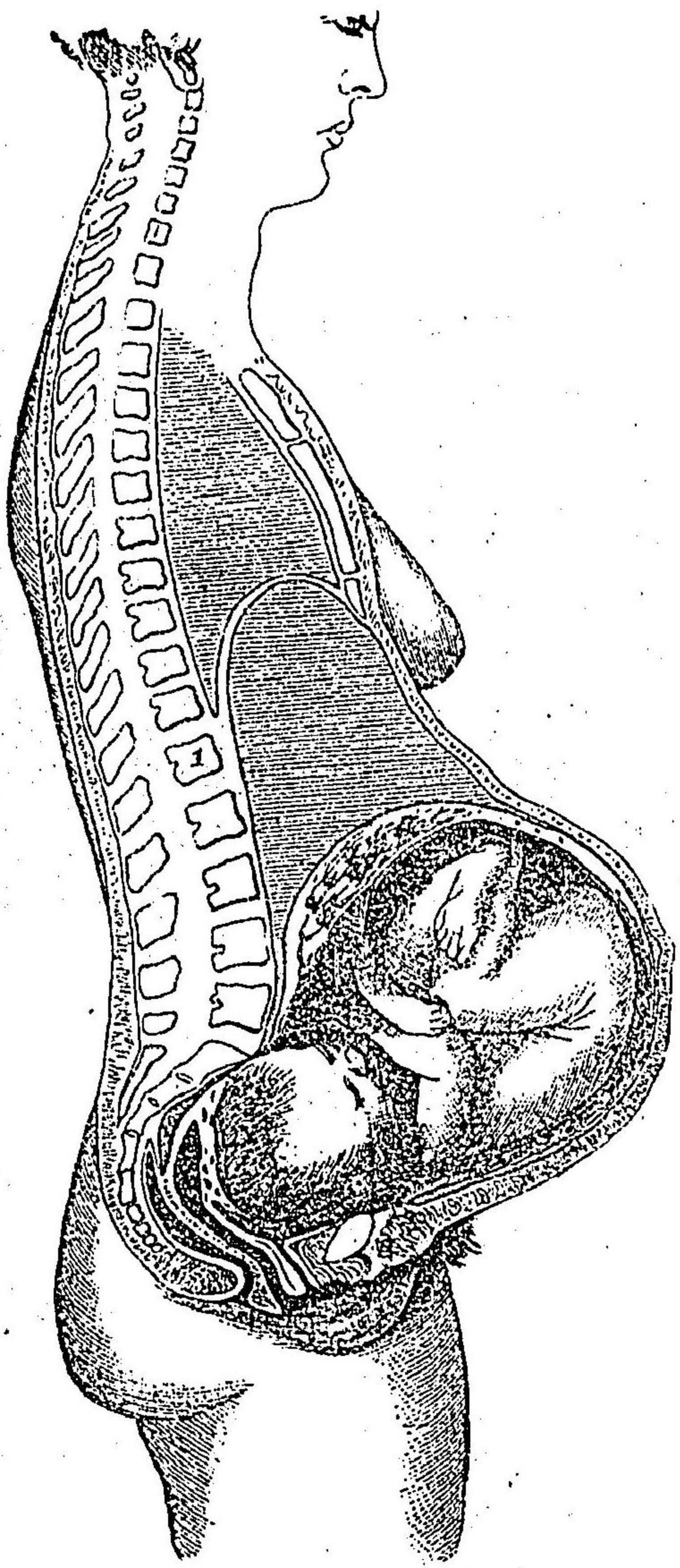


兒胎熱成び及宮子の期末娠妊  
(一分五の大然天)

千(二) 體凡三  
 瓦(三) 肩胛の廣さ  
 凡(三) 十二仙迷本  
 邦(十) 十一仙迷  
 腰(十) 廣さ十仙  
 迷(九) 本邦人は九仙  
 迷(四) 全身頗る肥  
 満(四) 全身頗る肥  
 (五) 皮膚は淡紅  
 色を呈し各所に  
 白色なる胎脂を  
 附着す

に(六) 皮膚の毛殆んど消失し残る所は只背部及び肩胛部  
 過(七) 頭蓋骨は硬く頭皮上には三乃至四仙迷の長さを有す  
 毛(七) 髪は生じせり  
 (八) 頭蓋には顛門縫合及び一定の徑線を有す  
 (九) 顔は豊圓にして皺なし  
 (十) 爪は稍硬くして指趾の尖端を出づ  
 (十一) 生殖器は完成して男兒なれば睪丸は既に陰囊内に存  
 (十二) 女兒なれば大陰唇を以て小陰唇を掩ふ  
 (十三) 娩出すれば直ちに高襟を發して啼泣し四肢を活發に  
 運動し眼を開き稀には哺乳運動を營むことあり此際通常  
 大便を漏す尿は直ちに強く射出し大便は帯黒綠色粘液  
 大(十四) 腸中に蓄積せしものなり之を胎尿又胎糞  
 様にして胎兒の腸中に蓄積せしものなり之を胎尿又胎糞  
 云ふ

第二十六圖



妊娠第四週に於ける婦人の左半身  
(天然大の六分一)

第十七章 成熟胎児の頭蓋

成熟胎児の頭蓋は最も大にして堅く爲めに分娩の際に頗る緊要なる關係を有するを以て之を詳述せざるべからず而して胎児の頭部は頭蓋と顔面とに別つこと尙大人に於けるが如しと雖も其異なるの點は二個に區別せられ得べき前頭骨及顱門の存在並に稍移動性を有する縫合等なりとす此の如く顱門及び縫合の未だ閉合せずして移動し得るは分娩時に於て骨線重積し頭蓋を縮小するの作用を營むものなり顱門の主なるものは大顱門及び小顱門にして側顱門は頭蓋の側方に於て左右各前後にありと雖も竝も緊要なるものにあらず

大顱門は冠處縫合と矢狀縫合及び前頭縫合との間に於て形成せられ菱形を呈す故に又菱形顱門の名あり

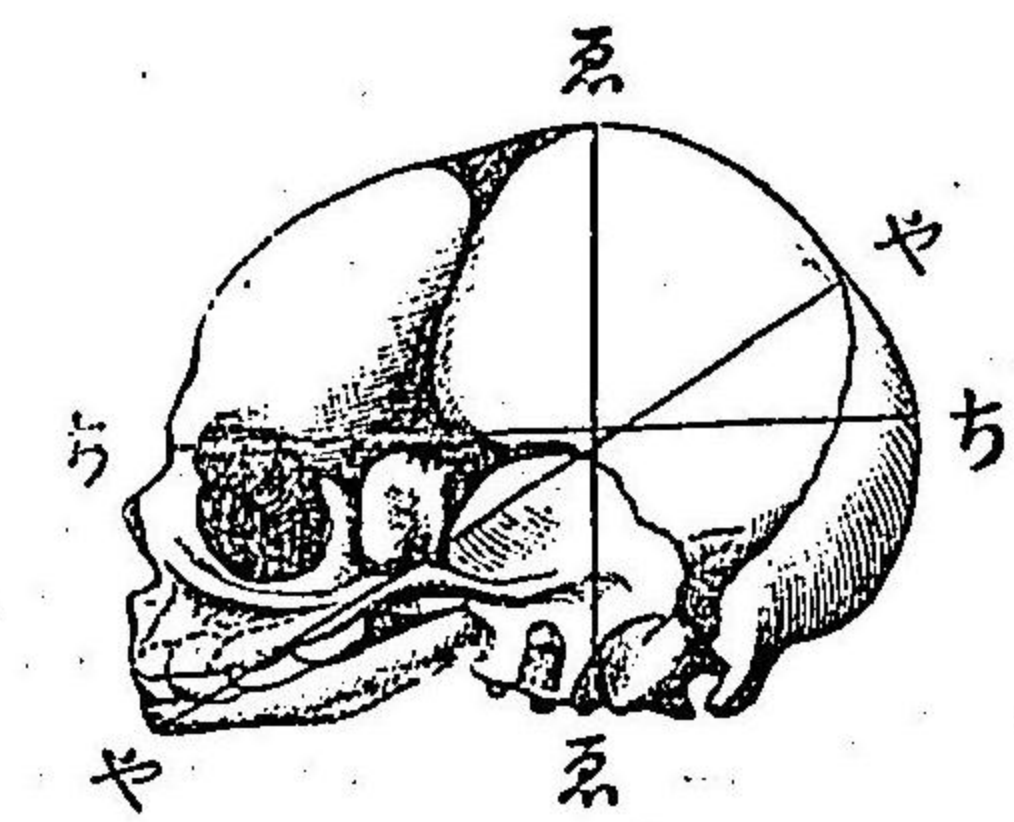
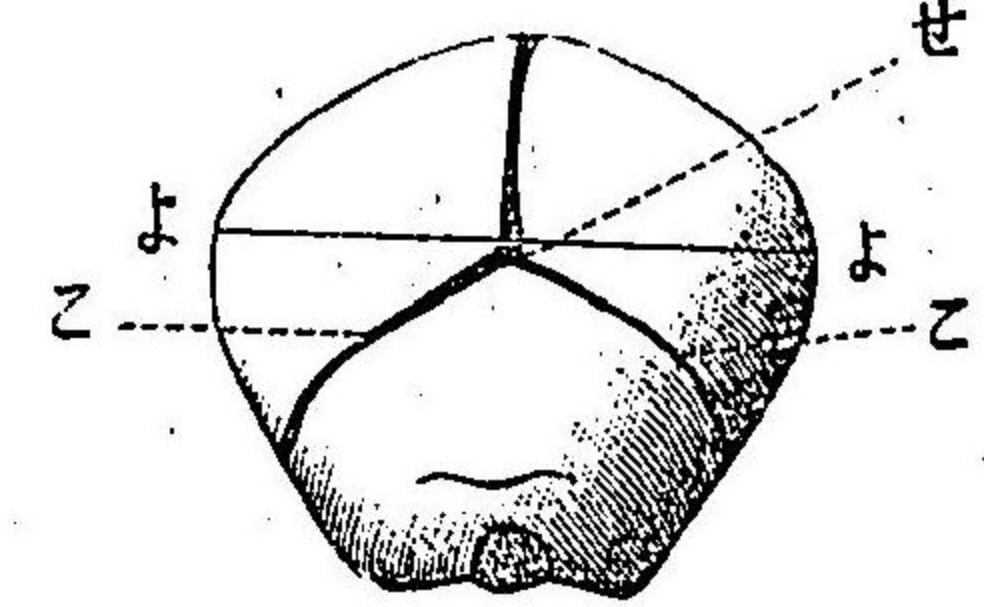
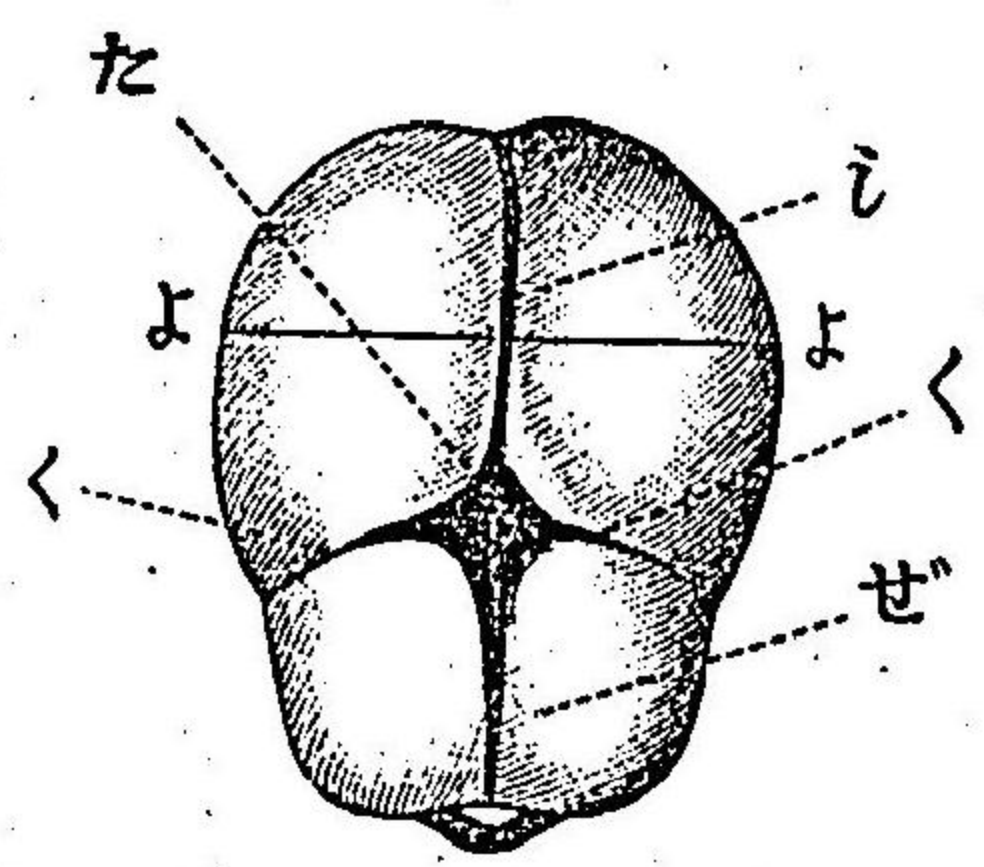
小顱門は矢状縫合と三角縫合との間にあり三角形を成し大顱門よりも小なり頭蓋の縫合に就きては既に解剖編に於て説明したるを以て左に大要のみを述べん

第二十七圖

第二十八圖

第二十九圖

初生胎児頭蓋の縫合、顱門の線を示す



せ、前頭縫合　く、冠處縫合　し、矢状縫合　こ、三角縫合(一名後頭縫合)  
 た、大顱門　せ、小顱門　ち、直徑線　ち、直徑線  
 よ、横徑線　や、斜徑線

前頭縫合  
 冠處縫合  
 矢状縫合  
 後頭縫合

兩前頭骨間にあり  
 前頭骨と顱頂骨間にあり  
 左右顱頂骨間にあり  
 顱頂骨と後頭骨間にあり

嬰兒の熟未熟を知るには頭蓋の大小をも又測定せざるべからず但し成熟せる胎児の頭蓋は諸所に由て左の如き差異あるものとす

第一 直徑線	眉間より後頭骨の最も突出せる部の間	一二〇仙迷
第二 大横徑線	兩顱頂結節間	九・五仙迷
第三 小横徑線	兩顱頂部間	八〇仙迷
第四 大斜徑線	顱部及後頭部の突出部間	一三〇仙迷
第五 小斜徑線	顱部及大顱門間	一〇・五仙迷
第六 頭蓋周圍徑	直徑に沿て頭蓋を一周せるもの	三四〇仙迷

頭蓋の最少なる周圍徑は小斜徑線に於ける周圍徑に

て三十二仙迷を有し最大なるは大斜徑線の周圍徑にして三十六仙迷なり而して正規の分娩に於ては此最小なる周圍徑を以て骨盤内を通過するものなり

### 第十八章 胎児の子宮内に於ける状態

胎児の子宮内に於ける状態を區別して三種となす胎位胎向胎勢之なり

#### 第一 胎位

胎位とは胎児が子宮腔内に於て縦に位するか或は横に位するかにより定むるものにして即ち前者を縦位と云ひ後者を横位と稱す其他斜位なるものあり之は胎児が縦位より變じて横位とならんとするに際し其身體、子宮に對して傾斜せるものを云ふ而して全く横位を成すものは少な

く多くは斜位を成形すべし

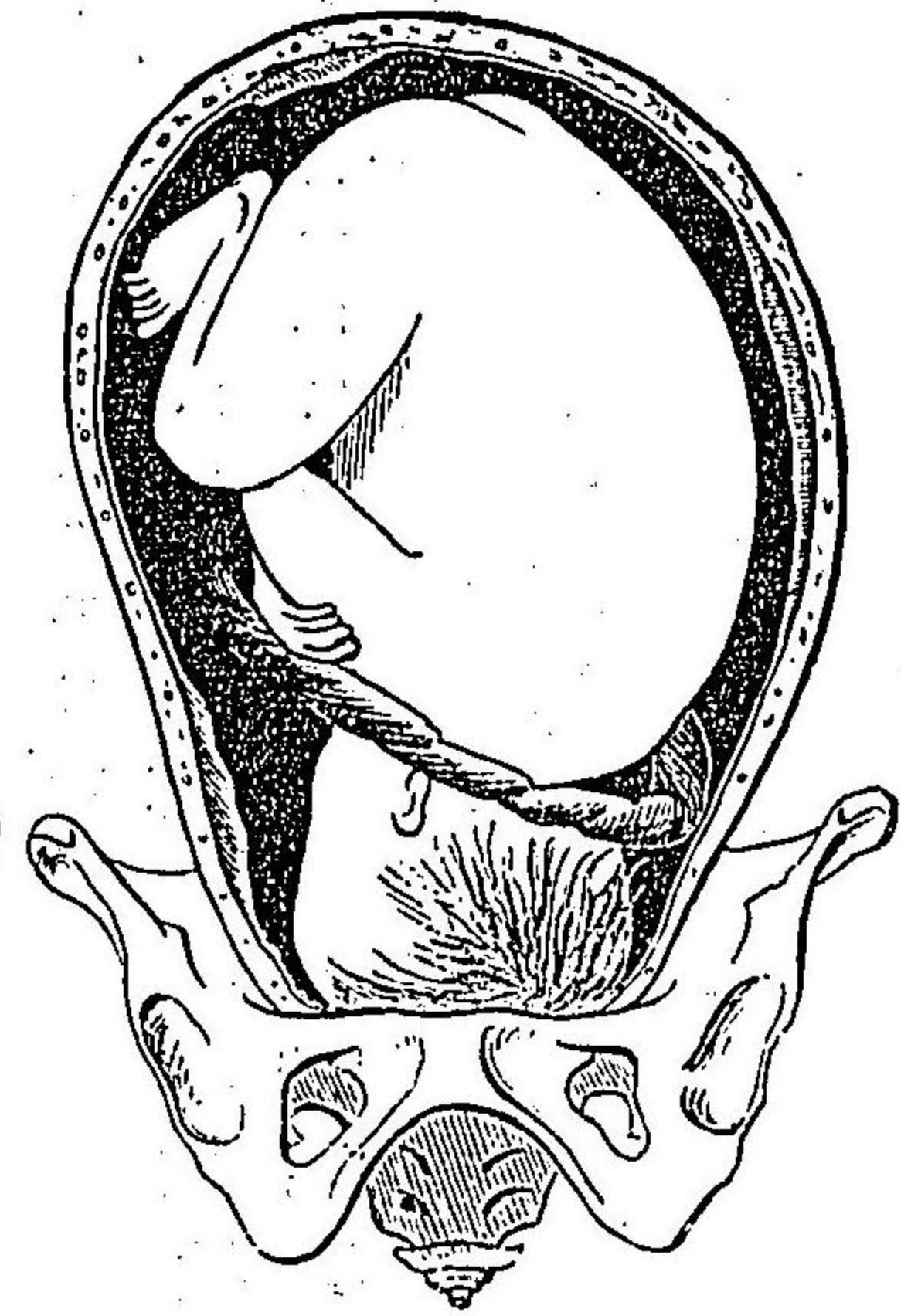
#### 第二 胎向

胎向とは胎児の背部母體の何れの方に向けるかにより定むるものにして兒背が母體の左方に向ふ時は第一胎向と稱し右に對する時は第二胎向と云ひ通常第一胎向を多しとす横位に於ては兒背の前向するを第一胎向となし後向するを第二胎向と稱す

以上記せる胎位及び胎向は屢々變化し易くして縦位なりしもの横位に變じ或は第一胎向なりしもの變じて第二胎向となるが如し殊に胎児小なるが又は子宮腔大なる時は其變化すること益々著しきものとす

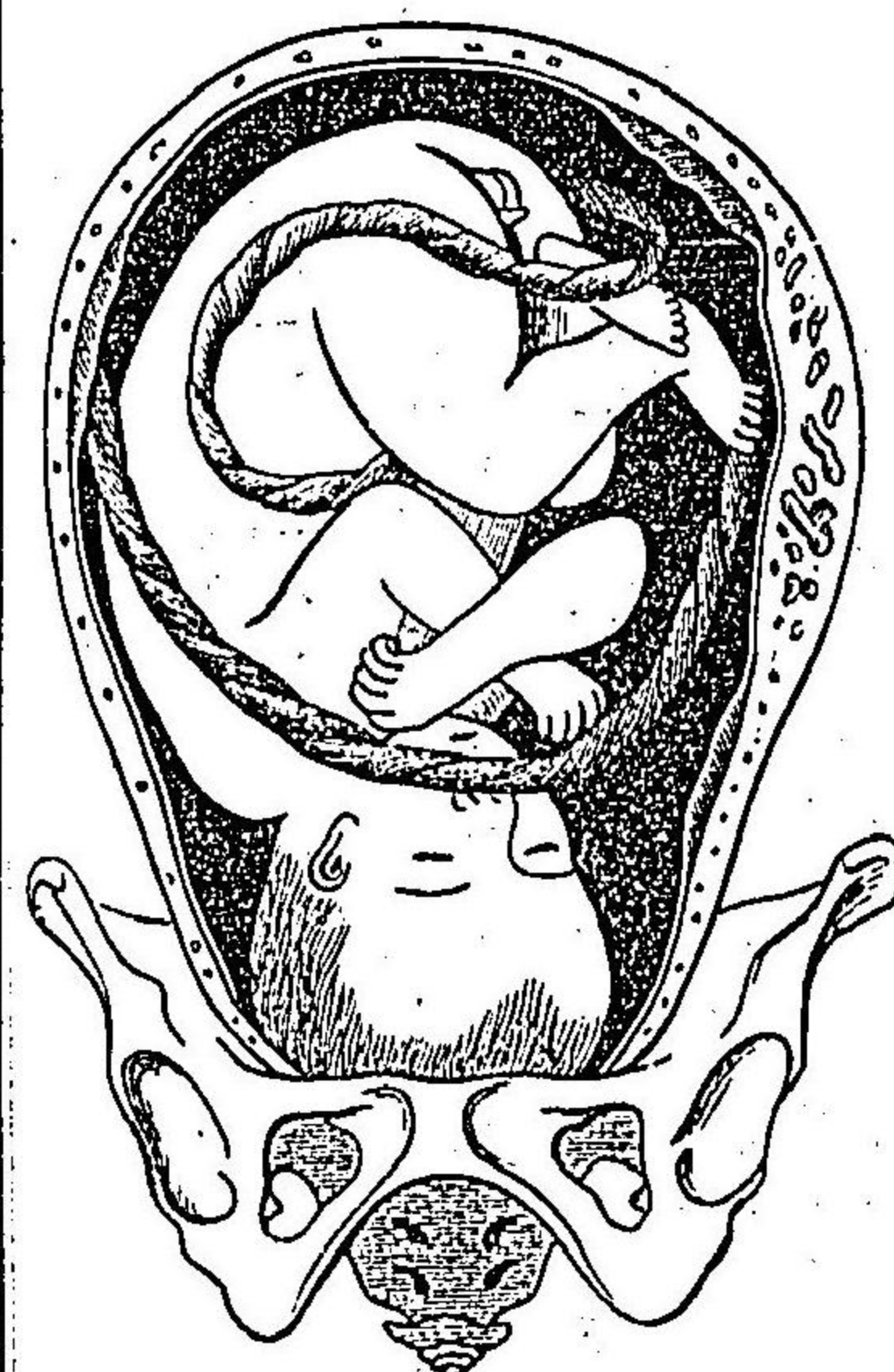
#### 第三 胎勢

圖十三第 向胎一第



(一分五の大然天)

圖一十三第 向胎二第



(一分五の大然天)

胎勢とは胎児の各部が子宮内腔の形に一致せしめられ、爲めに呈せらるる有様を云ふものにして即ち其背を屈し頤部を胸上に接せしめ、上肢は肘關節に於て屈曲し且つ之を胸面に置き左右の前膊を相交せしむ下肢

を亦膝關節に於て屈し之を腹壁に接し左右の下腿亦相交して足踵を臀部に接觸せり而して臍帯は腹部の前面に於て四肢の間に存す可し之を正規の胎勢と云ふ若し手足又は頸を伸展し或は四肢に臍帯の纏絡するが如きは異常に屬す此の如き胎勢は妊娠中母體或は自己の運動により屢く變する事ありと雖も決して久しく其變位に止るものにあらず

第十九章 胎児の生理

第一項 胎児の營養

卵は初め絨毛膜によりて子宮の脱落膜より營養物を取り次に胎盤及び臍帯を形成するに至れば胎盤部に於て其作用を營まる

第二項 胎兒の血液循環

胎兒の全身を營養したる血液は二條の臍帶動脈より胎盤に達し其毛細管に至りて營養物を攝取し老廢物を排出して新鮮なる血液となりて一條の臍帶靜脈に湊合し以て胎兒の臍より入り全身を營養す胎兒の體內に於ける血液循環の状況は生産後に於けるものと大に其關係を異にせり即ち心臟の左右兩房間には卵孔なる一孔を存し互に交通し肺動脈と大動脈との間には一管あり之をボタリ氏動脈管と云ひ兩者を連結す臍帶動脈は骨盤内より起り膀胱の兩側に沿ふて上行し遂に臍に達す臍帶靜脈は胎盤より起り新鮮なる血液を含み臍に入り臍帶靜脈は胎盤より起り新鮮なる血液は臍帶靜脈より出で下大靜脈と云ふ而して又肝臟より出で下大靜脈に連合する一肢あり之を肝靜脈と稱す

胎盤を循環

胎盤を循環して新鮮となれる血液は臍帶靜脈より胎兒の體內に入り肝臟の下面に至りて一部は門脈により肝臟に注ぎ他の一部はアランチ氏靜脈管を経て下大靜脈に達す而して其肝臟に循環する血液は再び肝靜脈より出でて下大靜脈内に注ぐを以て下大靜脈は下肢及び腹部内臓より還流し來れる血液と新鮮なる臍帶靜脈より來れる血液と更に一旦肝臟内を循環せる血液との三種を合して心臓の右房に至り上體の血液を總合せる上大靜脈と共に右房内に注ぐ茲に於て房の收縮起れば右房の血液は一部は右室に入り室の收縮に由り肺動脈中に吐出さる次で其大部分はボタリ氏動脈管を経て直ちに大動脈に注ぎ一部は胎兒の肺中を循環して肺靜脈となり心に左房に注ぐ即ち胎兒

の肺は未だ呼吸を営まざるを以て僅少の血液を流通せしむるに過ぎず此の如く右房内に於ける血液の一部は右室に入るも他の一部は卵圓孔を通じて左房に入り肺静脈より來れる血液と共に房の收縮に由り左室内に入り肺静脈より來れる血液と共に大動脈内に注ぎ先きにボタリ氏動脈管を経て來れる血液と共に大動脈の經過に沿ふて一部は上體に循環し遂に上大静脈となる他の一部は下體に循環せんが爲めに骨盤内に至り更に二分せられ一は臍帶動脈となりて臍より出で一半身を循環して遂に下大静脈に總合す此の如く胎児の血液は胎盤及び體内を環流して絶ゆることなし之を胎児血液循環と云ふ

第三項 胎児の無呼吸及早時呼吸

胎児子宮内に在るの際呼吸を營むことなくして胎盤血行により酸素を攝取し炭酸を排泄するの状態を無呼吸と云ふ

今若し臍帶の血行又は子宮の血行不良となる時は胎児の體内には酸素缺乏し炭酸蓄積するが故に無呼吸の状態を保つと能はずして遂に呼吸作用を發す之を早時呼吸と云ふ此場合に於て吸取する所のものは酸素にあらずして胎児の周圍に存せる羊水なるを以て胎児は直ちに窒息す其輕度なるものを假死と稱し娩出すれば一定の方法により蘇生せしめ得べきも高度なる時は遂に死するものなり

第二十章 妊婦の全身に現はるゝ變化

第一項 生殖器の變化

第一節 子宮

子宮の大さは通常妊娠せざる若年の婦人に於て其長さ凡そ七仙迷なれども妊娠する時は漸次増大し其末期に至れば凡そ三十五仙迷に達し其内腔の廣さは五百倍餘となる而して子宮壁は甚だしく其厚さを増し殊に子宮底部に於て著るしく子宮血管も亦頗る變大し且つ増加するに至る

子宮の位置

は始め一二箇月間は骨盤内にありて益々深く下降し其前屈を強からしむるを第三箇月より漸次上昇して四箇月に至れば大骨盤内に出で爾後子宮増大するに従ひ子宮底の位置は漸々上昇し九箇月に至れば遂に心窩に達すれども十箇月に及べば再び下降す

子宮頸部

は漸次弛緩し柔軟となり且つ頸管内より粘調なる粘液を多く分泌す又妊娠月數を重ねるに従ひ子宮頸は漸く短縮し其末期に至れば只薄き縁を残すに至る

子宮粘膜炎は受胎するに及び著るしく増息肥厚し脱落膜を形成して胎兒を被ひ且つ胎盤の形成に由て之を營養す

第二節 膈及び外陰部

膈及び外陰部に於ては血液の流入多きが爲めに著しく温暖となり且つ弛緩して分泌増加す又前庭腺子宮膈部等は變化して帯青赤色を呈し大陰唇に時として静脈の怒張を現はすことあり

第三節 月經

妊娠中は全く月經閉止するものなれども稀には始め一二箇月の間尙月經を現すことあり

第四節 乳房



乳房は第三箇月の頃より漸次増大し柔軟となり妊娠末期に至り之を壓搾すれば稀薄水様の乳汁を分泌す之を初乳と云ふ乳量はその着色を増して赤色或は黒褐色を呈すべし

### 第二項 生殖器以外の變化

妊婦の容貌多くの婦人は固有の光澤を失ひ清麗花の如き顔貌も變じて皮膚の弛緩を現はし且つ屢々黄色となり眼の周圍に青色の輪を纏ふに至る而して妊婦全體の形狀は腹を強く前方に突出し上體を後方に反張せり消化器系に於ては悪心嘔吐殊に早朝或は空腹時に來る嘔吐便秘食物嗜好の變化等を現はし又時としては唾液の分泌著しく増加するものあり

又忽ちにして愉快を感じるものなり時としては往々卒倒することあり

血行器系に於ては心臟の機能増進して心悸亢進胸内苦悶を來し且つ血液の頭部に輻輳するが爲め眩暈血等

を致す又子宮増大の爲め骨盤内の靜脈を壓迫し以て血液の還流を妨げ下肢に浮腫を來すことあり

泌尿器系に於ては屢々尿意頻數となり時としては尿閉を來すことあり

呼吸器系 妊娠する時は腹部膨大するが故に呼吸運動を妨げられ呼吸に苦悶を感じる

皮膚 妊婦の皮膚には所々に着色を現すものにして眼

圍乳暈白條線部臍部外生殖器等に於て褐色を呈す又腹部

の膨大によりて其部の皮膚緊張し皸裂を生じて皮面に帯

赤色の線條となり現はる之を妊娠線と云ふ此線は分娩後白色に變じ永く遺残するものなり時として乳房の膨大著しき爲め此部にも妊娠線を呈することあり

### 第二十一章 妊娠の徴候

婦人妊娠すれば上述の如き種々の變化を呈すると雖亦他の疾病に於ても之に類する症狀を呈することあり故に其妊娠なるや否やを判断するは決して容易なるものにあらず今妊娠の徴候を三種に區別して説明すべし

第一 不確證 妊娠の生殖器以外に發する變化にして即ち神経系消化器系泌尿器系循環器系呼吸器系及び皮膚等の變常之なり

第二 疑證 妊婦の生殖器に發する變化にして即ち月經の閉止殊に平素整順なるものと停滞(二)子宮の増大

及び其軟化(三)膈内の温暖分泌の増加及び膈壁の着色(四)乳房の増大着色

此等の徴候は略々其妊娠たることを定め得べきを以て疑證の名ありと雖未だ確實なるものと云ふを得ざるなり

### 第三 確證

胎兒より發する徴候にして即ち(一)胎兒の自

覺(四)胎兒各體部を明かに觸知し得ること

此等の徴候は妊娠の五箇月以後に非ざれば發せざるを以て其以前に於ては確實なる妊娠の診断を下すこと能はざるものなり

### 第二十二章 妊娠各月の徴候

妊娠時期を診断せんには妊婦自己の證言のみを以てするは往々正しからざる事あり故に之を確むるが爲めに

赤色の線條となり現はる之を妊娠線と云ふ此線は分娩後白色に變じ永く遺残するものなり時として乳房の膨大著しき爲め此部にも妊娠線を呈することあり

### 第二十一章 妊娠の徴候

婦人妊娠すれば上述の如き種々の變化を呈すると雖亦他の疾病に於ても之に類する症状を呈することあり故に其妊娠なるや否やを判断するは決して容易なるものにあらず今妊娠の徴候を三種に區別して説明すべし

第一 不確證 妊娠の生殖器以外に發する變化にして即ち神経系消化器系泌尿器系循環器系呼吸器系及び皮膚等の變常之なり

第二 疑證 妊婦の生殖器に發する變化にして即ち(一)月經の閉止殊に平素整順なるものゝ停滯(二)子宮の増大

及び其軟化(三)膈内の温暖分泌の増加及び膈壁の着色(四)乳房の増大着色

此等の徴候は略々其妊娠たることを定め得べきを以て疑證の名ありと雖未だ確實なるものと云ふを得ざるなり

### 第三 確證

胎兒より發する徴候にして即ち(一)胎兒の自

心音の聴取(二)臍帶雜音の聴取(三)胎動音の聴取及妊婦の自覺(四)胎兒各部を明かに觸知し得ること

此等の徴候は妊娠の五箇月以後に非ざれば發せざるを以て其以前に於ては確實なる妊娠の診断を下すこと能はざるものなり

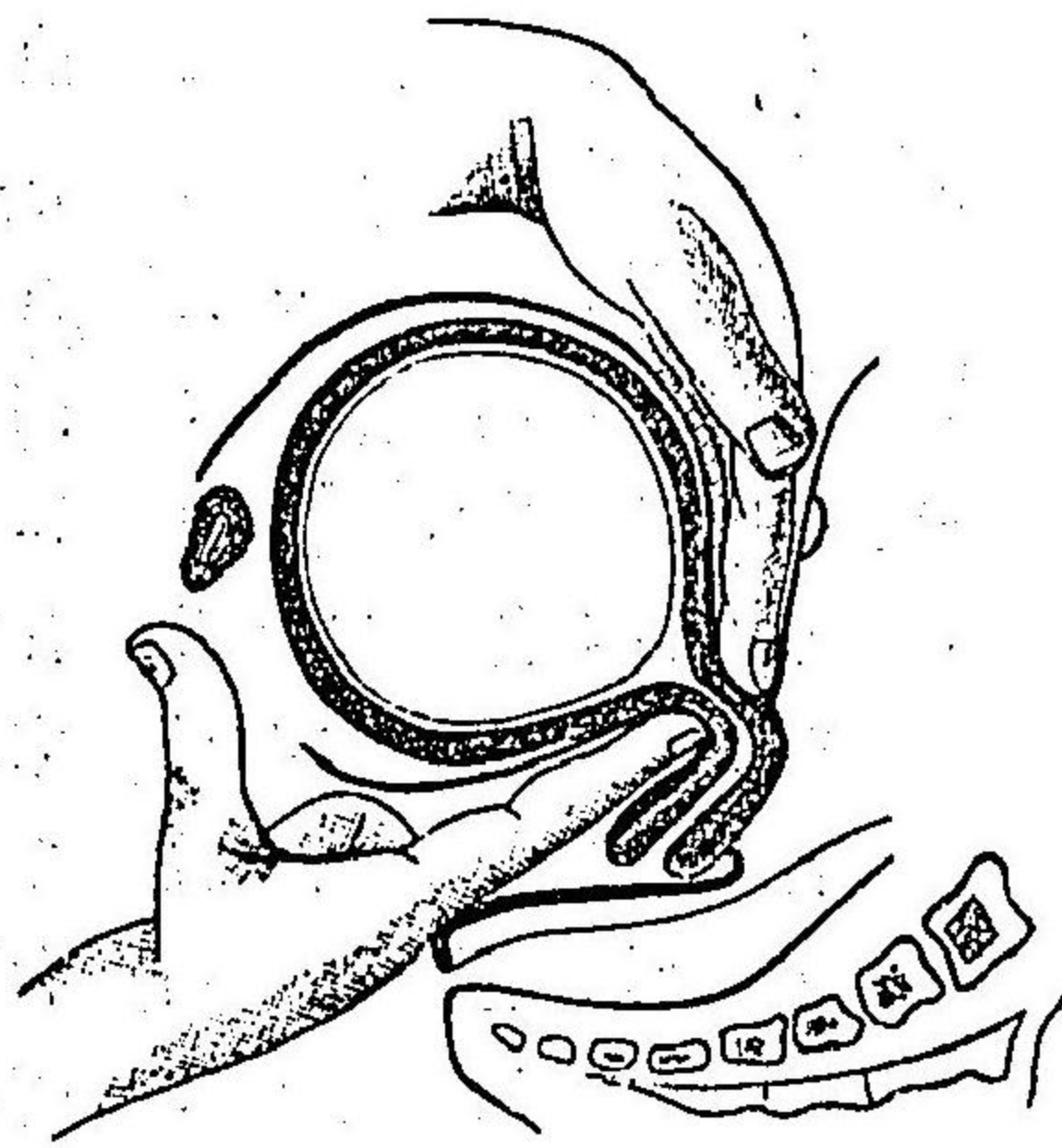
### 第二十二章 妊娠各月の徴候

妊娠時期を診断せんには妊婦自己の證言のみを以てするは往々正しからざる事あり故に之を確むるが爲めに

検査を施すを緊要なりとす而して初妊婦に於て其各月を  
 鑑定すべき徴候は左の如し  
 第一箇月末に至れば膈内の分泌頗る増加し且つ一  
 般に温暖となり熱練なる検査による時は子宮體の柔軟と  
 なり稍々腫大せるを觸るべし妊婦の自覺症として下腹  
 内に温氣を感じ胃部苦悶悪心嘔吐異嗜等なり

ヘーガル氏の妊娠徴候  
 妊娠時に於て其月經閉止の後第一箇月にして一手を膈  
 内より挿入し一手を腹壁に貼てふ雙合診を行ふときは  
 子宮頸の子宮體に移る部は著るしく柔軟となりて殆ん  
 ど消失せたるが如きを覺ゆべし之れ妊娠を鑑別する  
 に頗る緊要なる徴候にして名けてヘーガル氏の妊娠徴  
 候と云ふ  
 此の如き變化を呈する所以は妊娠時に子宮體は頸部に

第三十二圖



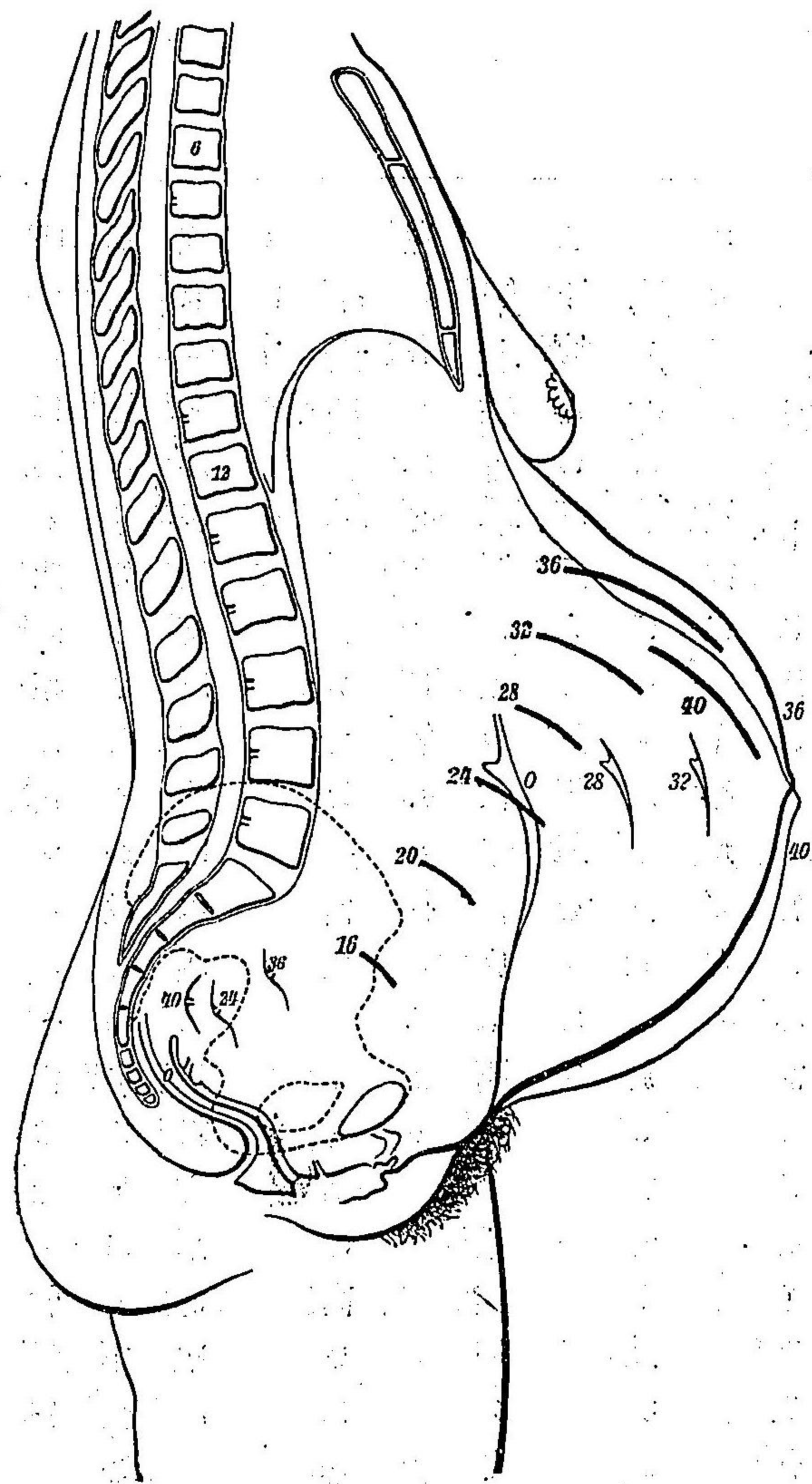
ヘーガル氏妊娠徴候

其部と子宮頸部との間は恰かも間の斷れて消え失せたる  
 が如く覺ゆるなり  
 第二箇月末に至れば子宮は殆んど鷲卵大に達し益々  
 柔軟となる然れども其頸部は體部に比し稍々硬し故に之  
 を検査する時は恰も子宮は頸體の中間に於て兩斷せられ  
 たるが如し之をヘーガル氏妊娠徴候と稱す但し此徴候は

他の子宮疾患に在りては決して現はるゝものにあらず  
 第三箇月末に至れば子宮は手拳大となり殆んど小骨  
 盤内を充たし柔軟餅の如くなるを觸るべく膈壁及び他部  
 には着色を始め下腹部は少しく凸出するを認む妊婦の自  
 覺症は益々増加し尿意頻數便秘神経痛等を來し時として  
 は下肢の浮腫を現すことあり是れ子宮増大の爲め膀胱直  
 腸其他骨盤内に存する血管或は神経等を壓迫するに由る  
 而して此月より乳房は稍々緊満を來し着色するに至る  
 第四箇月末に至れば子宮凡そ兒頭大となり全く骨盤  
 内を充たし其底部は骨盤入口上に出づ故に外部より明か  
 に恥骨縫際上に於て球形を成せるを觸知し得べし又外診  
 上能く子宮血管の雑音を聴取し得べく時として胎動音を  
 を聴く事あり  
 第五箇月末に於ては子宮底は臍と恥骨縫際との中間

に位し胎兒の心音は此月より聴取し得べく妊婦は胎動を  
 感ずるに至る此時期に達すれば子宮は全く骨盤内を出て  
 周圍を壓迫することなきが故に壓迫に因れる不快の妊娠  
 症狀即ち浮腫便秘神経痛等は頗る消散し悪心嘔吐も亦全  
 く治するものなり  
 第六箇月末に於ては子宮底は凡そ臍の高さに達し胎  
 兒の各體部を明かに觸知し得るに至る  
 第七箇月末に至れば子宮底は臍上一指横經の部に達  
 し下腹部は膨大して妊娠線を現はす  
 第八箇月末に於ては子宮底は臍と胸骨劍狀突起との  
 中間に達し臍窩は全く平坦となる  
 第九箇月末に至れば子宮は心窩部に昇り其底部は劍  
 狀突起下に達し側部は全く肋骨弓に接し全腹到る所緊満  
 す又子宮外口は僅かに哆開すと雖内口は堅く閉鎖するも

のなり妊婦は此時期より子宮の収縮を自覺し胎兒の運動  
第三十三圖 妊娠各期の子宮底子宮腔部及び腹壁(天然大の五分一)



す示を週各娠妊は字數

は益々其強さを加へ爲めに安眠し得ざる事あり且つ子宮の著しき膨大の爲め肺臟壓迫せられ呼吸困難を來し妊婦の苦悶は今や其極度に達すべし

第十箇月末に於ては子宮再び下降して其底部は八箇月末同高の位置に至り妊婦は呼吸輕易となるを覺ゆ而して臍窩は突出するに至り兒頭は全く骨盤内に固定せられて移動せず且つ子宮腔部は消失し薄き線となりて子宮口を圍む陰部は著しく弛緩して分泌を増し膀胱直腸は壓迫せらるゝにより兩便共に頻數の感を生ず

以上述べたる所により子宮底の位置を検して殆んど確實に妊娠の月數を知るを得べし但し八箇月と十箇月とは子宮底同一の高さにあるを以て之を區別せざるべからず其鑑別點左の如し

第八箇月末

第十箇月末

一 胃部の腹壁頗る緊満す 弛緩す  
 二 臍窩は平坦となる 突出す  
 三 兒頭骨盤入口上に移動す 既に固定す  
 四 子宮腔部は尙一指節の長さをも有す 楔状をなし又は全く消失して觸れる能はず

經妊婦其他に於ける種々の變状 經妊婦に於ては既に一旦妊娠を經過せるものなるを以て其變化は初妊婦の如く正しからずして種々の差異あり

第一腹壁は既に弛緩せるが故に子宮底は正しく上昇することなく主として前方に挺出すべく其甚だしきものは腹壁張状を成して下垂するに至る之を懸垂腹と云ふ

第二兒頭は分娩に至るまで全く骨盤内に固定せずして移動し易きものとす

第三子宮腔部は妊娠末期に至ると雖全く消失するこ

となし

第四子宮口 妊娠第九箇月に至れば内外口共に哆開して頸管内に一指を挿入し得可し

第五胎動 經妊婦の胎動を感ずるは初妊婦よりも二週間早きものとす

其他初産婦に在りても羊水多量なるか胎兒大なるか變胎なる時は子宮底は過度に上昇し正規に従ふものにあらず又骨盤の狹窄あるときは兒頭骨盤内に進入し能はざるが故に第十箇月に至るも子宮底下降せず時として懸垂腹を生ずることあり

第二十三章 分娩期日算定法

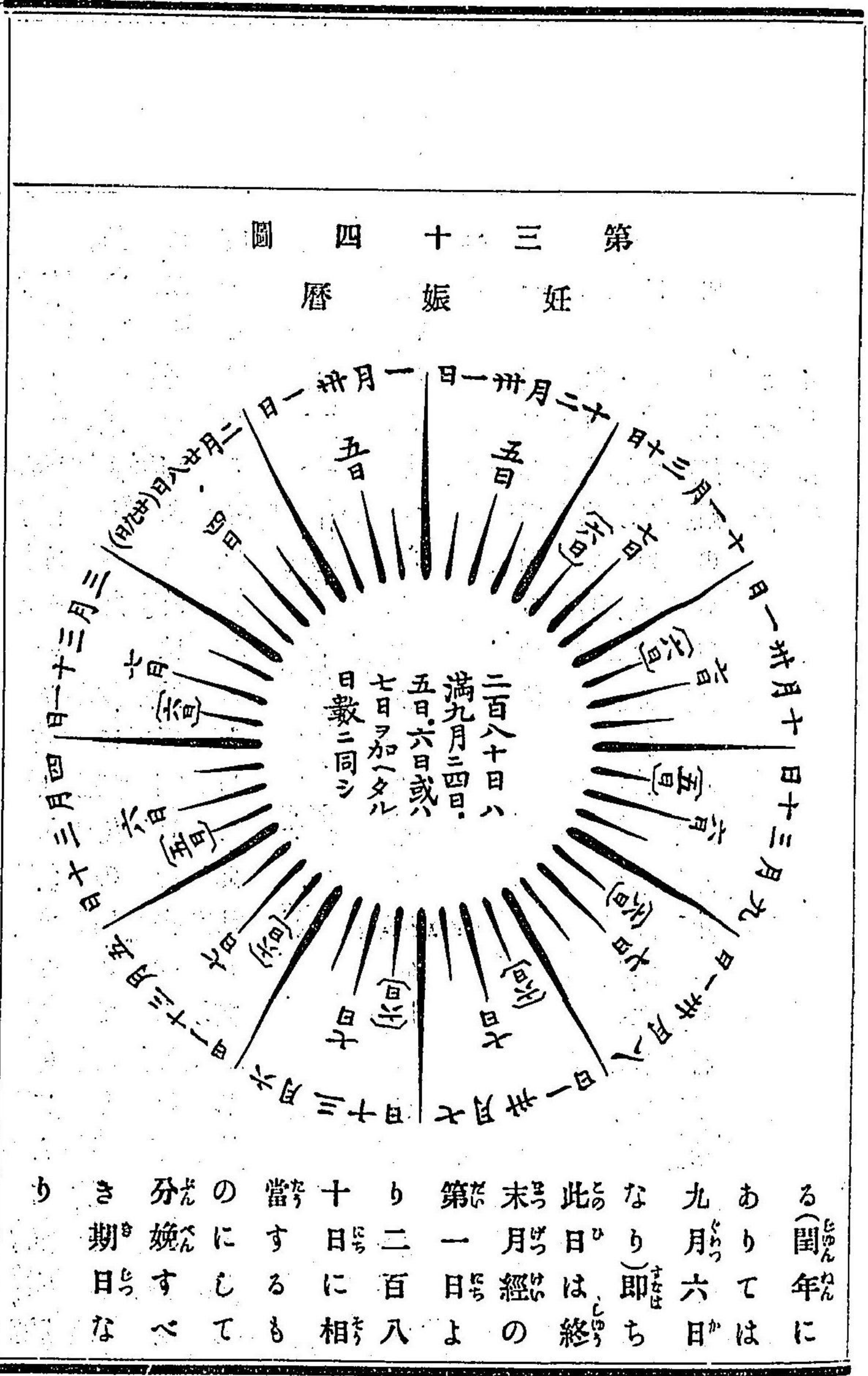
妊娠の持續は受胎後平均二百八十日なるが故に分娩期日は即ち終末月經の第一日より算じて二百八十日に相

當する日なりと雖毎常之を計算するは頗る煩はしきを以て單簡なる方法により之を算出するなり

**第一法** 終末月經の第一日より三箇月を減じ之に七日を加ふるの法にして例へば今一月の十日に最終月經を見たりとすれば之より三箇月を減じ十月十日を得更に七日を加ふれば十月十七日となる即ち此日に於て分娩するものと概知すべし

**第二法** 前法よりも更に精密なる算定をなさんとすれば第三十四圖に示すが如き分娩日測算曆により之を算出すべし其法は即ち圖中矢の方向に向て終末月經の月より三箇月を算へ各月の下に記せる數字を最終月經の第一日に加へきものとす括弧内に記せるものは閏年に用ゆるものなり今十二月一日を其終末月經の第一日とすれば左方に三箇月を算へ九月一日を得其一日に六日を加へ九月七日となる

第三十三圖 妊娠 曆





第三法 胎動初發の時期より算するものにして通常胎動は二十週より發起す故に妊婦の始めて之を自覺せし日に二十週を加ふる時は分娩期日を得べし然れども胎動を感ずるは頗る不確實なるを以て此法は實際に應用し難し

### 第二十四章 妊婦の検査法

妊婦を検査するには必ず先づ次の順序に由り問診すべし

- 一 姓名年齢及び職業
- 二 既往疾病の有無
- 三 月經初發の年齢及び其順不順並に日數
- 四 既往妊娠の有無及び其經過殊に産科手術を要したるや否や
- 五 終末月經の期日

六 胎動の有無及び其初發の時期  
七 妊婦終末期に於ては子宮の下降せる感ありや否並に其下降を初めたるの期日  
此の如く問診するの後に産科的検査法を施すべきものにして之に三種あり外検査法内検査法雙合検査法之なり

#### 第一項 外検査法

外検査法とは身體外部を検するものにして之に視診觸診聽診の三種あり

#### 第一節 視診

視診とは妊婦一般の状況を視察するものにして之を區別すれば次の如し  
一般の検査 既に問診を終らば次で妊婦の體格營養歩

行の狀態、脊椎の彎曲等を檢すべし  
 乳房の検査 乳房の形狀、乳頭の大小、乳腺の狀態、乳暈の  
 着色、疾病の有無等を視察す  
 腹部の検査 腹部の大小、形狀、臍窩の狀態、妊娠線の有無  
 並に其新舊等を視診するものにして、通常腹部の觸診を行  
 ふの際、施すべきものなり  
 下肢の検査 浮腫及び靜脈瘤の有無等なり

第二節 觸診

觸診とは手指を以て觸察するものにして、産科的診斷  
 上最も必要なる診法なり之を別ちて腹部及び骨盤の検査  
 とす  
 腹部の検査 妊婦を仰臥せしめ、兩脚を屈し、上半身を稍  
 高くし、衣服、腹帶等は全く之を緩解せしむ、但し可成多くを

露せしめざらんことを務むべし、而して先づ視診により  
 て該條下に記せる諸種の狀態を檢し、次に豫め温めたる兩  
 手を用て檢すべく、此際検査者は妊婦の一侧に座し、其顔面を  
 對向すべし、而して此法に四式あり、(卷首の彩色圖譜を見よ)  
 第一式 在りては、検査者其兩手指を伸べ、指端を近接せ  
 しめ、八字形に腹壁の中央部に置き、次に兩手を此位置に  
 保ち、つゝ同時に軽く上方に移して、子宮底に貼し、其部をか  
 かへるが如くにして、檢す  
 此の如くする時は、(一)子宮底の部位を明かにし、(二)胎兒の  
 大小及び其位置の縦横を判じ、(三)妊娠の時期を診定し、得可  
 く(四)子宮底部に存するもの、頭部なるや、臀部なるやを認  
 識し、得べし、(第三十五圖を見よ)  
 第二式 至れば、子宮底部の兩手を左右に開き、手指は  
 常に併列せしめて之を側腹部に移し、以て子宮の側壁に貼

此際多くは一手に小部分即ち四肢を觸れ他手は兒背に  
 應ずべし然れども若し胎兒横位を取る時は一手に頭部を  
 他手に臀部を觸知するなり此法によりては(一)胎兒の胎向  
 (二)心音聴取の部位等を診定し得べし(第三十六圖を見よ)  
 第三式 左若くは右の一手を以て其拇指を強く開き耻  
 骨縫際上に於て拇指及び中指の間に兒の先進部を把握す  
 べし此法に於ては(一)先進兒部の頭部なるや或は臀部なる  
 や(二)先進兒部の骨盤内に固定するや否や等を識別し得可  
 し(第三十七圖を見よ)  
 第四式 産婦を側臥に就かしめ検査者は其背側に座し兩  
 手尖を兩鼠蹊部の上に加へ徐々に骨盤の側壁より深く其  
 中に進ましむ此法は先進兒部の深く骨盤内に進入せる際  
 に施すべきものにして通常は第三式を以て足れりとす(第  
 三十八圖を見よ)

各體部觸診上の狀況

兒頭は圓形にして頗る固く之を一手或は兩手間に把  
 握し振動せしむる時は兩側の手指に衝突するを感知すべ  
 し之を浮遊運動と云ふ此運動は頭部の特徴にして臀部に  
 於ても存することなきにあらずと雖頭部の如く著しから  
 ず  
 臀部 なるときは其形狀不正にして頗る柔軟なり胎兒  
 の頭部及び臀部を稱して大部分と名づく  
 背部 は手掌を貼して之を試むるに平圓にして長き面  
 を觸知すべし  
 四肢 は即ち小部分と稱し大小不正なる突起状をなし  
 て觸知し得らる  
 骨盤の検査 腹部の検査を終らば骨盤外部の狀態を檢

すべし即ち先づ一手を骨盤の後側に他手を前側に貼し薦骨及び耻骨縫際の突出せる度並に前後の廣狹を概診し次ぎに一手の拇指と小指とを伸展し兩腸骨前上棘に達し得ることなきやを検するを要す若し容易く達する時は其骨盤狭きを知るべし然れども此等の診法は甚だ不完全なるを以て精密に検査せんと欲せば骨盤計を以て第一編第三章大骨盤の條下に記せる所の諸経線を計測すべし

### 第三節 聴診

腹部の聴診を行ふには妊婦を仰臥せしめ觸診によりて得たる部位に聴診器を貼すべし若し此器を有せざる時は薄き布片を腹上に置き直ちに検査者の耳を貼して聴診するを要す而して之により聴取し得べき音に六種あり即ち(一)胎児の心音(二)胎動音(三)臍帶雜音(四)子宮血管の雜音(五)腸

内瓦斯の雜音(六)腹部大血管の雜音以上前三者は胎児より發し後三者は母體より來るものなり  
胎児の心臓音は兒背の子宮壁に接したる部に於て最も明かに聴取し得べしと雖も若し胎勢の變化即ち頭部を胸壁より離し却て後頭を背部に接せる時は胎児の胸面は背面より子宮壁に近きを以て心音は小部分の存する方向に於て聴取するを得るものなり而して其音は他の諸音に比し最も明瞭にして規則正しく恰もトツと云ふが如く響くべし其數は平均百四十至にして通常之より以下なる時は男兒とし以上なる時は女兒となす若し母體或は胎兒運動するか母體の體温昇騰するか又は胎兒當さに窒息せんとする時は其數を増加するものなり  
胎動音は胎兒の運動する際に發し恰も指を以て軽く

物を打つに類せる甚だ低くして短き音にしてことごとく云ふが如し稀には妊娠第四箇月の終りに於て心音に先ち之を聴取し得ることあり

臍帯の雑音 は心音に一致し恰も軽く吹くが如き雑音にして臍帯に壓迫若くは結節を生ずる場合に於て血液其狭められたる血管内を流通する時に發する音なれば稀れに聴くことあるのみ殊に臍帯の頸部に纏絡せる際に於て能く聴取し得べし

子宮血管の雑音 は妊娠により増大せる血管内に血液の流通する音にして子宮の兩側殊に下方に於て聴取し得べく其數は母體の脈搏に一致し恰も風の吹き鳴るが如き音なり

腸内瓦斯の雑音 は母體の腸内に於て瓦斯の運動するが爲めに生じざるくこと云ふが如く恰も下痢時と同様

の腹鳴なり

腹部大血管の雑音 は母體腹部大動脈中に血液を流通する音にして脈搏と一致し軽く敲くが如き低き音なり

### 第二項 内検査法

内検査法 は之を内診と稱し手指を腔内に挿入して骨盤及び胎兒の状況を検査するを云ふ而して之を行ふには嚴重なる殺菌法乃ち殺菌的清潔法を施すに非ざれば決して手を下すべからず

殺菌法 とは細菌を撲滅して之を無害ならしむるの法にして若し之を忽にする時は遂に産婦褥婦若くは初生兒の生命をも損するに至るものなれば助産婦たるものは時も忘却すべからざるなり

細菌 とは極めて微にして顕微鏡の力によらざれば到

底見ることを得ざる所の生活物にして空気が塵埃或は吾人  
 身體の表面其他凡て物體の表面に多く存在するものに  
 て若し此者が一個たりとも身體内に入る時は忽ち繁殖し  
 て數萬の多きに達し以て劇しき疾病を發す此の如く細菌  
 身體内に襲來し障害を呈するを傳染と云ふ吾人身體の表  
 面には上述の如く多數の細菌を附着すれども其害を致さ  
 ざるの理由は即ち身體の表面には表皮ありて能く之を被  
 ひて保護し其進入を防ぐに由る今此部に損傷を生じ假令  
 目視し能はざる小創なりと雖も細菌は容易く進入し以て  
 傳染の危険を發すべし殊に産婦褥婦等は多くの創傷を生  
 殖器に有するのみならず此部の組織は血液に富み著しく  
 柔軟なるを以て能く細菌の浸入に適し且つ惡露なるもの  
 は大に細菌を培養するに良好なるものなれば其危険の甚  
 だしきや言を俟たざるなり此故に助産婦は必ず自己の

手及び検査を受くる婦人の陰部に嚴重なる殺菌法を行ひ  
 細菌を撲滅せしむるを必要とす而して殺菌法の目的を達  
 せんには左の消毒薬を用ゆべし  
 石炭酸 石炭酸は從來多く用ゆる殺菌薬にして無色の針状  
 結晶をなす一種の臭氣と燒灼味を供へ貯藏して久しきを  
 経たるものは溶解流動して赤色を帯ぶるに至る其濃厚溶  
 液は強き腐蝕性を有するを以て之を用ゆるには豫め稀釋  
 せざるべからず即ち通常二乃至三布仙となして用ゆれど  
 も其溶解法の困難なるを強き刺激性を有するに依り獨逸  
 帝國にありては近來助産婦にリゾールを代用せしめたり  
 石炭酸水を調製するには先づ結晶石炭酸九分を取り之に水一分を  
 混じり溶解せしめて蓋へ置き今一布仙即ち百倍のものを製せんとせ  
 ば一瓶中に溶解石炭酸一瓦と水九十九瓦とを入れ能く之を振盪し  
 て全く水と混和するに至らしむべし左に混合の液量を擧げん(次表  
 %は布仙の事なり)  
 稀釋布仙 溶解石炭酸 水

一% 即ち百倍の石炭酸水 一〇〇  
 二% 即ち五十倍の石炭酸水 二〇〇  
 三% 即ち約三十三倍の石炭酸水 三〇〇  
 四% 即ち二十五倍の石炭酸水 四〇〇  
 五% 即ち二十倍の石炭酸水 五〇〇  
 リゾールは石炭酸に比すれば尤も汎く應用せらるる殺菌薬にして黄褐色の強き臭氣を有する液体なり通常百倍となして用ゆ其五百倍乃至二百倍のものは白色乳様の潤濁を生ずれども百倍に於ては無色となり五十倍乃至七十倍の溶液は日本酒の如き色を呈するを以て着色の度により溶液の強弱を推知し得可し但し水質の不良なる者に殆んど乳色に變ずることあり  
 (二) 手指を滑澤ならしむること (三) 手指を滑澤ならしむること (一) 水に  
 溶解し易きこと (二) 手指を滑澤ならしむること (三) 手指を滑澤ならしむること

澤ならしむるが故に内診の際油を塗るを要せざること  
 石炭酸よりも稀薄溶液を用ゆるを以て皮膚粘膜等を刺戟  
 すること少なき等なり然れども其價石炭酸よりも少しく  
 高きの不利あり  
 昇汞は石炭酸及びリゾール等に比すれば強き殺菌力を  
 有するものにして白色の粉末なり此く殺菌力強きが爲  
 めに其毒性も亦劇しく僅少量を内服するも直ちに人を殺  
 すに至る其溶液は水様にして他の藥物と混同し易きが故  
 にフクシンと稱する赤色の粉を以て着色し用ゆ通常千倍  
 となし賞用すれども五千倍若くは一萬倍の溶液と雖も能  
 く殺菌力を有するものなり此の如く其殺菌の効力に至る  
 は他薬に勝ると雖も金屬を浸蝕する性質あるを以て金  
 屬器械の消毒に適せず且つ金屬器に盛ること能はざる  
 の不便あり

第一項 手指の殺菌法

手指の殺菌法 を行ふには器械的清潔法を行ひ次で  
 殺菌薬を以て洗滌すべし  
 先づ肘關節に至るまで上衣を脱却し指尖の爪を剪り爪  
 鋏子を用ひて其端を圓滑にし且丁寧に爪の裏面に附着せ  
 る汚垢を去り微温湯石鹼及び刷子を以て五分間手及び前  
 腕を綿密に摩擦し更に温湯を以て石鹼を洗ひ去り後千  
 倍の昇汞水を以て洗ふべし但し實地上尤も便利なるは始  
 めより一布仙のリゾール溶液と刷子を以て摩擦するもあ  
 り  
 又始め五分間温湯石鹼刷子等を以て摩擦し洗滌せるの  
 後ち手指を酒精中に投じ再び刷子を以て三分間摩擦し次  
 で二三分間千倍の昇汞水中に投ずるの法あり此法は殺菌

完全なりと雖も複雑なるを以て實地上に於ては前法を用  
 ゆるを便なりとす  
 此の如くにして消毒したる手指は決して手拭其他の布  
 片を以て拭ふべからず若し又殺菌せざる物品に觸ると時  
 は再び殺菌法を行ふべし

第二項 内検査の方式

内検査 を行はんとせば先づ被検査者に仰臥位置を與へ  
 膝を屈し且つ之を開かじめ腹部より以下には清潔なる廣  
 き布片を被ひ臀下には小なる枕子を送入し且つ廣き受水  
 盤を挿むべし而して被検査者の一侧にはイリリガートルに  
 殺菌液即ち一布仙のリゾール水若しくは二布仙の石炭酸水  
 を盛り凡そ床上より三尺の高さに懸け助産婦は被検査者の  
 兩股間に座し一侧の膝部を以て受水盤の前端を支へ殺菌



したる手指を以て石鹸温湯刷子を用ひ陰阜大腿の内面肛門の周囲等を丁寧に洗滌し次でイルリガートル中の殺菌液を以て能く洗滌すべし而して其尿管を膈内に挿入し此部を洗滌して不潔物を除去し然る後助産婦は尙一回手指の殺菌法を行ひ以て内診すべきものとす又外陰部洗滌の際兼て此部の視診を施すを良とす即ち糜爛或は浮腫等を存せざるや又は分泌物多量なるや否や其他處女膜の状態耻骨弓の廣狭座骨結節の距離等を檢知すべし

内診するには一手の拇指及び示指を伸べ他の三指を屈し之を陰部に進め他手の拇指及び示指を以て小陰唇を開き而して検査に用ふべき手指は其指腹を後方に向け伸展せる示指を後連合部に貼し膈の後面に沿ふて骨盤誘導線の方角に従ひ徐々く深部に送り次で指腹を前方に向はしむ其際骨盤の側壁に於て一の突起を觸る之即ち坐骨棘

にして骨盤廣部及び狹部の境界部なりとす而して前方に來らしめたる示指は深く前膈穹窿部に至り膈壁を隔て其上方に在る胎兒の先進部を探るべし次で子宮膈部を周りて其状態を檢し且つ指端を子宮口に送り外口の状況を知り終りに示指を後方に進め容易く薦骨岬に達し得るや否やを検査すべし若し達するを得ば其骨盤は狭く分婉に害あるものと知るべし

今内診によりて檢知し得べき事項を擧ぐれば

第一 膈の後壁に於て挿入したる示指と外方に存する拇指との間に會陰を挟み其の硬軟により會陰の延張性を檢知し且つ尾骶骨部に達し薦尾關節の運動性を試むべし

第二 膈の前壁に於ては先づ尿道下壁を壓し其疼痛の有無及び壓迫によりて尿道口に膿汁を排泄すること

なきや否や等々を検し、次に前腔穹窿部に至りて其上方に來れる胎兒の先進部の形狀、硬軟、高底、及び移動性の有無等を知るべし。

第三子宮腔部

に就きては其長短、形狀、硬軟等を檢すべく子宮口部に在ては形狀、口縁の状況及び既に開大せるや否や及び開大の程度等を診すべし。

第四全腔

に就て腔腔の廣狹及び其延張性、耻骨弓の廣狹を詳かにせんことを要す。

第三項 雙合検査法

雙合検査法とは一手の示指を内診に於けると同方法によりて腔内に送り同時に他手を腹壁上に貼し子宮又は胎兒を下方に壓し之を内手との間に狹み子宮の大さ形狀硬軟及び胎兒部分并に其移動性等を明かに觸診するもの

を云ふ此法は殊に妊娠初期に於て必要にして未だ恥骨總際に出でざる子宮の狀態を知らんには此法によるの外なきと雖も助産婦は猥りに施すべきものにあらず

第二十五章 検査法に於ける一般の注意

第一 検査を施す前には豫め膀胱及び直腸を空虚ならしむべし

第二 検査の際は無用の體部を露出すべからず其他總て妊婦の嫌ふことは成るべく避くべし殊に無用の人を近けざるを要す

第三 検査は一度の往診に一回となし再三反覆して施す様のことあるべからず

第四 外検査法は妊婦を診する毎に丁寧に之を行ひ成るべく内診の必要なからしむべし

第五 内診は止むを得ざる場合の外之を行ふべからず  
一度綿密なる注意を以て内診を施せば能く其検知せる所  
を記憶すべし而して助産婦の通常内診すべき時期は胎胞  
破裂直後と産褥第九日目との二回なりとす若し分娩後九  
日を経ずして異常の状態を來したる時は内診せずして速  
に醫の診を乞ふべし

第六 助産婦若し産褥熱其他細菌の傳染に由て發すべ  
き病者を取扱ひたる時は此等患者を遠ざかりてより一週  
間の後ちにあらざれば妊婦、産婦、褥婦等を診すべからず  
而して一週間後に於て診察する際には先づ沐浴し新しき  
衣服と交換し手指は特に嚴密なる殺菌法を施行せざるべ  
からず

第七 此等の病家に至り検査するには其前必ず衣服を  
交換し全身浴を行はんことを要す凡て屍體に接觸したる

欠

MISSING

第二十七章

胎兒死亡の徴候

胎動全く止み且つ反覆注意して診査するも心音臍帶雜音が及び胎動音は共に聴取することを得ず而して羊水の吸収により子宮は漸次に變小し柔軟となる臍内よりは多量の分泌物を漏し妊婦は倦怠消化不良下腹寒冷時々悪寒等を感ぜし時としては母體の動搖に従ひ異物の腹内に移動するが如きを訴ふ乳房は漸々弛緩するに至るべし

第二十八章

數胎

數胎とは同時に二兒以上妊娠するを云ふ之に二胎即ち雙胎三胎四胎五胎等の別あり此中最も多きは雙胎にして凡そ八十九回の分娩中一回ありと云ふ

雙胎の原因

雙胎は二個の卵同時に受胎するに由て來るものあり或は一個の卵中に二個の精蟲進入して之を生ずるものあり前者を二卵性雙胎と云ひ後者を一卵性雙胎と稱す其他の數胎に於ても之に同じき理由により成生するものとす

雙胎に於ける卵膜及び胎盤の關係

羊膜は胎兒外皮の一系なるを以て其一卵性或は二卵性なるに關せず各別に之を有すべく絨毛膜は卵の外圍より生ずるを以て二卵性のものにありては各別に存在すと雖も一卵性のものは一の絨毛膜中に二個の胎兒を容るゝものなり

脱落膜

は二卵性雙胎に於ても單一なるを常とすれども各卵の附着部遠隔せば時として各別に轉脱落膜を發生することあり

胎盤

は其原各胎兒より發生するものなるを以て各別に存すべきものなれども多くは互に接合し殊に一卵性のものにありては兩胎盤血管は吻合し交通を現すものなり

雙胎に於ける男女兩性の關係

一卵性雙胎なる時は常に其性を等すと雖二卵性雙胎なる時は一定せずして同性なることなり或は異性なることあり

雙胎の診斷

は決して容易なるものにあらず之を診定せんには左の徴候に注意すべし

第一 腹部の異常大

妊娠月數に適應せざる腹部の膨大は最初に雙胎の疑を生せしむべく且つ妊婦の苦悶は通常のものより甚だし

第二 腹部の中央に凹溝を生ず

是兩個の胎兒境界部なり此等の二徴候は羊水多量なるか若くは腹内の腫瘍を生ずる時は亦之を現すにより確實なるものにあらず

第三 兩胎兒の體部を明かに觸知す 是れ雙胎の確  
 徴とも云ふべきものにして即ち外検査により二個の兒體  
 部を明かに觸知し得べき場合例之は二個の兒背を兩側に  
 觸れ又は頭部子宮底に存在するに關はらず尙骨盤上に於  
 て他の一個を觸るゝ時は其雙胎たるや疑なきなり  
 第四 二箇所にて於て同強の心音を聴取す 心音を聴  
 診するには殊に注意して行ふべし今若し腹部の兩側に心  
 音を聴取するも之を以て直ちに雙胎なりと断定すべから  
 ず何となれば心音は能く一側より他側に傳へ得ることあ  
 りばなり然れども精しく之を聴診するに一個の心音他側  
 に遠ざかるに從ひ漸次に微弱となり若くは全く消失し次  
 で或る部に至れば再び高調となり以て明かに兩個の心音  
 を區別し得れば雙胎の確診を下すことを得可し  
 第五 内診に由て診定す 即ち子宮口部に於て四個

の體部を觸知するか或は二個の卵膜を觸知する時は略  
 其雙胎なるを知り得可し  
 第六 分娩時に於て知る 即ち一條の搏動なき臍帶  
 脱出せるに係はらず腹部に於て心音を聴取し得可き時又  
 は同名の手或は足二個を觸知し得る時或は一兒分娩する  
 も子宮變小せずして尙一兒の存在を診知し得る等之なり

第二十九章 妊娠の攝生法

妊娠は原と疾病にあらずと雖も甚だ之に犯され易きを  
 以て殊に其攝生法に注意せざるべからず  
 第一 飲食物 妊娠は平素習慣せる生活法を變せざる  
 を可とす故に飲食物は凡て從來の習慣に従ひ唯其量の度  
 に過ぎざる様注意すべし特に晚餐は少量にして消化し易き  
 食物を撰ぶべし大根豆類芋類の如き風氣を醸すべき不消

化物又は強き香料即ち芥子胡椒蕃椒及び酸味多き菓物例  
 之は不熱なる蜜柑又は夏蜜柑其他強烈なる酒類濃厚なる  
 茶珈琲等の如きは害あるを以て避くるを要す妊婦の希望  
 する飲食物にして害なきものは與ふるを可とす若し妊婦  
 嘔吐ある時は消化し易き食物を與へ數回食に就かしむる  
 を以て良なることあり早朝の嘔吐には臥床内にありて牛  
 乳其他の滋養品を食せしめ一時間を經て起床せしむべし  
**第二 排便及び排尿** 妊婦は多く便秘を來すものに  
 して若し之あらば務て室外の運動を營ましめ熱したる菓  
 物又は煮たる菓物を食せしめ寢時及び早朝其他一日數回  
 時間を定めて一杯の清水を飲用せしむべし殊に其空腹時  
 を良とす此の如くするも尚ほ不通なる時は温石鹼水を以  
 て灌腸を行ひ或は醫の診を請ひ下劑を服せしむべし  
 尿は妊娠の第四箇月及び十箇月に於て頻る頻數の感あ

るものなれば其度毎に速に排泄せしむべし尿管積し膀胱  
 緊満するは宜しからず

**第三 業務**

むべし唯必らず其過劇なるを避くを要す而して妊娠三四  
 箇月間は最も流産し易きが故に大に注意すべし

**第四 運動**

ものなり故に日々適當の時間を定め屋外に出て散歩すべ  
 し之に反して永く座し或は永く臥床にあり又は總て室内  
 に於て仕事をなす等は害あり即ち之が爲めに消化不良を  
 來し又は大便秘結し時として肛門に靜脈瘤を生じ又不眠  
 症神經過敏症等を發す其他舞踏飛跳乗馬平坦ならざる道  
 路の車行長途の汽車旅行或は物を提げ又は荷ふ等凡て甚  
 だしき身體の運動は大に害あり規則正しく營まじむべく決

**第五 睡眠**



して不定なることある可からず然ども若し甚だしく睡眠を貪るの時其意のまゝに放任せば血行障害及び消化不良等を發することあり

### 第六 精神の保養

妊婦は極めて精神を安靜に保たむべきものにして若し其分娩を憂うるが如き時は助産婦は温言を以て之を慰諭すべく且つ助産婦たるものは妊婦に向て難産畸形胎兒又は不幸なる分娩の事を語るべからず精神の劇じき感動は胎兒に危険を發するものなれば甚だしく驚き怒り恐れ其他非常の喜び悲しみ等は注意して避けしむべきこととす

### 第七 衣服

妊婦の衣服は季節に應じ稍温暖なるを良とする總て狭く窮屈なる衣服殊に胸部腹部等を緊縛するものは用ゆべからず又労働中は必らず之を緩めざるべからず但し之に代ふるに弾力性の胸巻を緩く締むるは害なき

ものなり又適當なる腹帯は妊娠の後半期に至れば必ずす用ゆべく殊に經妊婦にありては最も必要なるものなり

腹帯の効は(一)妊娠子宮を支へ(二)懸垂腹を防ぎ(三)早産を豫防し(四)胎兒の位置の變化を防ぎ(五)妊婦の腹部を温保し(六)身體の運動を容易ならしむる等なり

### 第八 清潔法

も亦必要なるものにして妊婦は毎日一回適宜に温浴を營ましむべし然ども長時間高温度の浴に入る時は子宮を収縮することあるが故に注意を要す虚弱なる妊婦にありては浴後一時間身體を安靜ならしむるを佳とす坐浴脚浴冷水浴又は頻回の温浴は禁すべし然らざれば流産若くは早産を致すことあり其他妊婦の頭髪は風呂梳り褌衣及び敷布は時々清潔に洗濯せしむるを要す臍内も亦多量の回数微温湯を以て洗濯せしむるを要す臍内も亦多量の

分泌物ある時は、イールリガートルを用ひ、其嚙管を僅かに膈内に送入り、一布仙の微温リゾール水を以て洗滌せしむべし。

**第九 交接** は子宮に充血を來すべきものなるを以て、流産を起すことあり、殊に第八週乃至十六週の間は注意せんことを要す。妊娠末期に至れば、必ず行ふべからず。然らざれば、産褥熱、其他の疾病を來すの危険あることを論ずべし。又流産の癖ある婦人は、交接は最も慎重ならしむべきものとす。

**第十 乳房** は温暖に保ち、衣服の壓迫を避けしめ、乳頭は毎日二三回冷水を以て洗ひ、且つ指を用て之を牽引して、其形狀を佳良にし、又時々其部に酒精を塗布して皮膚を強固ならしむべし。

### 第四編 正規分娩及其取扱法

#### 第三十章 正規分娩

**分娩** とは胎兒及び其附屬物、即ち胎盤、臍帶、卵膜、羊水等が自然の力によりて母體より排出せらるるを云ふ。胎兒を排出する所の自然の力は、之を分娩力、或は産出力と稱し、主に陣痛と稱する一種の子宮收縮力より成り、腹壓及び膈壁の收縮力も亦之を補助するものなり。而して胎兒は此産出力により母體より排出せらるるの際に於て、必ず一定の道路を通過す。産道即ち是なり。分娩に二種の別あり。

**一 正規分娩** とは胎兒及び其附屬物の排出并に胎兒の通過すべき産道及び産出力等の異常なく、所謂人の助を要せずして、天然の力により自ら出産するものを云ふ。故に又之を自然分娩、或は安産と稱す。

二 異常分娩 とは前記胎児及び附屬物又は産道或は

産出力等に異常を生じ母體又は兒體に危険を來すの恐あ

るが爲めに人の助を要するものを云ふ故に之を人工分娩

或は難産とも稱す

又分娩の時期に關し之を種々に區別す

一 定期産 とは妊娠第三十九週以後第四十週迄に分

娩するを云ふ

二 遅産 とは妊娠第四十週以上にして分娩するを云ふ

三 早産 とは妊娠第二十八週以後三十八週迄の分娩

にして小兒は既に胎外に於いて生活を営み得べきものな

り

四 流産 とは妊娠第二十八週に至らずして分娩する

を云ひ小兒は尙ほ胎外に於て生活し能はざるものなり然

ども近時學術の進歩により種々の器械例之は保育器の如

きものを發明せられたれば嚴重なる注意を與へて養育す  
る時は極めて稀に生命を保ち得べし

### 第三十一章 産道

産道 は之を二種に分ち骨部産道及び軟部産道と云ふ

一 骨部産道 とは即ち骨盤を云ひ小兒を通過せしむ

べき部位は管状をなすを以て一に之を骨盤管と稱す而し

て此骨盤は分娩の際僅微の擴張を營むものなりと雖も其

度甚だ僅少なるを以て著しき關係を有せず故に假りに之

を一定不動のものと思ふを得べし

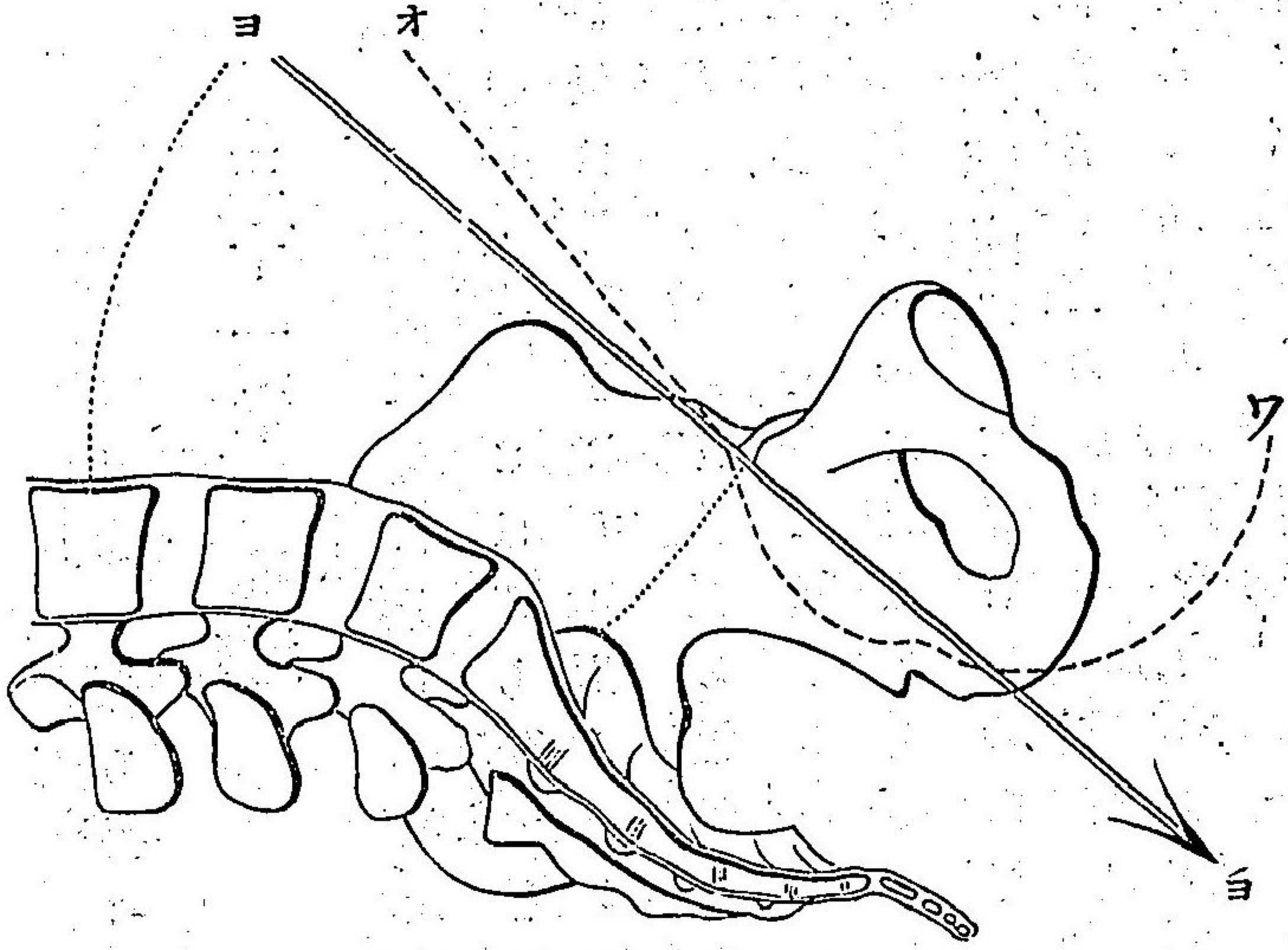
二 軟部産道 とは骨盤の内部に位するものにして即

ち子宮頸管子宮口膈及び外陰部を云ひ骨部産道に反し能

く延長して胎児の通過を自由ならしむ而して分娩の際會

陰は著しく延長し爲に膈口は全く前方に向ふを以て軟部

第四十三圖



ヲ、骨  
盤誘導  
線の方  
向ヨ分  
娩力の  
方向(天  
然大の  
三分二)

産道の方  
向は骨盤  
の誘導  
線に從ひ  
前上方に  
向ふもの  
なり故に胎  
兒は常に  
此方向を  
以て娩出  
すべし是  
れ分娩の  
處置に上  
注意すべ  
き事とす

第三十二章 産出力

産出力とは陣痛腹圧及び膈壁收縮力の三者を總合せ  
るものにして此力により胎兒を産出せしむ  
一 陣痛とは反覆發作する子宮の收縮を云ひ産出力  
中最も主要なるものなり而して其收縮する毎に産婦は疼  
痛を感ずべし此の如き陣痛の發作は不隨意にして産婦の  
意を以て之を制し或は之を促す事は弱からしむる事あ  
り又精神の劇動により或は強く或は却て弱からしむる事あ  
り又陣痛は温熱摩擦等の刺戟を子宮に施す時は之を催進  
せしめ得可し陣痛發作すれば子宮は收縮して漸次硬固と  
なり遂に其極度に達すれば殆んど石の如く硬く且つ前方  
に突隆して球状をなす故に此際手を腹上に貼すれば明らか  
かに其收縮せる子宮を觸知し得可し而して其發作時に於

ける疼痛は始め弱く先づ腰部及び薦骨部に起り次第に強くなり進で下腹部に至り陰部を通過して上腿に及ぼし其極度に至れば子宮弛緩して再び舊形に復すと共に疼痛も亦緩解すべし

陣痛に三期の別あり進行期極期退行期と云ふ

進行期とは初め子宮の収縮徐々に起り漸次強劇となるの期を云ふ

極期とは収縮極度に達し暫時間此状態に止まるの期を云ひ

退行期とは極期を終れる後も其収縮再び徐々に弛緩するの期なり

此三期を経過すれば疼痛歇み筋肉弛緩して暫時休止す之を陣痛休憩時と云ふ而して其収縮の全経過は數分間に亘ると雖も一陣痛中疼痛を感じるは僅かに六十秒乃至百

秒なりとす又陣痛は分娩期の進むに従ひ其強さと發作數を増加すれども其持続時は却て短縮すべし此の如く陣痛に發作及び休憩あるは最も緊要なる事項にして之が爲めに能く胎兒を下行せしめ娩出するを得可し若し絶えず子宮収縮する時は決して産出せしめ能はざるものとす妊婦は又腸加答兒瘻或は腸内に風氣の發生したる時若くは便秘したる時其他種々の原因によりて屢々下腹部に疼痛を發することあるを以て是を陣痛と混同せざる様能く注意すべし此の如き腹痛を假陣痛と名く

分娩痛とは子宮の収縮する際に發する疼痛即ち陣痛と胎兒が軟部産道を通するの際著しく之を延長し且つ骨盤壁に壓するが爲めに發する疼痛との二者を合せて稱するものなり故に分娩痛は兒頭將に外陰部を出でんとするに當り最も強しされば陣痛と分娩痛とは決して同一

なるものにあらざるなり

二 腹圧 とは腹壁の筋肉緊張するによりて生じ随意に之を營み得べきも分娩の末期殊に兒頭將に産出せんとするの際には不随意に起り産婦自ら之を制すること能はざるに至る而して此腹圧は大に陣痛を助けて胎兒の娩出を容易ならしむを以て産出期に於ては缺くべからざるものなり今分娩の際に兒頭既に産中に下り陣痛發作するや産婦は膝關節を屈し兩足を臺上に支へ且つ手に物體を握り深き吸氣を營み以て呼吸を停止し同時に腹筋を強く收缩せしめ大に努責して之を壓出せんとす是れ即ち腹壓なり而して陣痛休歇すれば腹壓も亦共に止むに至るべし

三 膈壁の收縮力 は敢て緊要なるものに非ず只後産を膈内より排出するの作用を有するのみ

### 第三十三章 正規分娩の經過

分娩 は常に一定の前徴ありて而して後に來るものなり前徴とは

- 一 前陣痛 の發作強く且つ頻々となる事にして妊娠の後半期に於ては時々子宮に收縮を發すと雖甚だ弱くして妊婦は之を自覺するに至らず然れども末期に達すれば疼痛を伴ひ妊婦は其收縮を感ずるに至る是即ち前陣痛なり(後章参照)而して此陣痛は漸々強劇となり頻發して殆んど眞の陣痛と區別し能はざるに至れば既に分娩の切迫せるを知るべし
- 二 外検査 を行ふに兒頭は深く骨盤内に下降し全く固定せらる
- 三 内検査 を施すに初産婦にありては子宮膈部は殆

んご消失して紙の如く薄くなり外口は僅かに哆開す。經産婦に於ては内口も亦開きて全頸管は既に指を通せしむるに至る然れども子宮腔部は短縮するのみにして消失することなし而して兒頭は初産婦に於ては頗る固定すべし。

**四 腔壁** は弛緩して柔軟となり著しく粘液の分泌を増加す。

**五 妊婦** は身體の運動に困難を感じ且つ頗る兩便共に頻數を訴ふ。

以上の分娩前徴に次で正しき陣痛を發し子宮口の開大を始む之れ即ち分娩の初期にして之より其婦人を産婦と名く。

分娩の経過を分ちて三期となす即ち第一開口期第二産出期第三後産期之なり。

欠

MISSING

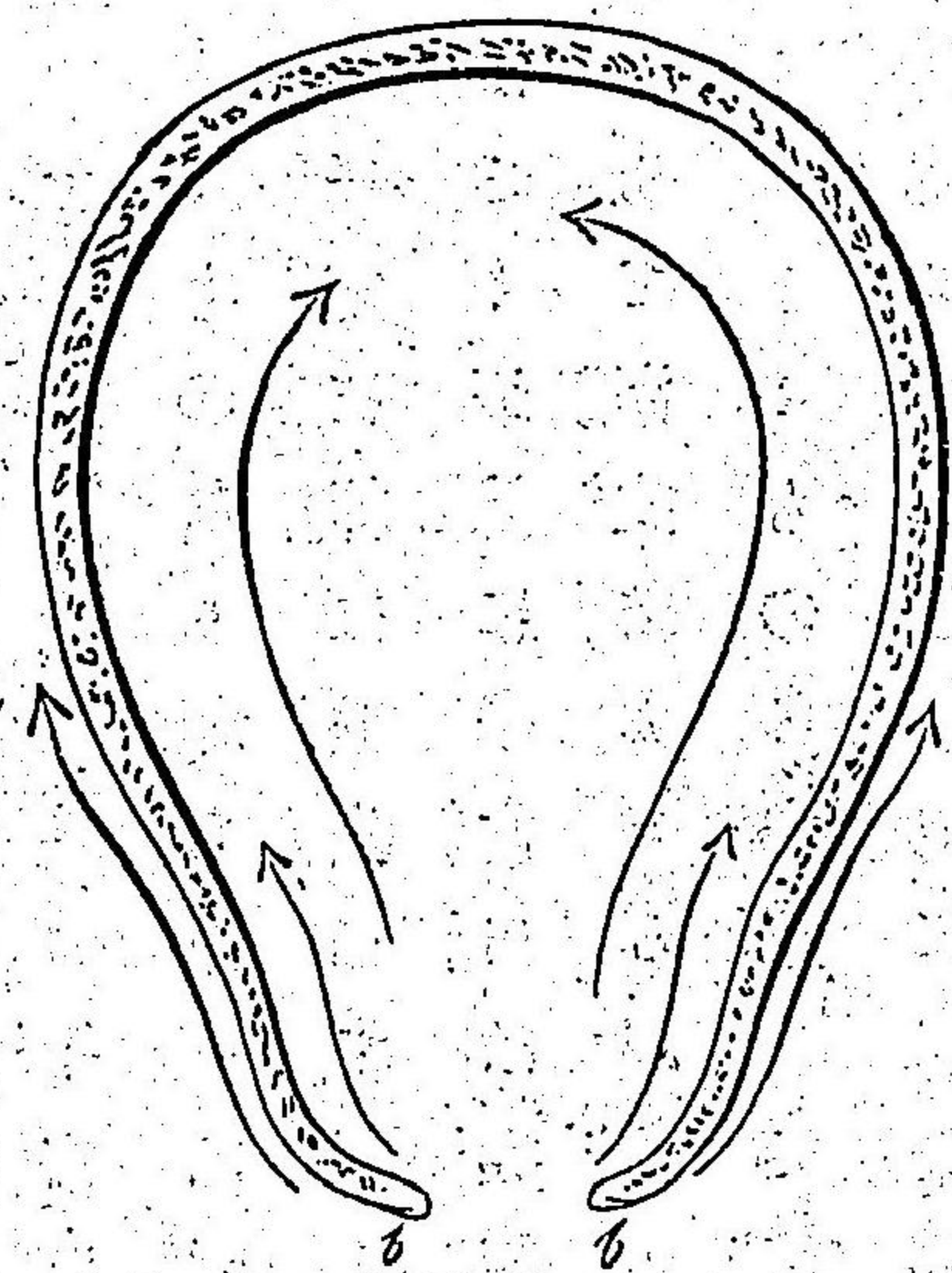


水は陣痛の爲め下方に壓せられ其一部は兒頭と卵膜間を  
 通じて下方に集まり剝離せる卵膜を球状に膨出せしむ而  
 して頻回の陣痛發作により此中の羊水は漸々増量するが  
 爲めに益々膨大して子宮頸管内に進入し遂に子宮外口に  
 達し以て之を開大す此の如く卵膜の一部が子宮外口部  
 に膨出せるものを胎胞と稱し此中に存する羊水を前羊水  
 又は第一羊水と云ふ

**三 子宮口の開大**

子宮口は二種の力によりて開大せらるゝものなり即ち第一は開口期陣痛の力にして其發  
 作毎に子宮口縁は緊張して薄くなるのみならず漸々上方  
 に牽かるゝが故に子宮口は次第に開大すへし第二は胎胞  
 の力にして漸次膨大するが爲め子宮口は自然に上方より  
 壓開せらるゝものとす而して胎胞の形成せらるゝ際子宮  
 口は陣痛の力により既に二錢銅貨大に開大せるものにし

第四十五圖



子宮開  
口期の  
状況天  
然大の  
五分一  
管を成すべし  
時は直徑十仙迷の  
大さを有し腔と一  
四分泌物の  
増多及び血液の  
混入開口期に於  
て其全く開大する

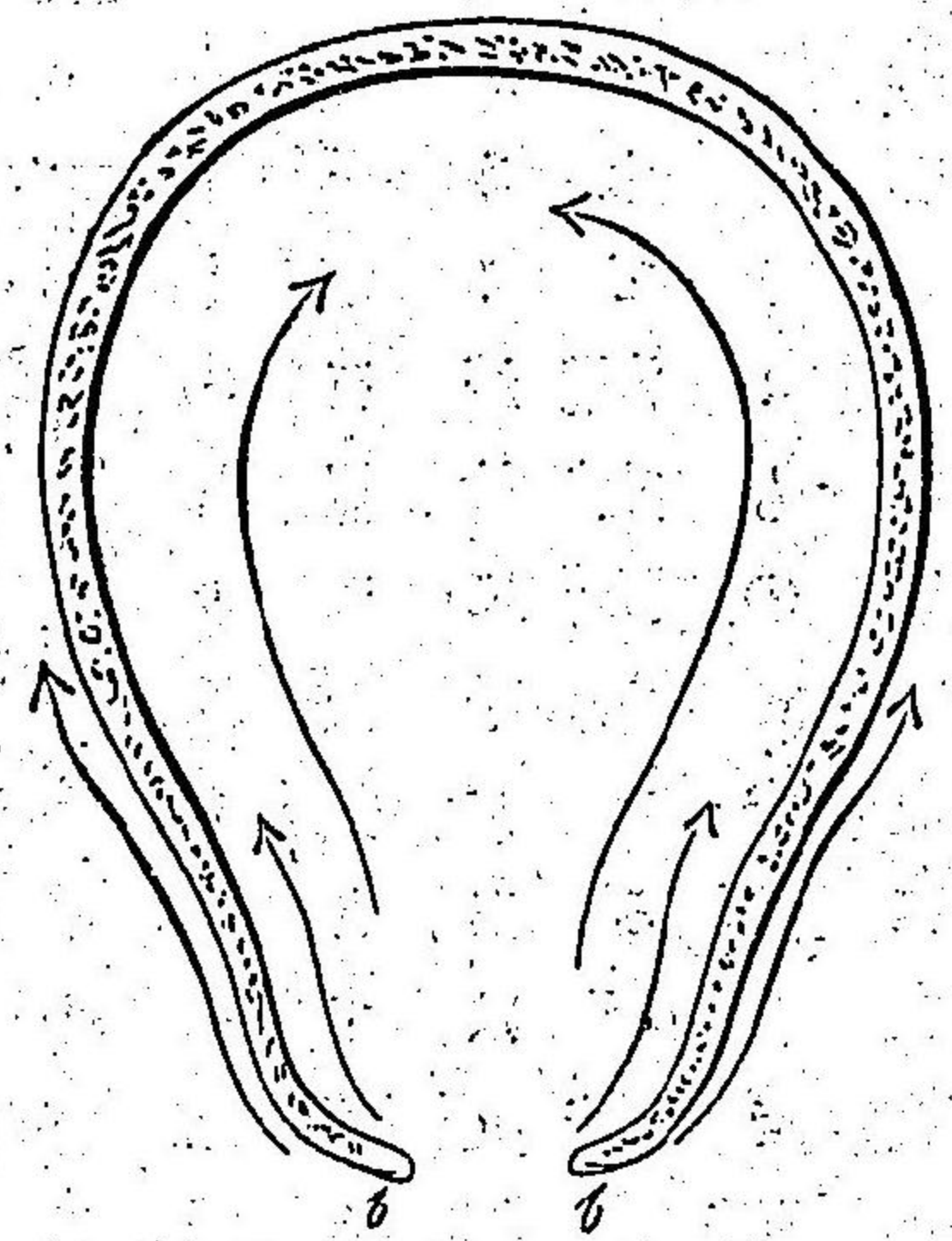
ては腔内の分泌頗る増多し初め透明粘液様なれども胎胞  
形成の爲め卵膜の一部分剝離するのみならず其膨大に  
りて子宮口開大せらるるに際し口縁甚だしく緊張して遂  
に小裂傷を生ずるにより血液を混するに至る  
五胎胞の緊張及び破開  
胎胞は始め陣痛時に於て  
緊張膨出すと雖休憩すれば子宮弛緩するを以て前羊水  
は再び子宮腔内に歸るが故に胎胞亦弛緩す此際内診する

水は陣痛の爲め下方に壓せられ其一部は兒頭と卵膜間を  
 通じて下方に集まり剝離せる卵膜を球状に膨出せしむ而  
 して頻回の陣痛發作により此中の羊水は漸々増量するが  
 爲めに益々膨大して子宮頸管内に進入し遂に子宮外口に  
 達し以て之を開大す此の如く卵膜の一部が子宮外口部に  
 に膨出せるものを胎胞と稱し此中に存する羊水を前羊水  
 又は第一羊水と云ふ

**三 子宮口の開大**

子宮口は二種の力によりて開大せらるゝものなり即ち第一は開口期陣痛の力にして其發  
 作毎に子宮口縁は緊張して薄くなるのみならず漸々上方  
 に牽かるゝが故に子宮口は次第に開大すへし第二は胎胞  
 の力にして漸次膨大するが爲め子宮口は自然に上方より  
 壓開せらるゝものごとす而して胎胞の形成せらるゝ際子宮  
 口は陣痛の力により既に二錢銅貨大に開大せるものに

第四十五圖



子宮開  
口期の  
状況天  
然大の  
五分一

て其全く開大する  
時は直徑十仙迷の  
大きさを有し腔と一  
管を成すべし  
四分泌物の  
増多及び血液の  
混入開口期に於

ては腔内の分泌頗る増多し初め透明粘液様なれども胎胞  
形成の爲め卵膜の一部分離するのみならず其膨大によ  
りて子宮口開大せらるるに際し口縁甚だしく緊張して遂  
に小裂傷を生ずるとにより血液を混するに至る  
五胎胞の緊張及び破開胎胞は始め陣痛時に於て  
は緊張膨出すと雖休憩すれば子宮弛緩するを以て前羊水  
は再び子宮腔内に歸るが故に胎胞亦弛緩す此際内診する

欠

MISSING

陣痛は益々強劇となり頻發し遂に兒頭將に陰門を出でんとする時は最も劇烈にして全身震戦するに至る之を震戦陣痛と稱す又羊水は陣痛の發作毎に僅かづゝ漏泄して産道を濕し滑澤ならしむるものなり

二 産瘤の形成 産出期陣痛發するに至れば兒頭は著しく下降するものにして其産道を通過するに當り兒頭の下方部は劇しく周圍より壓迫せらるゝが故に血液此部に鬱滞し漸々腫脹す之を産瘤と云ふ故に此部の皮膚は暗紫色を呈すべく殊に其大なるものに著るしとす産瘤は産出期の經過愈々長きときは又益々大となるも之に反し其經過甚だ短きときは發することなし

三 腹壓の發起 兒頭深く膈内に下る時は産婦は兒頭を壓出せんが爲めに近傍にある物品に手足を支へて呼吸を止め強く努責す之れ即ち腹壓なり此腹壓は幾分か産婦

をして陣痛に堪へ易からむるものとする此の如き際診す  
 れば陣痛発作時に於ける児頭の下降は頗る明かに觸知し  
 得べく休息時には少しく退却するを診知す可し而して兒  
 頭既に陰門を出でんとするに至れば陣痛は最も劇烈とな  
 り同時に腹壓も亦不随意に發す此の如き強き陣痛及び腹  
 壓の發作時に於ては産婦の苦悶は最も極度に達し顔面潮  
 紅口唇青色となり且つ乾燥し全身冷汗を流し遂に震戦す  
 るに至る即ち震戦陣痛となりたるものなり  
 四 児頭の排臨 児頭益々下降する時は膀胱直腸を壓  
 迫するが爲め頻りに利尿排便の感覺を催ふし會陰は甚だ  
 しく延長膨出せられ長さ廣さ共に素の二倍に達し且つ  
 頗る非薄となり肛門は膨開轉す故に若し此際直腸内に  
 大便在る時は不知識之を漏すことあり而して児頭愈々  
 下降し陣痛の發作時には其一部陰裂間に現はれ陣痛止め

欠

MISSING



婦は爽快を感ずと雖又直ちに次の陣痛發して肩胛を出し  
 其餘の體部は難なく娩出す此の如く兒體の産出は頗る容  
 易なるものにして僅かに二三回の陣痛にて足れりとす之  
 れ産道は既に兒頭産出のため充分開大せらるゝを以て  
 なり又時としては兒頭と共に兒體を一頓に娩出せしむる  
 ことあり

七 後羊水の流出 兒體産出すれば殘餘の羊水は僅  
 かに血液を混じて流出す之れを後羊水又は第二羊水と云

第三 後産期

後産期とは胎兒の娩出後より後産の全く排出し終る  
 までを云ふ其順序次の如し  
 一 産婦著しく爽快を感じ 胎兒全く娩出すれば産

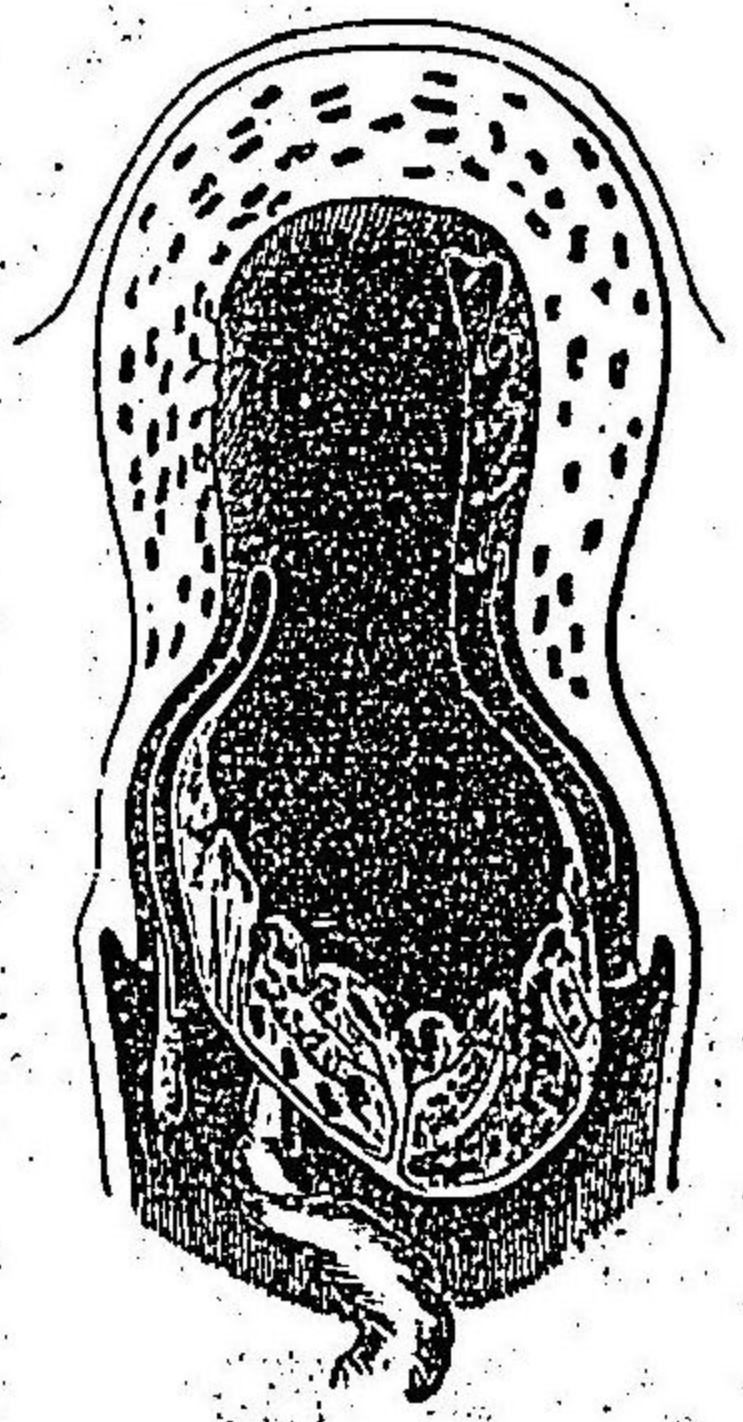
婦の苦悶は忽ち消失し頗る爽快を感じ此際時として悪寒を覺へ或は著しく寒戦することあり

二 後産期陣痛の發作 胎兒娩出後一二分若くは十五分間を経れば再び子宮の收縮を來す之を後産期陣痛と

後産期陣痛の状況 (天然の五分一)



図九十四第 況状の出娩産後 (一分五の大然天)



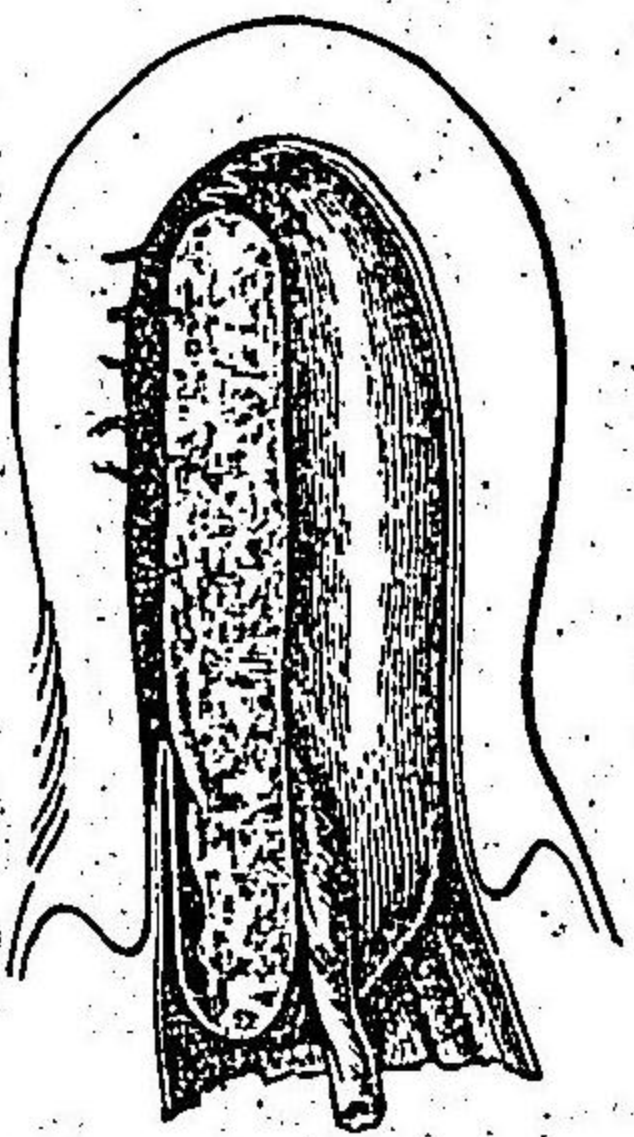
圖十五第

云ふ此陣痛は開口期或は産出期陣痛よりも其疼痛遙かに微弱なるものなり

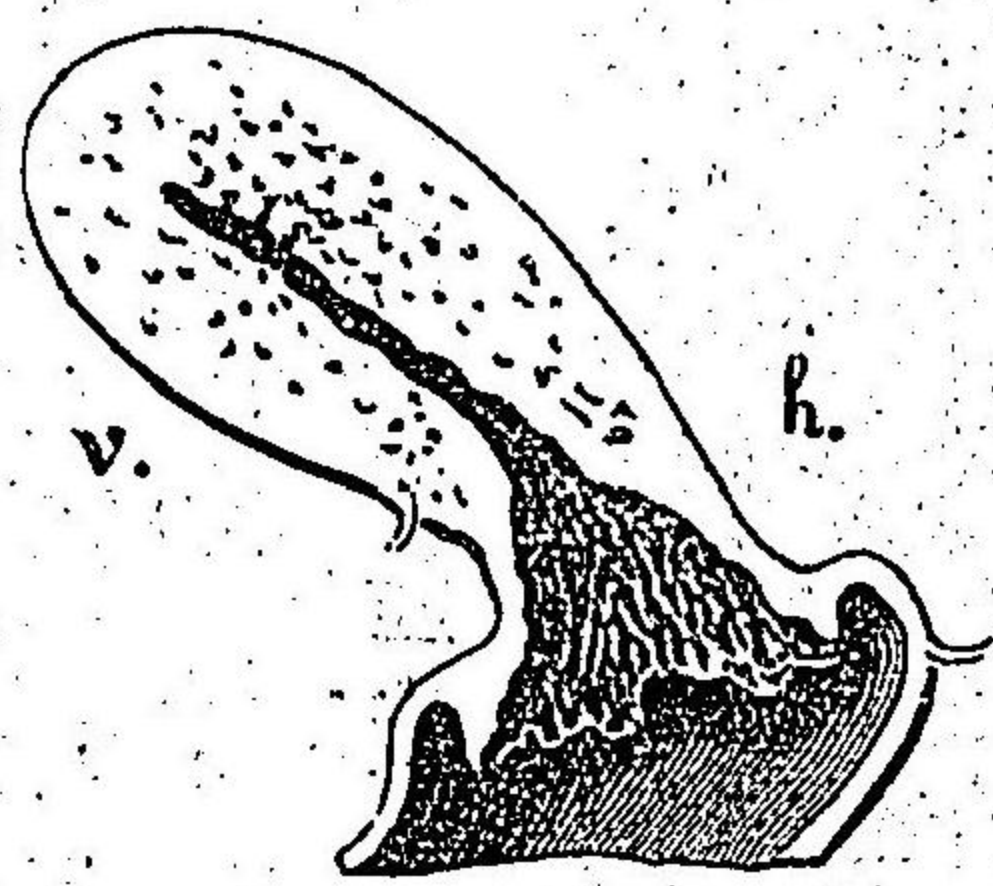
三 胎盤の剝離 後産期陣痛を發する時は胎盤は全く子宮内面より剝離し漸々下方に壓出せらる之と共に卵

膜も亦剝離するものなり

### 四 胎盤剝離に由る出血



図十五第 況状の出及び剝離の産後 (一分五の大然天)



圖二十五第 子るれなど虚空し出排産後 者るたし断縦に後前を宮 (一分五の大然天)

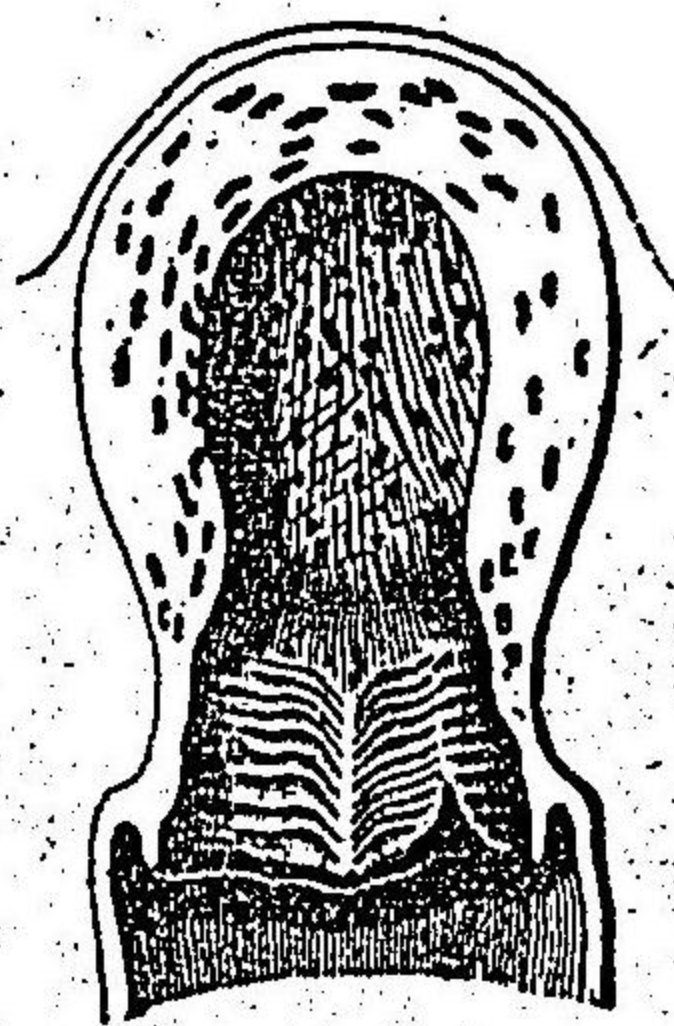
て網の如くなり此中に進入するを以て今胎盤が子宮壁より剝離せらるるときは其血管は断裂して出血するに至る故に陣痛發すれば此血液は迫りなれて腔内より流出するものなり又子宮の血管は少卵膜にも移行せるを以て其剝離の際にも僅少の出血を現すものとす然れども此出血は胎盤及び卵膜の出血を現すものとす

第四編 正規分娩及其取扱法 第三十三章 正規分娩の経過

然に壓閉せられて止血するものなり故に若し子宮の収縮  
充分ならずして断口閉鎖せらるることなければ危険の大  
出血を來すに至るべし

五 後産の産出

後産期の陣痛によりて剝離せる胎  
盤は次第に下降し卵膜は翻



第五十三圖 後産期に於ける子宮左下に空虚を呈し、胎盤は右側に懸垂し、子宮口は閉鎖せらるる状態を示す。(天然の大一分一)

膜を翻轉せしめて其子宮面を包むことなく娩出することあり  
り後産既に産出すれば子宮は硬き球形を成し其底は恥骨  
縫際上凡そ四指横經の高さにあり

第三十四章 分娩の持続時間

分娩に要する時間は人々により種々の差あるもの  
にして即ち陣痛の強弱産道の廣狹胎兒の大小等に關係す  
るものなり故に經産婦は既に其産道一旦開大せられたる  
が爲め抵抗弱く初産婦の凡そ半分の時間を以て娩出せら  
るべし日本人に於ける分娩の時間は初産婦凡そ十二時間  
經産婦凡そ六時間なり而して三十歳以上の初産婦は産道  
開大すること遅きが爲めに分娩も亦長時間を要するもの  
とす西洋人に在りては日本人よりも分娩時間を要するもの  
多く初産婦凡そ二十時間經産婦凡そ十二時間なりと云ふ  
又分娩各期中最も長きは開口期にして初産婦に於て凡そ  
九時間を要し産出期は二時間を要するのみ經産婦は此二  
期に於ては著しき短時間を以て分娩するものなり後産期  
に於て胎盤の腔内に排出せらるるには後産期の陣痛發作後  
三十分を要するものなれども既に腔内に出づれば爾後只

産壁の収縮のみを以て娩出せらるゝが故に若し自然に放置する時は一時間乃至一時間半を費し始めて後産全く産出するものなり然れども胎盤産内に達すれば多くは人工に補助し之を娩出せしむるを以て斯の如く長時間を費すことなし

又晝夜出産数の差異を擧ぐれば夜間十二時乃至三時には出産数最も多く之に反して晝間十二時乃至三時には其数最も少しと云ふ

木下博士が調査したる日本婦人の分娩時間は左の如し  
一 本邦婦人に於ては歐洲婦人に比すれば其全持続時間に於ては約三分の一短縮を見るも主として第一期に於て短かく第二期第三期に於ては少しく長時間を要するを見る  
二 更に之を初産婦經産婦に於て比較するに共に第一期に於ては著しき短縮を認むるも第二期は本邦初産婦に於ては殆んど五と七との比の如く長きを見本邦經産婦に於ては殆ど歐洲婦人と近似す即ち初産婦の分娩

(三)

は歐洲婦人より困難なるべきに經産婦の分娩は歐洲婦人と大差なしとす  
第三期に要する時間もシニレー氏の調査に比すれば本邦婦人に於ては大凡之に倍する時間を要す

(四)

破水の時間子宮口開大以前にあるものウルト氏の歐洲婦人に就て述べたる所よりは五%少く子宮口全開大の後又は殆ど同時に破水するもの数は歐洲婦人より大凡九%多し

(五)

本邦婦人の分娩に於ても初生児の體重の大なるに従ひて第二期に長時間を要すること歐洲婦人に於けるが如し

(六)

産婦の年齢に關しては初産婦は年齢の増加に従ひて第二期には時を要すること大なるも經産婦に於ては年齢の關係に因りて分娩時間に一定の影響あることを見出すこと能はず

(七)

本邦に於ては初産は二十一歳より二十五歳までのものに最も多く初産婦の大凡五四%を占む之に次くものは二十歳未満のものにして大凡三

(八)

一%を占む所謂高年初産婦に至りては甚だ稀にして%に達せず  
第一胎向頭蓋位の分娩に於けるよりも第二胎向頭蓋位に於ける分娩に

は第一期は殆ど常に時間を要すること多く第二期に於ては常に長き時間と要す此關係に就ては尙研究を重ねることを要す

(九) 陣痛の開始すること午前零時より午後三時の間にあるもの最も多く午前九時より午後零時の間にあるもの最少一般に夜間は多く昼間は少し其比六三四に對し三六七なり

(十) 兒童の分娩(第二期の終)は午前零時より午前三時の間にあるもの最も多く午後零時より午後三時の間にあるもの最少なく夜間に於けるものは昼間に於けるものより多く其比五五に對する四五なり

### 第三十五章 陣痛の種類及其作用

陣痛の種類并に其作用 は既に前章に述べたるを以て再び茲に論ずるは頗る煩しきが如しと雖更に其要點を詳述するは受験者の爲め敢て無用にあらざるべし

陣痛は時期に従て各々其名稱を異にす

第一 前陣痛又は前驅期陣痛 とは妊娠の末期に於

屢く子宮に收縮起り且つ疼痛を伴ふものを云ふ其疼痛は常に甚だ弱くして往々妊婦全く之を感ぜざることあり又時としては非常に強く將に分娩するにあらざるやの疑を起さしむることあり然れども眞の陣痛ならざるを以て分娩を催進することなく多きは直ちに或は數時間の後に消失すべし稀に此の如き陣痛に引續きて眞の陣痛を發するることあり而して此前陣痛の發作頻回にして且つ強くなる時は是によりて分娩期の數日に近けるを想像し得るものなり故に此陣痛は専ら分娩の準備をなす者にして左の効用あり

(一) 分娩の前徴 となり其期日を豫定し得べし

(二) 胎兒の位置 を矯正して分娩し易からしむ即ち子宮收縮する時は其内腔の横徑減じて縦徑を増加す故に假令斜めに位する胎兒と雖是によりて矯正せられ縦位とな

らしめ大に分娩に便ならしむるものなり  
(三) 兒頭 を骨盤入口に進ませしめ茲に固定するの用を  
なす

第二 開口期陣痛 開口期に發し著しく兒頭を下降  
せしむるものにあらずして左の作用を有す

(一) 胎胞 を形成せしむ  
(二) 子宮口 を開大す  
第三 産出期陣痛 産出期に發するものにして専ら  
胎兒を下降せしめ之を娩出するの作用を營むものにして  
此陣痛強盛すれば震戦陣痛となる

第四 後産期陣痛 後産期に發するものにして左の  
作用あり  
(一) 胎盤 を剝離せしむ  
(二) 後産 腔内に排出せしむ

第五 後陣痛 後産娩出後即ち産褥期に發する子宮の  
收縮にして強きものと弱きものとあり左の作用を有す  
(一) 子宮 を收縮して舊に復せしむ  
(二) 胎盤 剝離面の血管断裂口を閉塞して出血を防ぐ  
(三) 惡露 を排出して子宮腔内に停滞せざらしむ

第三十六章 胎兒の位置并に其分娩との  
關係

第一 胎兒の位置

胎兒の位置 即ち胎位を大別して縦位及び横位となし  
胎兒の斜めに位するものを斜位と云ふ然れども斜位は多  
く横位に變じ易きを以て此兩位置を單に横位と云ふも可  
なるべし又更に之を幾多の位置に小別す即ち左の如し

横位				骨般端位 (臀位)				顔面位			
第四	第三	第二	第一	第四	第三	第二	第一	第四	第三	第二	第一
横位	横位	横位	横位	臀位	臀位	臀位	臀位	顔面位	顔面位	顔面位	顔面位
兒背は母體の後方にあり	兒背は母體の右方にあり	兒背は母體の前方にあり	兒背は母體の左方にあり	兒背は母體の後方にあり	兒背は母體の右方にあり	兒背は母體の前方にあり	兒背は母體の左方にあり	兒顔は母體の左方にあり	兒顔は母體の右方にあり	兒顔は母體の前方にあり	兒顔は母體の後方にあり

胎位				頭蓋位			
横位		縦位		横位		縦位	
腹位	背位	肩位	臀位	足位	膝位	臀位	頭位
不全足位	全足位	不全膝位	全膝位	不全臀位	全臀位	不全頭位	全頭位

又各胎位は兒背の向ふ所により概して四種に區別する

頭蓋位に於ては第一及び第二位を後頭位と稱し第三及び第四位を前頭位と云ふ又顔面位は通常第一及び第二顔面位のみを稱し第三及び第四は之を省く何となれば此位置は純粹の不良位にして甚だ稀れなればなり胎児若し此位置を取る時は全く分娩し能はざるものとす

以上の區別法を用ひずして左の如くするものあり

兒背左前方に向ふもの 第一胎向  
 兒背左後方に向ふもの 第二胎向  
 兒背右前方に向ふもの 第一胎向  
 兒背右後方に向ふもの 第二胎向  
 兒背左後方に向ふもの 第一胎向  
 兒背右後方に向ふもの 第二胎向

今之を前法と對照するに第一頭蓋位は後法の頭蓋位第二

一胎向の第一分類に相當し第二頭蓋位は第二胎向の第一分類と等しきものなり此の如く後法は煩雜なるが故に多く前法を稱用せらる

第二各胎位に於ける分娩の多少

胎児は縦位に於てのみ産出し得べきものにして横位なる時は通常娩出すること能はず然れども後者は幸に頗る稀なるものなり縦位中最も多数を占むるものは頭蓋位にして臀位之に次ぎ顔面位最も稀なり今其割合を示せば

西洋人 平均概數	日本婦人 下博士調査
頭蓋位 百回中	九十五回
臀位 三百三十回中	九四、八六布仙
顔面位 百二十回中	五回
第一頭蓋位 最多は第一頭蓋位にして次で第二頭	四、〇五布仙
	〇、七四布仙



蓋位と第三及び第四頭蓋位は臀位よりも少なく顔面位よりも多数を占む然れども我が國に於ては第二頭蓋位多し凡そ二百五十六回の分娩中百回ありと云ふ然れども各専門家の統計に據り各異なりとす凡そ頭蓋位を占むることは多し理由を述べんに胎児は子宮腔内に於て一定の胎勢を成し其全體の形状殆んど卵圓形を呈すべく子宮の内腔も亦同じく縦に長く卵圓形を呈するを以て自然の形態に應じて縦位を取り殊に頭部は兒體中最も重きが故に下降し次で頭蓋位となるなり

木下博士の統計に依れば第一胎向は六十五、三六、布仙第二胎向は三十四、六四、布仙にして余が調査せし成績に従ふも第一胎向は第二胎向より尙多数あり佐伯ドクトルの報告は第二胎向を多しとす

### 第三各胎位分娩の難易

胎児若し横位を取る時は分娩最も困難にして候伴なる場合に非ざれば全く出産し能はざるものなり故に其害甚だしくして母兒兩體に危険を及ぼし遂には生命をも失ふに至る而して縦位中最も分娩の容易なるものは第一及び第二頭蓋位にして第三第四頭蓋位(即ち前頭位)に次ぎ第一第二顔面位は頗る難く第三第四に至ては全く自然に分娩を營み得ず臀位は母體に向ては著しき害を與へずと雖小兒に於ては頗る危険を來し易し就中全足位は困難にして膝位に次ぎ臀位最も佳良なり又不全足位は全足位よりも容易にして危険亦少なし

### 第三十七章 正規分娩の器械的作用

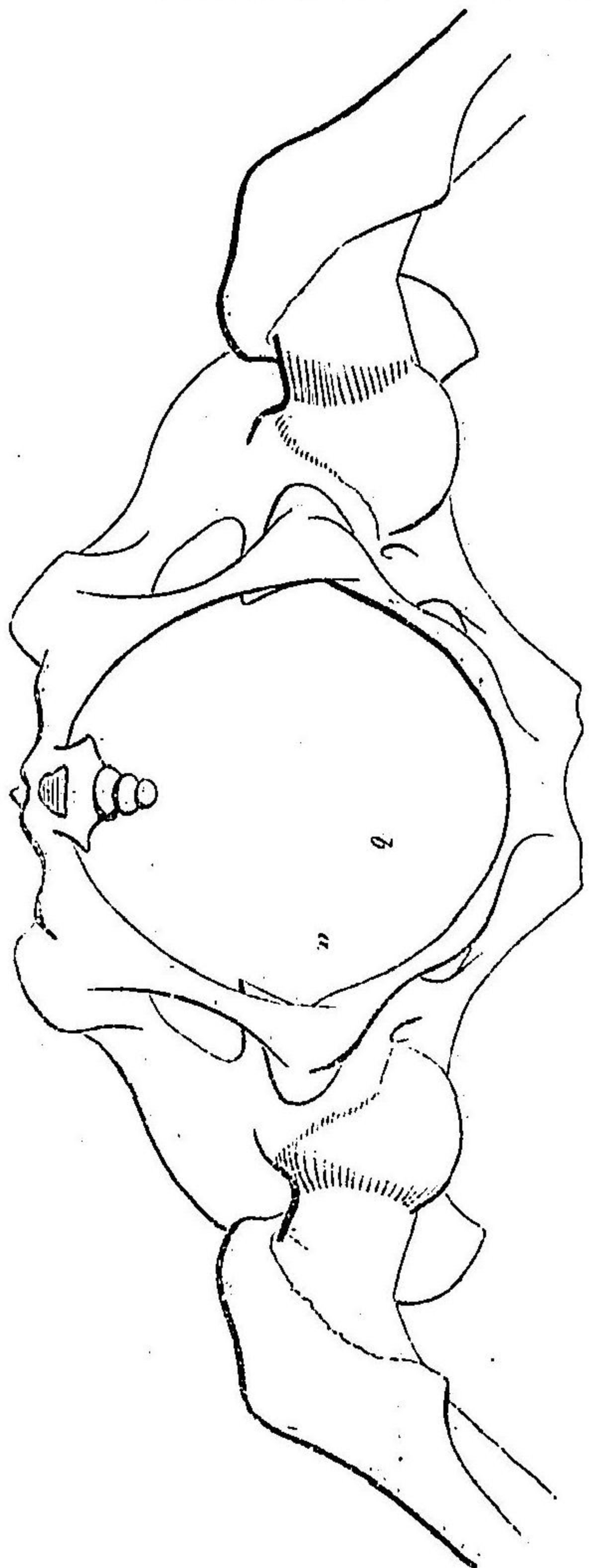
骨盤は既に述べたるが如く各部分によりて其廣狹を異にせるを以て胎児此内を通過するには其廣き部と骨盤を

の廣き部と適合するにあらざれば容易く娩出し能はず正  
規分娩に於ては胎兒自然に回轉して兩者相適合し分娩を  
容易ならしむ此回轉を分娩の器械的作用又は分娩機轉と  
云ふ分娩の際最も娩出に困難なるは兒頭なるが故に其器  
械的作用を營むことも亦著しとす今解し易からしめんが  
爲めに第一頭蓋位に就て其器械的作用を詳述せん  
諸姉は既に兒頭に就て矢狀縫合及び大小顙門の存在を  
知べし此二者は分娩器械的作用の方向を示すに最も必要  
なるものなり而して第一頭蓋位に於て兒頭尙ほ骨盤入口  
上に存せるの際兒背は母體の左前方に向ふが故に後頭も  
亦骨盤の左前方に對し前頭は右後方に向へり然るに妊婦  
末期に至り前陣痛強盛すれば兒頭は下降して骨盤入口に  
進入し茲に固定せらるるに至る此時兒頭は其最も長き徑  
線即ち矢狀縫合と入口の最も廣き徑線即ち横徑線と適合

せしむ故に小顙門は入口の左方に大顙門は右方に在り次  
で開口期陣痛強盛し將に産出期に移らんとするに至れば  
兒頭は骨盤内に壓下せらる此際陣痛の力は兒背に及ぼ  
し最も強く脊柱を壓す故に之を脊柱壓と云ふ而して脊柱  
の上端に附着するものは頭部なるを以て此脊柱は遂に  
兒頭に達すべし今正規の胎勢を案するに兒頭は屈伏の状  
態を呈せるを以て此頭部に達したる壓力は止むを得ず後  
頭に及ぼし以て此部を壓下す故に顙部は益々胸壁に接し  
兒頭は益々屈伏の状をなす之を第一回轉又は横軸回轉と  
云ふ此運動により兒頭は後頭を下降して骨盤腔内に進入  
す  
骨盤腔の徑線は入口に反し斜線最も廣くして横徑線  
は却て短小なるを以て矢狀縫合は斜線に一致せざるべ  
からず茲に於てか兒頭は第二回轉或は縦軸回轉を營む即

ち入口に於て左方に位せる小顛門は左前方に回り右方に存せる大顛門は右後方に回轉するに至る故に小顛門は骨

圖 十五

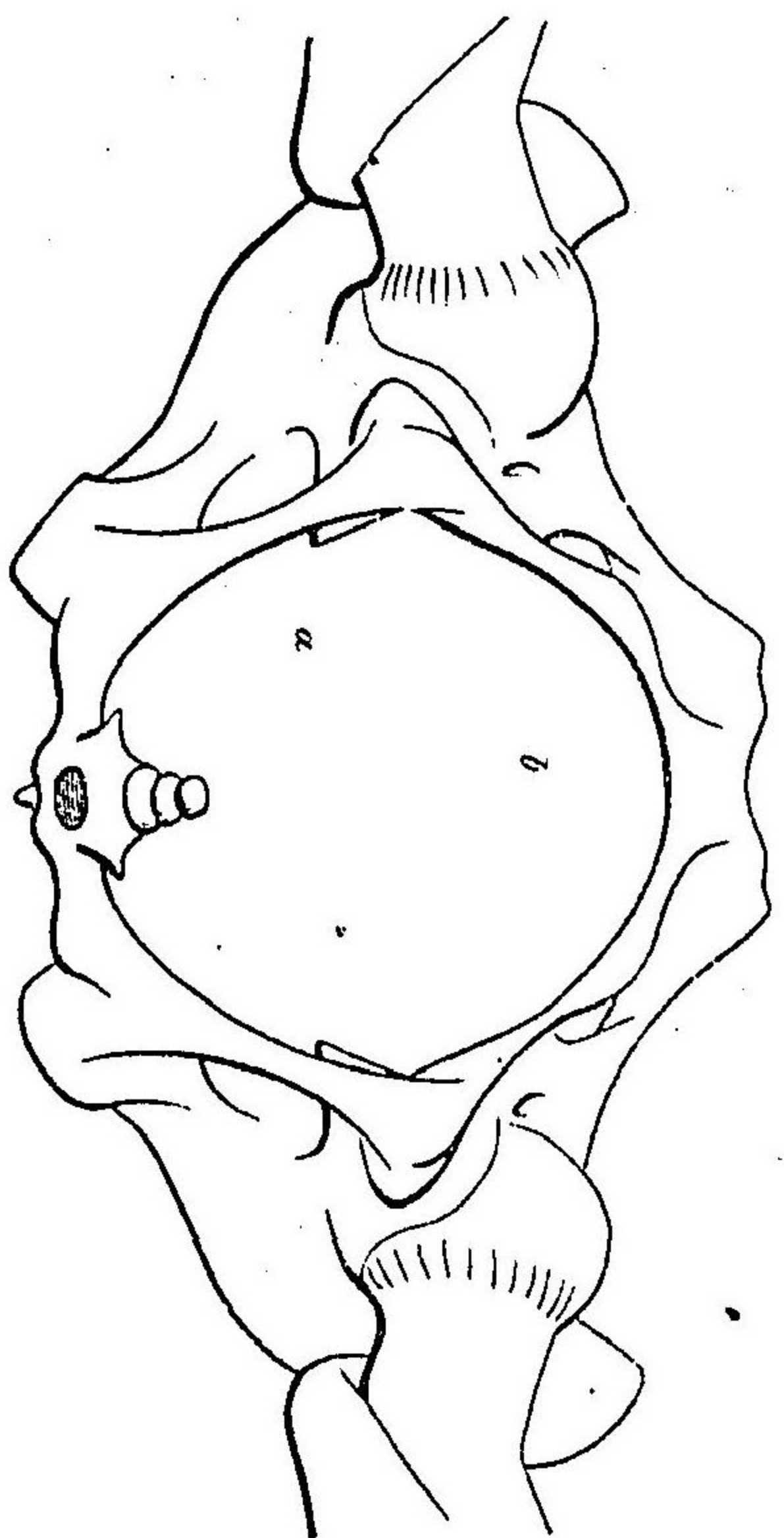


現狀分娩の胎位蓋頭一第るけ於に口出盤骨 (一分三の大顛天)

盤腔の左前方に大顛門は右後方に位し矢狀縫合は第一斜徑線に右斜徑線一致す而して此第二回轉は漸々進行して

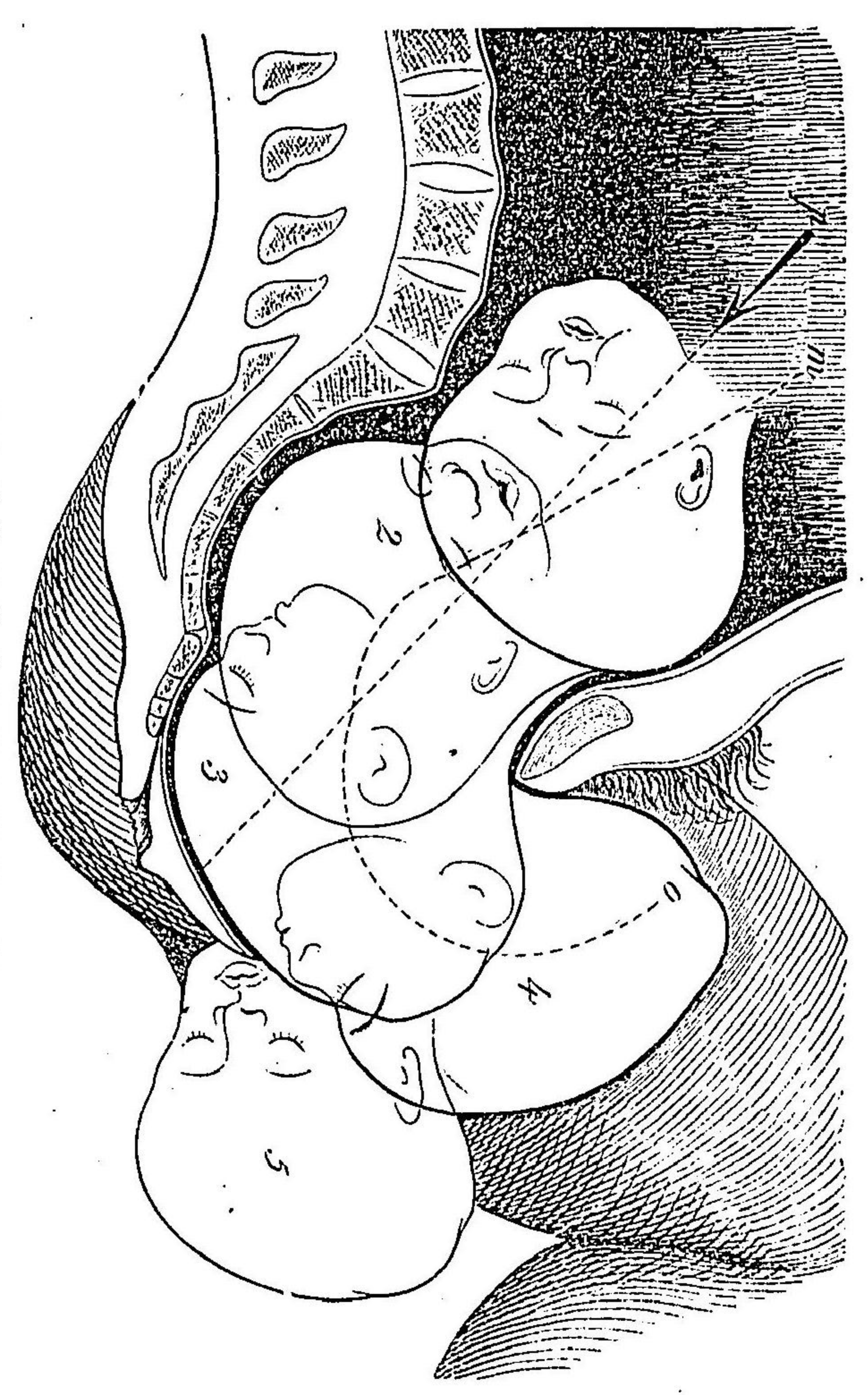
骨盤出口に達すれば矢狀縫合は遂に其直徑線に一致するに至る出口の直徑線は平時に於ては短しと雖分娩時に至

圖 十五



現狀分娩の胎位蓋頭二第るけ於に口出盤骨 (一分三の大顛天)

れば尾骶骨は後方に移動するを以て延長せられ最も廣大



用作的器械分娩方の胎位器頭一第 (一介三の六第天)

となる故に後頭部は前方より耻骨縫合下に來り前頭部は  
 後方即ち會陰に向ひ矢狀縫合は其直徑線に一致す  
 茲に於て後頭は耻骨弓下に止り會陰部より前頭顔面頤  
 部等を順次に産出す之を第三回轉又は横軸回轉と云ふ此  
 回轉は頤部を胸壁より離れじむるの運動をなすを以て第  
 一回轉と全く反對の方向に回轉するものなり  
 既に會陰より頤部を出す時は後頭は始めて耻骨弓下を  
 離れ兒頭の娩出終る次で兒頭は更に其方向を變じて母の  
 右腿に向ふ是矢狀縫合が骨盤出口の直徑線に向ひて娩出  
 し來るの際次ぎに來る肩胛は斜徑線の位置を取りて骨盤  
 腔に進むが爲め胎兒の頸部は多少捻轉せられ居るも兒頭  
 娩出すれば直ちに舊に復するを以てなり此回轉を第四回  
 轉とも云ふ  
 兒頭産出するの際肩胛は骨盤入口に位し頸部は腔中に

あり而して肩胛の横徑線即ち肩胛線は矢狀縫合に一致せるものと反對の斜徑線を取りて入口に進入す是肩胛線は矢狀縫合と其方向相反せるを以てなり即ち第一頭蓋位に於ては第二斜徑線に適合して下降し骨盤の右前方に存する右の肩胛は左方に回轉し左後方に位する左の肩胛は右方に回轉して遂に骨盤出口に至れば肩胛線は出口の直徑線に一致し右肩は耻骨弓下に現はれ左肩は後方の會陰部より出で全肩胛を娩出す肩胛全く産出すれば其他の體部は頗る容易く出づるを常とす

今更に器械的作用を理解せしめんが爲めに左に兒頭の回轉を特記せん

第一回轉 兒頭が骨盤入口より膈に向て進入するの際に營むものにして後頭は下降し頤部は益々胸壁に近づき屈伏運動をなすを云ふ

第二回轉 兒頭が骨盤内に於て左若くは右に向て回轉し後頭は前方に對し兒頭の直徑線(矢狀縫合)は終に出口の直徑線と一致するに至るの運動を云ふ

第三回轉 兒頭が第一回轉と全く反對の回轉を營み頤部は胸壁を離れ頸部を伸展するの運動を云ふ

### 第三十八章 分娩時に於ける胎兒の變化

分娩時に際して胎兒は心音或は兒頭等に種々の變化を呈す

一 胎兒心音の變化 胎兒の心音は陣痛發作時に至れば著しく緩慢となり休憩すれば再び舊の如く増加す故に若し劇しき陣痛永く持續すれば心音は漸々緩くなり遂には全く止み胎兒死することあり

二 兒頭の變形 胎兒の先進部は其自然の大きさのまゝに

て骨盤内を通過するものにあらずして細長なる形状に變ず是其先進部よりも狹隘なる骨盤内を通過せざるべからざるを以てなり即ち後頭位を取りて産出せる兒頭は前額より後頭に向て壓平せられ後頭は著しく延長すべし而して一側の顱頂部に産瘤を生ずるにより其部膨隆すべし

### 第三十九章 後頭位に於ける内外検査並に分娩の器械的作用

#### 第一頭蓋位

外検査 子宮底に於ては臀部を觸れ耻骨縫際上に兒頭

を觸知す而して兒背は母體の左側に位し小部分は其右方にあり

心音は臍の左下方に於て聴取す

内検査 先進部は圓形硬固にして浮游運動あり縫合及び顱門を具ふ

兒頭骨盤腔内に在る時は小顱門は左前方に大顱門は右

後方に矢狀縫合は第一斜徑線即ち右斜徑線に一致す

器械的作用 兒頭は始め骨盤入口部に於て其矢狀縫合

は横徑線に一致し第一回轉を營みて後頭下り入口内に入

る次で漸々下降するに従ひ第二回轉を營み後頭は左前方

に前頭は右後方に回旋し遂に後頭は恥骨弓下に止り前頭

は會陰部に在り矢狀縫合は骨盤の直徑線に一致す茲に於

て第三回轉を現はし顔面は會陰を越へて出づ

兒頭全く産出するの際には肩胛は骨盤入口にありて肩胛

線は第二斜徑線に一致して骨盤内に入し、兒頭の第二回轉と同様の回轉を營み、右肩は前方に廻り、出口に至れば遂に右肩は恥骨弓下に現はれ、左肩は會陰部より出づ。小兒の顔面は肩胛産出時に於ては母の右腿に向ふ。産瘤は右顛頂骨部に現はる。

### 第二頭蓋位

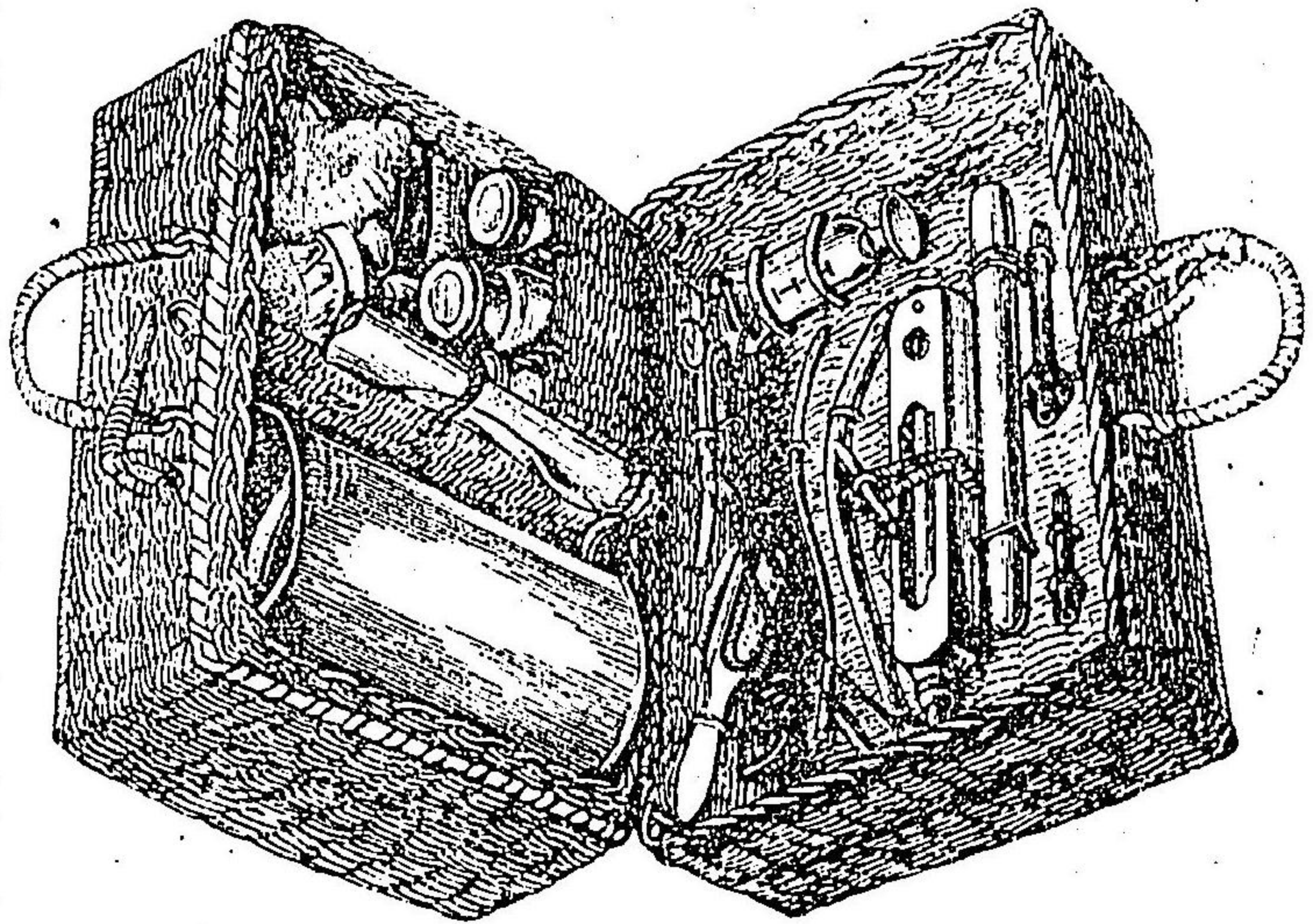
**外検査** 子宮底に兒の臀部あり、耻骨縫際上に頭部を觸れ、兒背は母體の右側に小部分は左側に存す。  
**内検査** 先進部の状況は第一頭蓋位と同じ。兒頭骨盤腔に存する時は小顛頂門は右前方に大顛頂門は左後方に矢狀縫合は第二斜徑線(即ち左斜徑線)に一致す。器械的作用 此位置に於ける器械的作用は第一頭蓋位

と毫も異なることなく、只左右相反せるのみ、即ち第一回轉により後頭下降し、第二回轉を營むに従ひ、後頭は右前方に前頭は左後方に廻り、遂に骨盤出口に至りて後頭は恥骨弓下に止まり、矢狀縫合は直徑線に一致し、第三回轉に由り前頭及び顔面は會陰より娩出す。肩胛の横徑線(即ち肩胛線)は第一斜徑線を以て骨盤内に入し、左肩は前方に右肩は後方に回轉し、出口に至りて左肩先づ恥骨弓下に現はれ、右肩は會陰部より産出すべし、胎兒の顔面は母の左腿に向ふ。産瘤は左顛頂骨部に生ず。

### 第四十章 正規分娩の取扱法

**正規分娩** に於ける助産婦の務は自然の娩出力を補け、靜かに其状況に注意すべきものにして、決して妄りに無用の所置を爲べからず、若し母體或は胎兒に危険を來すの恐れ

第五十七圖



助産婦携帶用器械

ある時は一刻も猶豫することなく速かに醫士の診察を請ふべし

第一助産婦携帶用品

助産婦は常に其携帶用品を整へ分娩に臨みて狼狽せざる様注意すべし殊に器械類は一度之を使用する時は必ず消毒法を施す

清潔に保たんことを要す而して此等の品は常に一つの布袋又は靴の中に納め決して他物を混入すべからず今其品目を擧ぐれば左の如し

予が考案になりし助産婦携帶器具は頗る便利にして自非松之助之れを販賣せり

- 一 イルリガートル 一個
- 二 但し一迷の護謨管付 腔内用嘴管并に灌腸用嘴管 各一個
- 三 受水盤 各一個
- 四 浴用検温器并に體温器 各一個
- 五 聴心器及時計 各一個
- 六 爪鉋子 各一個
- 七 刷子及び石鹼 各一個
- 八 排尿用カテーテル 各一個



- 九 臍帶剪刀 一個
- 十 臍帶結紮絲 數條
- 十一 臍綑帶 數卷
- 十二 小兒窒息用彈力カテーテル 一個
- 十三 小兒灌腸器 一個
- 十四 殺菌藥及充奮藥の必要なるもの左の如し
  - (一) リゾール 又は石炭酸
  - (二) 硼酸 或はテルマトール合劑
  - (三) キセロホルム
  - (四) ホフマン液
- 十五 瓦設及び脱脂綿 數枚
- 十六 清潔なる西洋手拭 一枚

第二 助産婦の衣服

助産婦は白色の上衣及び前垂布を調製し産床に臨む時は必ず之を着るべし而して一度用ひて少くも汚染せるときは必ず洗濯するを要す但し前垂布は毎回清潔なるものと交換すべきものなり又傳染病を有する産婦を取扱ひたる時は必ず其衣服に嚴重なる殺菌法を施すか或は熱湯中に煮沸して後清淨し強き日光に暴露するにあらざれば用ゆべからず

第三 産婦の検査法

助産婦は産婦に接する時は先づ問診を行ひ次に検査法に内検査法に移るべし然れども前羊水既に漏泄せるを聞かば問診後直ちに手指并に産婦の外陰部に消毒法を行ひ内検査を施すべし然らざれば以外に早く兒頭露出し來りて大に狼狽することあり

一 問診 既往の訊問は妊娠時に於て既に尋ねたれば此際に於て只分娩に關する要件のみを問診すべし若し助産婦にして分娩の際に始めて招かれたる時は第二十四章妊婦の検査法の條下に述べたる順序により其既往を問診するを要す今左に産婦問診の簡條并に順序を擧ぐれば

(一) 破水の時期  
 (二) 陣痛初發の時期  
 (三) 陣痛の強弱并に一時間内に於ける發作數  
 (四) 便通及び排尿の有無  
 (五) 産婦空腹ならざるや否や

等なりとす

二 外検査法 に於ても亦第二十四章に述べたる方法により簡単に左の簡條を検すべし而して陣痛發作せば検査を停止するを要す

(一) 子宮底の高さ  
 (二) 胎児の位置  
 (三) 胎児頭骨盤内に徹入せるや否や并に其程度  
 (四) 胎児心音の部位及び強弱  
 三 内検査法 は既に述べたるが如く止むを得ざる場合は綿密に検査を施し屢く行ふの要なからしむべし而して内検査を施すには既に記したる方法により手指及び外陰部に嚴重なる殺菌法を行ひ内診の方式に従ひ手指を膈内に挿入し骨盤及び胎児の状況を精査すべし其簡條は第二十四章中に詳述したれども更に其分娩に關する要點を擧げん

(一) 子宮口開部の度及び其口縁の状況  
 (二) 胎児先進部の子宮口内に進入せるや否や

(三)胎児の先進部は骨盤の何れの部分に存在するや  
 (四)大小頤門并に矢状縫合の方向  
 (五)四肢或は臍帯の脱出或は其他の異常なきや否や  
 (六)陣痛時に於て先進部が下降するや否や  
 (七)胎胞若し存在する時は陣痛休止時に弛緩するや或は  
 依然然緊張の状態に止まるや否や等なり而して頤門及  
 び縫合は子宮口全く開大するにあらざれば觸知し難  
 し然れども兒頭は前腔穹窿部より腔壁を隔て能く  
 觸るを得べし  
 以上の検査法に由て若し異常を發見する時は猶豫なく  
 醫治を求むべきものなり而して内診の際には妄りに手指を  
 子宮口内に挿入し若しくは之を上方に祛り擧ぐる等のこ  
 とをなすべからず又胎胞存在せば決して之を探る勿れ又  
 若し内診中陣痛發作すれば其休憩時まで指を其儘休止す

### 第四 分娩の準備

べし然らざれば過つて胎胞を破裂せしむるの恐れあり

助産婦が産家に招かれ若し分娩切迫したるを認むる時  
 は直ちに分娩の準備をなすべし其法左の如し  
 一 産室は最も静かにして明るき室を撰ぶべし室の  
 廣さは狭きよりも廣きを良とすれども六疊乃至八疊を最  
 も適當となす室内の温度は列氏十六度許に保ち新鮮なる  
 空氣を流通せしめ多人數の出入を禁じ温順にして悟りよ  
 き一人婦人のみ止まらしめ諸事を助けしむべし且つ室内  
 には決して家畜類を近づけず常に清潔ならしめて不必要  
 の器具は悉く之を除かざるべからず  
 二 産床を造るには通常の蒲團二疊を敷き其上を悉  
 く油紙又は護謄布を以て被ひ更に又其上に敷布を敷き其

四方を安全針にて固定すべし而して尙其臀部には分娩時に散流する液體を收容する爲めに二尺五寸四方を有する蒲團を載せ再び之と同大の敷布を延ぶべし又床の頭部は稍高からしむるか若くは枕子を用ふべし

臀下に敷くべき方形の蒲團を造るには三尺四方の油紙若くは護謄布を取り其周囲を折り返して二尺五寸四方のものとなし其中には脱脂綿數枚を入るか又は藁灰を入れ其上に清潔なる白色の布片二尺四方の大きさを有するものを置き周囲の油紙又は護謄布と縫合すべし此の如くする時は此上に置くべき敷布を略するを得又その布片を縫接せずして悉く油紙を以て造れるものあり然れども之を以て直ちに産婦の臀部に觸接すれば甚だ不快を感ずるものなるを以て必ず此上に敷布を要するの煩あり

三 産褥床 産褥床は分娩前に於て別に造り産床より

幾分か離れたる部に於て兩床の頭の方を反對に向け置き産婦を廻轉して移すに便ならしむ但し此距離は助産婦が介者と共に産婦を助けて床を移すに差支なき丈の間なるべし而して此産褥床は通常の如くに蒲團を延べ新鮮なる敷布を置き且つ臀部には分娩時と同じき方形の蒲團を敷き且つ新らしき衣服を延べて豫め温め置くべし完全なる分娩處置を行ふに於ては産室に隣れる明るき静かなる一室を撰び産婦を此室に導き以て産室及び産褥室を區別せざるべからず然れども此の如き煩雜なることは到底實地上行はれ能はず加之産床も亦交換せずして産褥床に用ゆること多し此際には豫め敷布及び方形の蒲團并に新らしき産婦の衣服を準備し置き分娩終るや直ちに之を交換すべし但し産床を造れる蒲團のみは其儘になすなり

四 産婦の衣服及び頭髮 産婦の衣服は清潔にして

緊密ならざるものを撰び腹部以下は特に清潔なる廣き布片を以て被ふべし

蒲團は軽くして大ならざるものを以て身體を被ふを要す

頭髮は豫め梳りて結束し置き其紛亂することを避くべし

五 小兒の臥床及び其衣服

小兒の臥床は産床と隔りて豫め之を備へ置き衣服を其上に擴げ温婆を此中に包みて之を温暖ならしめ小兒を沐浴せしめ終れば直ちに此温婆と兒體とを交換するものなり而して其敷蒲團は甚だしく輕軟にして身體を埋没せしむるが如きものは不可なり又襖褌は柔軟なる綿布若くは使用を経たる布片を用ゆるを佳とす

六 器械類及び消毒液の準備

器械類即ち喉帶剪刀カテーテル尿管等は金屬製若くは硝子製鉢中に五十倍のリゾール水を入れ其中に浸し置くべし又別に一個の硝子製鉢に此等の消毒薬を入れ數多の脱脂綿の小片并にガゼ數枚を浸し置くを要す其他手を洗ふべき金盤一個を準備すべきものなり又イルリガートル中には百倍のリゾール温液又は五十倍の微温石炭酸水を盛り適當の高さに懸垂し置くべし

七 温湯及び冷水

は多量に準備せしめ手の洗滌薬品の溶解又は小兒の沐浴等に供す

八 初生兒沐浴槽

及び温婆二三個并に胎盤受容器は必ず準備すべきものにして温婆は夏季と雖之を缺くべからず

九 産婦及び小兒用布片類

を類別すれば左の如し

(二) 腰布及丁字帶

數十枚

(三) 枕子

二個

(四) 分娩後腹帯

一個

(五) 西洋手拭

大小各一枚

### 十 産婦の飲食物

麥、鶏卵、素麵等を與へ野菜、肉類等の不消化物は禁すべし。飲料は寒冷に過ぎざる新鮮の清水を良とする。若し惡寒等の心料あり或は暖かなる飲料を欲する時は温き牛乳或は薄き茶を與ふべし。酒類濃き茶或は珈琲の如き身體を温暖ならしむるものは禁すべし。然れども葡萄酒、ブランデー等は準備し置くを要す。即ち分娩中若し體力衰ふることある時は此等の充奮性飲料を與へざるべからず。

### 第五 開口期の處置

開口期に於て最も注意すべきことは

#### 一 大小便の排泄

大便を經ずと雖尚ほ灌腸するを良とす。之直腸及び膀胱緊満する時は子宮の收縮を減じ産出力を微弱ならしむるを以てなり。然れども若し助産婦が分娩前より注意して下劑或は灌腸により充分之を排泄せしめたるものにして且つ開口期の始めに於て既に多量の便通ありたる時は必らずしも灌腸を施すことを要せず。又た灌腸は開口期に於て必要なりと雖産出期に至れば之を施すを要せず。何となれば此期にありては假令灌腸を行ふも更に其効なればなり。灌腸は微温若くは冷水(石鹼水)粉末石鹼八瓦を五百瓦の水の中に溶解したるもの(三百瓦乃至五百瓦)を以て施すべし。之を行ふには普通の灌腸器を用ひて佳なり。雖イェルリガートルを用ふれば甚だ便なり。即ち其護謨管に灌腸用嘴管

を附し使用に臨み一回護謨管中に液を通じて其中の空気を排除し嚢管に華設林を塗り以て婦人を左側臥せしめ之を後上方に向て静に肛門内に挿入すべし次にイリガートルを徐々に高擧する時は其中の液は自然に肛門内に流入す若し此際液の流入停止すれば稍々嚢管を移動して其方向を轉せしむべし液の流入適度に達すれば指にて護謨管を壓し液の散流を防ぎつゝ徐々に嚢管を抜き取るべきものなり灌腸終れば婦人は暫くして或は直ちに便意を催すか故に之を排泄せしむ然る時は多くは充分の便通あるべし

尿の排泄も亦頗る緊要にして膝肘位若くは仰臥位に於て之を營ましむ而して尿は大抵自然に排泄し得るものなれども若し利し難き時はカテーテルを用ゆべし又仰臥位の際排泄し難き時は指を前脛窩部に入して兒頭を

少しく上方に壓すれば容易く利し得ることあり

カテーテルは如何なる方法によりても自然に排泄し能はずして且つ膀胱甚だしく緊満せるの際にのみ用ゆべきものなり何となればカテーテルに附着せる細菌或は不潔物ば其挿入に依て膀胱内に導かれ以て膀胱加答兒を起すのみならず甚だしきに至りては輸尿管を経て腎臓に及び腎臓炎を發することあればなり而して若し兒頭著るし骨盤内に下降せる時は尿道壓せられて彎曲せるが故に弾力性カテーテルを用ひざるべからず然れども弾力性カテーテルは完全なる消毒を施し難きを以て多くの場合に於ては金屬性カテーテルを使用すべしカテーテルを用ふるには必ず嚴重なる消毒法を行ふべきものにして若し金屬性のものをを用ふるなれば先づ之を熱湯中に十分間煮沸し次で一布仙のゾール液中に浸し而して後ち尿道内に

に挿入するものなり  
 今金屬性カテーターに就て其使用法を述べんに先づ百  
 倍のソール水に浸せる綿花を以て尿道口を拭ひ次でカ  
 テーターに華設林を塗り執筆狀に之を握り且つ挿入  
 て其外口を塞ぎ強力を用ひずして尿道彎曲の方向に挿入  
 す即ち始めカテーターの尖端を後下方に次で漸々前上方  
 に向はしめ遂に膀胱内に達すれば拇指を放ちて尿を流出  
 せしむ尿流出の間は決してカテーターを移動せしめ若く  
 は其方向を轉せしむべからず排尿終れば再び拇指を以て  
 其外口を塞ぎ尿道彎曲の方向に従て徐々に抜き去るべし  
 以上述べたるが如く開口期に於ては必ず大小便の排  
 泄に注意せざるべからず雖も其末期に至れば決して固  
 に行かじむるべからず否らざれば不意に胎兒を娩出せし  
 め又は早期破水を來すことあり故に假令開口期の始めと

雖成るべく上圍せしめずして室内に於て便器に受くるを  
 良とす

### 二 産婦就褥の時期

開口期の始めに於ては尙ほ産  
 婦は室内を歩行するも坐するも敢て害なしと雖子宮口開  
 大じて其直徑三乃至四仙迷一寸餘に至れば必ず産床に  
 就かしむべきものとす然らざれば往々早期破水を來し種  
 種の危険を招くもの恐ればなり又産婦虛弱なるか經産婦  
 にして分娩の經過頗る早き習慣ある者或は狹窄骨盤懸垂  
 腹等の婦人は開口期の始めより就褥せしめざるべからず  
 三 開口期に於ける産婦の位置  
 は仰臥するも側臥  
 するも總て産婦の意に任せて可なり但し仰臥位はなるべ  
 く取らしめざるを良とす何となれば此位置にありては陣  
 痛を強盛するを以て分娩經過意外に急劇となることあれ  
 ばなりされど若し陣痛弱き時は倚座位を與へ或は屢々臥



に挿入するものなり  
 今金屬性カテーターに就て其使用法を述べんに先づ百  
 倍のリンゾール水に浸せる棉花を以て尿道口を拭ひ次でカ  
 テーターに華設林を塗り執筆状に之を握り且つ挿指を以  
 て其外口を塞ぎ強力を用ひずして尿道彎曲の方向に挿入  
 す即ち始めカテーターの尖端を後下方に次で漸々前上方  
 に向はしめ遂に膀胱内に達すれば挿指を放ちて尿を流出  
 せしむ尿流出の間は決してカテーターを移動せしめ若く  
 は其方向を轉せしむべからず排尿管終れば再び挿指を以て  
 其外口を塞ぎ尿道彎曲の方向に従て徐々に抜き去るべし  
 以上述べたるが如く開口期に於ては必ず大小便の排  
 泄に注意せざるべからず雖も其末期に至れば決して固  
 に行かじむるべからず否らざれば不意に胎兒を娩出せし  
 め又は早期破水を來すことあり故に假令開口期の始めと

雖成るべく上固せしめずして室内に於て便器に受くるを  
 良とす

二 産婦就褥の時期 開口期の始めに於ては尙ほ産

婦は室内を歩行するも坐するも敢て害なしと雖子宮口開  
 大して其直徑三乃至四仙迷(一寸餘)に至れば必ず産床に  
 就かしむべきものとす然らざれば往々早期破水を來し種  
 種の危険を招くもの恐ればなり又産婦虚弱なるか經産婦  
 にして分娩の經過頗る早き習慣ある者或は狹窄骨盤懸垂  
 腹等の婦人は開口期の始めより就褥せしめざるべからず  
 三 開口期に於ける産婦の位置 は仰臥するも側臥  
 するも總て産婦の意に任せて可なり但し倚座位はなるべ  
 く取らしめざるを良とす何となれば此位置にありては陣  
 痛を強盛するを以て分娩經過意外に急劇となることあれ  
 ばなりされど若し陣痛弱き時は倚座位を與へ或は屢よく臥

位を交換せしむべし然れども兒頭未だ骨盤内に固定せずして能く移動する時は仰臥位を取らしむべし此位置は兒頭の骨盤内後入を助くるものなり

四 開口期に於ては決して腹壓を加ふべからず開口期に於ける腹壓は甚だ無益なるのみならず却而胎胞を早く破開せしむるの害あるものなり故に産婦若し自ら努責せんとする時は助産婦は固く之を禁じ自然の陣痛に任すべし假令此期に於て陣痛が一二時間休止することあるも著しき害なきものなり然れども餘り長く陣痛休止する時は決して醫藥を用ふることなく濃き茶或は珈琲を與ふるを良とす

五 産婦の睡眠 開口期に於て産婦眠を催すことあらば其儘安眠せしむべし之に由て大に其氣力を増すことあり而して助産婦は産婦の睡眠中必らず其傍らにありて之

に注意せざるべからず

六 産婦の検査 は成るべく反覆せざるを良とす殊に内診に於ては外検査の際其異常なきを認むる時は決して之を行ふべからず然れども開口期の経過長きに過ぐる時は産機の如何程まで進みたるや或は其他の異常なきや等を檢せんが爲め嚴重なる消毒法を施し陣痛休憩時に於て内診を行ふべし此際胎胞に觸れざるや又子宮口縁を刺戟せざるやう注意すべし

七 腔内の洗滌 若し尿道より濃汁を漏せるものなるや或は多量の帶下あるものは必らず一布仙のリンブル水を以て腔内を洗滌すべし然らざれば往々淋毒を小兒の眼に傳染せしむるの危険あるものなり

八 外陰部の壓抵布 既に産婦就褥の時期に達すれば外陰部にガーゼ片を抵て屢く之を交換して分泌物の増

多せるや或は分泌物中に血液を混入せざるや又は前羊水  
漏れせざるや等を検査せざるべからず若し開口期漸く進み  
て腔内分泌物中に血液を混するに至れば既に子宮口充分  
開大せるものにして胎胞の破裂近きにあるを知るべし然  
れども始めより血液を混するものは屢く異常あるが故に  
注意せざるべからず

九 前羊水の検査

胎胞破裂すれば助産婦は直ちに  
其羊水の性質を検査せざるべからず即ち臭気あるや否や  
綠色を呈することなきや否や胎糞の混合せざるや否や或  
は異常の潤濁あるや否や等之なり

第六 産出期の處置

開口期の終りに於ては胎胞破裂するを常とすれども時  
として子宮口充分開大せるも破水せず爲めに分娩遅延す

るか若くは兒頭既に骨盤内に下降して胎胞陰唇間に現は  
るも破裂せざる時は人工に之を破開せざるべからず而  
して之を破開せんとするには先づ胎胞内を検し此中に臍  
帯又は四肢の下垂せざるや否やに注意せんことを要す次  
で陣痛發作時に際し胎胞充分緊張すれば指頭を以て強く  
之を薦骨に向て壓すべし此の如くするも尙ほ破開せざる  
時はピンセットを以て胎胞の一部を挟み之を破るを佳と  
す決して剪刀を以て切り破るべからず而して産出期の處  
置としては

一 胎胞破開直後の内検査

胎胞破開直後の内検査にして即ち嚴重なる殺  
菌法を行ひ内診を施し次に果して胎胞の破開せるや子宮  
口の全く開大せるや四肢又は臍帯の脱出なきや并に兒頭  
の顛門縫合の方向及び其他の要件を委細に検査すべし本  
章第三を参照すべし若し異常を發見せば直ちに醫士を招

くを要す而して産出期に在りても亦内診は屢く行ふべきものにあらず破水後に一回精密に行へば足れりとす然れども陣痛正規なるに關はらず兒頭下降せずして分娩遅延する時は再び内診し兒頭と産道の關係及び其他の異常を來せしにあらざるやを檢せざるべからず

二 産出期に於ける産婦の位置 産出期に在りては産婦をして決して臥床を離れしむべからず其位置は仰臥又は側臥位を取らしむべし殊に側臥を良とす而して側臥せしむるには必らず胎兒の先進部即ち後頭の存在せる方向に臥せしめんことを要す故に第一頭蓋位にありては左側臥第二頭蓋位に於ては右側臥なり第三及び第四頭蓋位にありても後頭の位せる側方に臥せしむる時は往々小顛門下降して第一或は第二頭蓋位に變せしむることあり

三 腹壓の必要 強壯なる産婦に在りては助産婦は之に

に努責を促し腹壓を營ましむべし即ち手に物を握らしめ足も亦固定せしめて以て努力せしむるを要す然れども陣痛發作時にのみ促すべきものにして休憩時に於ては毫も益なく却て産婦を疲勞せしむるが故に固く禁すべし此腹壓は産出期に於て必要なりと雖虚弱なる者脱腸脱肛肺病心臟病等を患ふる産婦には害あるを以て決して努責せしむべからず

四 胎兒心臓音の注意 心音は産出期に於て殊に注意して屢く聴取すべし若し著しく疾速となるか或は緩慢となる時は胎兒の危険なる徴候なるを以て直ちに醫治を乞ひ速に娩出せしめざるべからず

五 陣痛時の注意 産出期陣痛發作すれば助産婦は此際兒頭をよく下降するや或は正規の回轉を營むや等に注意せざるべからず又産出期に於て陣痛休止することあ

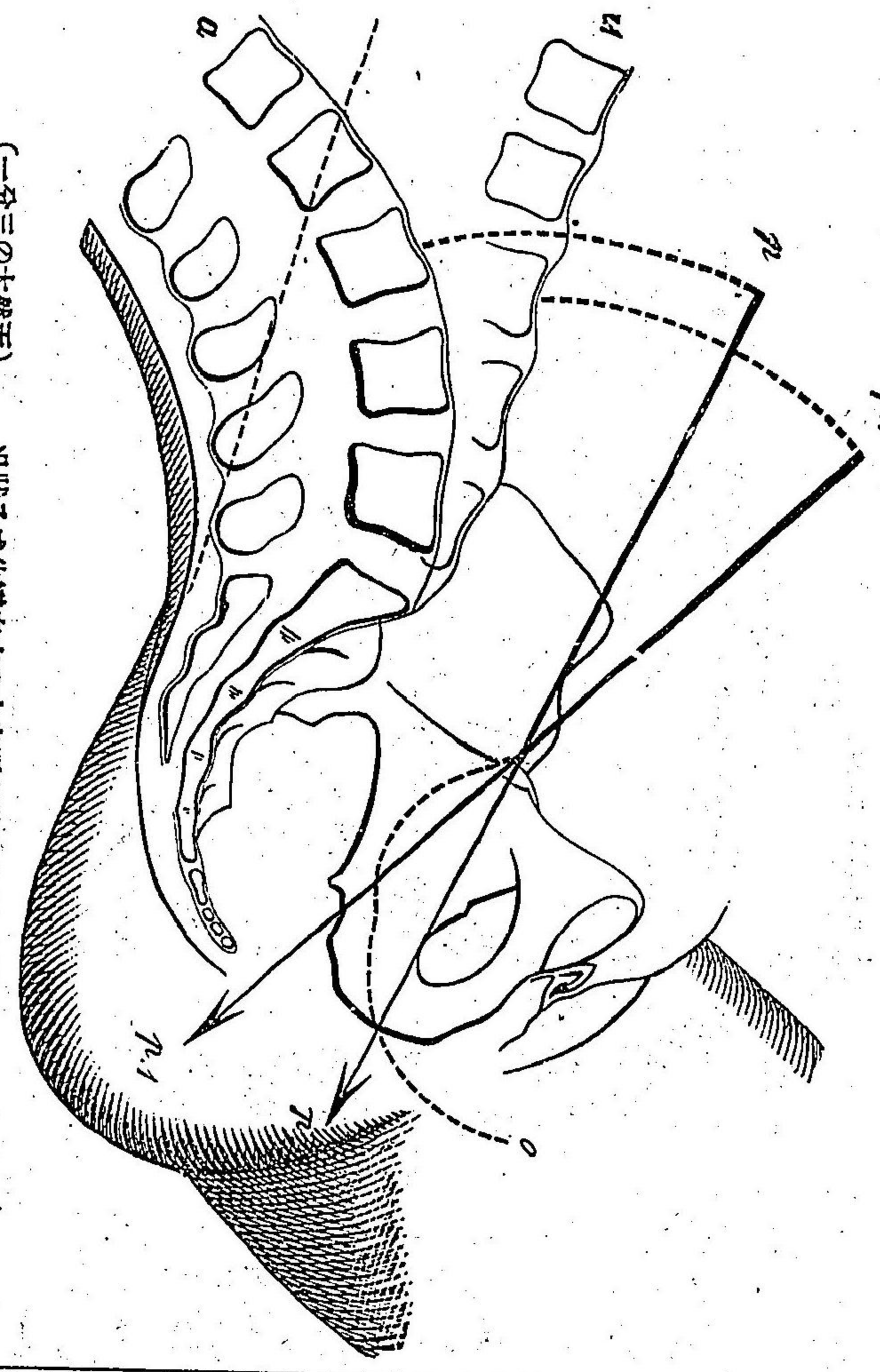
れば胎児及び母體に危険を來すを以て速に醫師を招くべし

六 便通の注意 産出期に於ては兒頭下降して直腸を壓迫するを以て頻りに便意を催すことあり此際にありては決して排便を試まじめず産婦を懇に諭し陣痛時に其薦骨部を壓すべし然る時は大に堪え易きものとす

七 會陰膨隆時の處置 兒頭下降して會陰膨隆し來らば仰臥せる産婦にありては其臀下に枕子を敷き側臥せる産婦に於ては之を其兩脚間に挟み以て分娩を介助し易からしむ

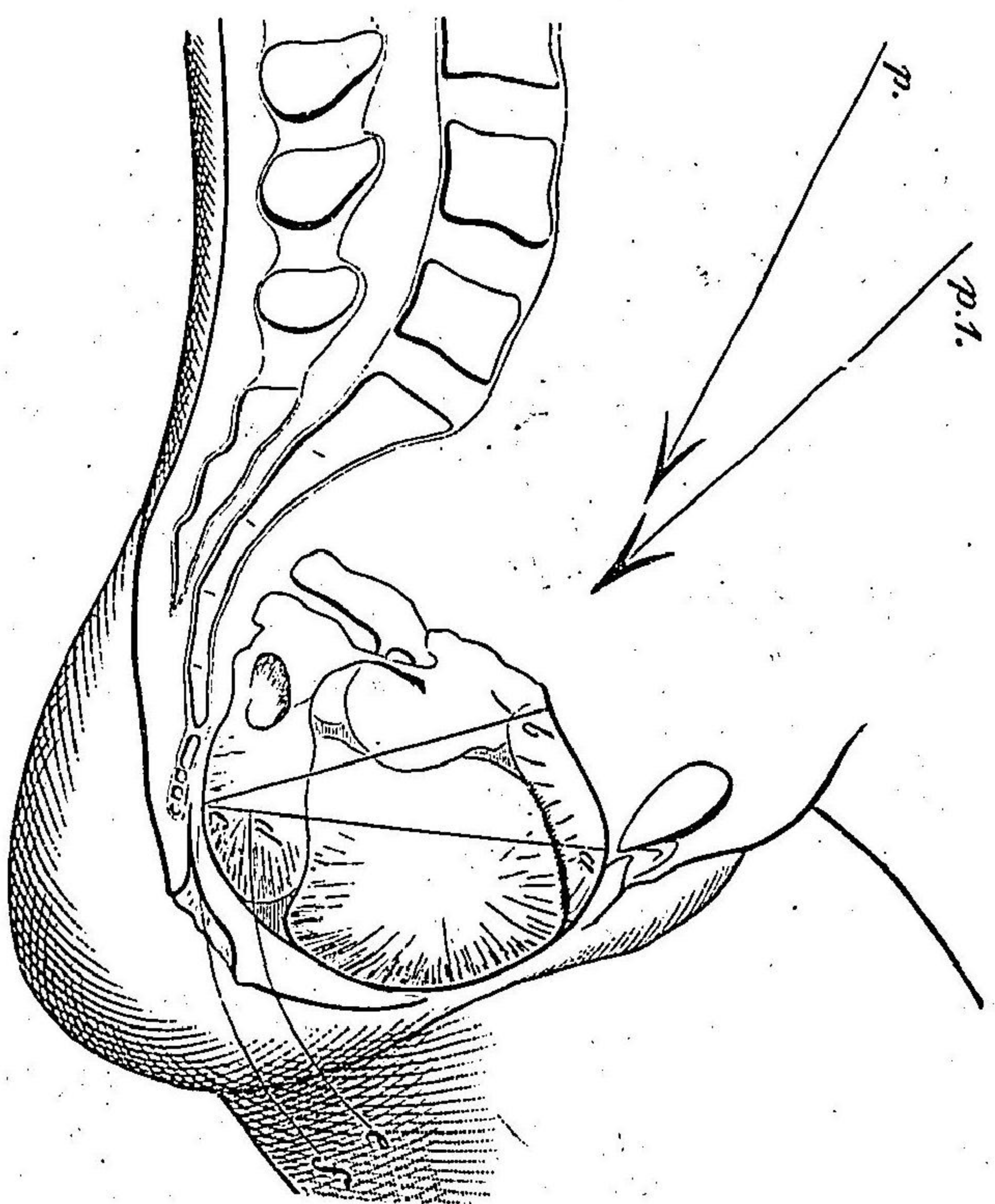
會陰保護術 とは兒頭將に露出せんとするに際し其急劇なる通過を防ぎ以て會陰を破裂せしめざらんが爲めに施す技術を云ひ助産婦の最も緊要なる職務にして其巧拙如何により直ちに熱練なるや否やを看破せられ得べし而

圖 八 十 五 第



(一分三の大然天) 況狀るす化變向方の力出頭兒胎てり由に腰伸び及曲風の推壓

圖九十五 第



(一分三の大然天)

保固する對に陰會の蓋頭兒胎

して會陰保護術には仰臥に於けるものと側臥に於けるものとの二種あり然れども側臥に於ては仰臥よりも手の運用に便なるのみならず陣痛及び腹壓の力仰臥より弱きを以て兒頭の急速なる娩出を防ぎ會陰破裂せしむること少なきの利あり故に假令仰臥を取れるものと雖此時期に至れば側臥に變せしむるを良とす

**會陰保護の時期**は兒頭既に發露して陣痛休憩時と雖臍内に退却することなく且つ會陰部著しく膨出せる時にあり若し之を施すこと早きに過ぐる時は却て兒頭の下降を防ぎ且つ助産婦は疲勞して必要なる時に充分の力を用ふることを能はざるに至るが故に注意せざるべからず但し初産婦は經産婦よりも稍々早く之を行ふべし

**會陰保護法**を行ふに就ては三個の要件あり

(一) 兒頭をして成るべく徐々に會陰を通過せしむること

(二) 児頭の第三回轉を補助すること

(三) 會陰の緊張を減せしむること

等なり而して此法を施せるの間は三布仙の石炭酸水に

浸したる綿花或は瓦設を以て屢く會陰部を拭ひ且つ此部

を濕はしむべし

側臥位に於ける會陰保護法 助産婦は産婦の背側に

坐し之をして強く膝を屈せしめ股間に大なる枕子を挿入

し石炭酸水に浸せる瓦設を會陰部に置き産婦若し左側臥

を取れる時は助産婦の右手を會陰に貼じて其指を開き拇

指を右陰唇上に他の四指を左陰唇上に加へ拇指と四指と

の間を陰唇繫帯の部に抵て且つ僅かに繫帯の縁より去ら

ざるべからず之會陰延長の状況を知らんが爲めなり助産

婦の左手は前方に送り耻骨縫際上より股間を潜らせ手指

を並列せしめて児頭に貼すべし今少陣痛發作すれば児頭

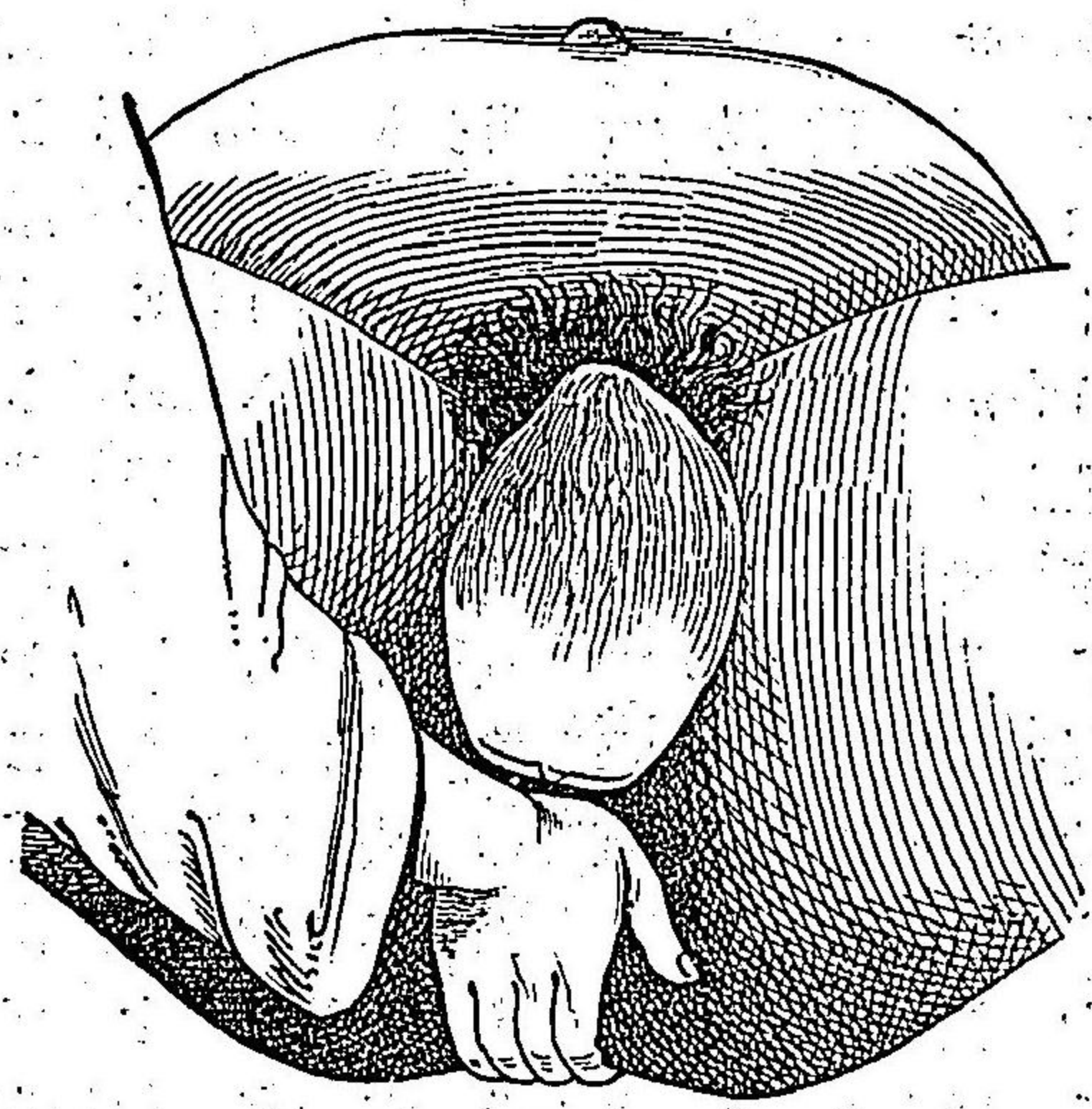
欠

MISSING



於て事前に述べたる所と毫も異なることあり

第六十一圖



仰臥位に於ける會陰保護法  
(一分五の大然天)

枕子を挿入し頭部を低くして兩脚を開かせる

右側に坐し右の手に  
 掌を膨らまして其腕  
 陰部に押しつけて  
 骨部を上に押し  
 に手を指しは陰唇を  
 え後方に引く  
 すべし又左の手に  
 を前方に引く  
 より児の頭骨を送り  
 痛みの際は又側臥位に

仰臥位に於ける會陰保護法

後會陰保護術

部を隔てて胎兒の前額或は頤部を觸知するの際左手を以て兒頭を保持し其速かに娩出するを防止すべし此法は門と尾骶骨との間を壓し顔面を徐々に壓出すべし此法は仰臥を以て行ふよりも側臥を便なりとす而して此後會陰術なるものは兒頭深く膈内に下れるに關らず其露出する迄長時間を費し胎兒危険の徴ある際に行ふべきものなり

第八 軀幹產出期の處置

兒頭產出すれば清潔なる布片を以て其口及び鼻に附着せる粘液を拭ひ去り次で直ちに一手の支指を兒の頸部に送り臍帶の纏絡なきや否やを檢せざるべからず此際假令側臥を以て分娩せる産婦と雖も成るべく仰臥位に變せしむるを佳とす而して一手を以て兒頭を支持し他手を以て臍帶の検査を行ふべし若し纏絡せる時は軽く之を撮みて牽引を試み容易く應ずる一

端を引き出し以て之を弛め稍々肩胛の出づるに至り其纏絡を解除すべし即ち臍帶の纏絡を摘み頭部を越えて胸面に送るなり若し臍帶の纏絡強くして著しく緊張せられ之を緩め能はざる時は止むを得ず二個の結紮を施し其中間を切斷すべし然らざれば軀幹產出の際に斷裂或は胎盤の早期剝離又は胎兒の頸部絞められて假死に陥る等の危険あるものなり

此の如く臍帶纏絡の検査終れば尙會陰保護法に於けるが如く一手を會陰部に貼し次回の陣痛を待つべし若し三分間を経るも陣痛發作せざる時は一手を以て子宮底に輪狀摩擦を施し且つ産婦に努責せしめ助産婦も亦其手を以て子宮底を強く且つ下方に壓すべし此法によるも尙効なき時は兒頭を兩手間に挟み之を會陰の方向に壓し前方の肩胛骨弓下に現はれたる時は又之を前方に舉上すべし然

る時は後側の肩胛は會陰を越えて産出すべし此際決して  
 兒頭を掴みて牽引すべからず只之を前後に移動せしむる  
 のみに止るを要す此の如くするも肩胛産出せざる時に於  
 ては一手の示指を兒背に沿ふて膈内に挿入せしめ會陰部  
 に存する腋窩と鈎状に懸け他手を以て兒頭を把持し兩手  
 共力して前上方に軽く牽く時は後側の肩胛は會陰より脱  
 出すべし此の一手の肩胛産出すれば他の肩胛は自然に排  
 出し得るものなり而して助産婦は肩胛産出時に於ても亦  
 會陰の保護を怠るべからず若し助産婦自ら之を行ふを得  
 ざる時は助手をして補けしむべし是れ會陰は頭部娩出時  
 に於て著しく非薄となれるを以て甚だ破裂し易ければな  
 り肩胛産出すれば會陰の保護を要せざるが故に此手に以  
 て兒體を受け他手にて兒頭を把持すべし此時期に至れば  
 全く産婦の努責を要せずして爾餘の體部は直ちに自然に

産出せられ得るものとす  
 産婦仰臥せる時兒體全く娩出すれば其兒を母の兩脚間  
 に置き側臥せる時は其後ろに仰臥せしめ臍帯を壓迫又は  
 牽引することなからしめ温かき襦袢を以て之を被ふべし  
 而して産婦の陰門は消毒せるガ―セを壓抵して之を被ふ  
 はんことを要す

第七 後産期の處置

後産期に於て助産婦は母體及び生兒に注意せざるべ  
 からざるが故に決して輕々しき處置をなすべからず即ち  
 先づ既に述べたるが如くにして生兒を産床に臥せしむれ  
 ば活發なる呼吸を營むや否やを窺ひ若し之に毫も障害な  
 く且つ高聲を發して啼泣せる時は臍帯結紮の時期に至る  
 まで其儘にして待つべし此間又産婦に就て一手を腹上に

貼し子宮の能く收缩せるや又は尙一胎兒の残れることなきや或は外陰部より著しき出血を現はさざるや等に注意せざるべからず

小兒産出後 直ちに聲を放ちて啼泣せざる時は手掌を以て軽く心部或は臀部等を打つべし之によりても尙啼泣せず呼吸も亦發せざる時は直ちに臍帯を結紮して後章述べるところの方法により人工蘇生術を施さざるべからず今後産期處置の要件を述べん

一 臍帯結紮法 胎兒産出後臍帯の搏動は漸々微弱となり五分乃至十分間を経る時は全く止むに至る然る時は即ち之を結紮し切斷すべし其方法は臍より隔たること凡そ二指横徑の部に於て長さ七寸許りを有する結紮糸を以て緊しく結紮すべし之を第一結紮と云ふ次で此部より更に三指横徑を隔て第二の結紮を施し然る後ち兩結紮の

中間を臍帯剪刀にて切斷すべし但し此際誤つて兒の手足を傷つけざるやう左手を以て剪刀の尖端を覆ふべし又臍帯結紮の際して其中の血液をしごき出すは甚だ危険なることなれば決して行ふべからず

臍帯の第一結紮を要するは小兒の血液を失はざらしめんが爲めなるは言を俟たずして明らかなりと雖第二結紮を施すの所以は出血の爲めに床上を不潔ならしむるを防止且つ胎盤より流出する血液を防ぎて胎盤を軟らかならしめざるがために其剝離を容易ならしむるにあり

二 後産娩出時の處置 既に臍帯の結紮を終らば小兒を温かに被ひて介者に渡すか或は其傍らに臥せしむべし而して後産娩出の際には産婦に仰臥位を取らしめ助産婦は絶えず子宮の收缩に注意せざるべからず此際子宮變小して硬固なる時は異常なことを雖若し柔軟にして縮小せざ

る時は徐々に子宮全體を輪狀に摩擦し之が收縮を促さざるべからず又外陰部に壓抵せるガーゼを屢く検査して出血の多少を検すべし胎盤の子宮壁より剝離せらるる際起る出血は産婦に害なしと雖時として其取扱法の宜しからざるが爲め又た産道の損傷子宮の收縮不全等のために危険なる大出血を來すことあり且つ其出血は必ずしも外陰部にのみ流出するものにあらず時としては子宮腔内に貯留して所謂内出血を來すことあり然る時は甚だ危険にして遂には生命をも失ふことあるが故に若し子宮柔軟にして且つ漸々増大する時は猶豫なく醫治を乞ふべし

**胎盤の剝離** せるや否やを知らんには臍帶の腔口に出づる部に目標を付け置き以て爾後の比較に供すべし而して腔内より稍多量の出血を來し子宮變小して臍帶著しく外に出づるに至れば胎盤は全く剝離せるものにして其大

部は腔内に出でたるものを知るべし今胎盤の一部外陰部に現はれ來る時は兩手を以て之を握り徐々に捻振して其娩出を補助すべし然る時は胎盤に附着する卵膜は振れて索狀をなし容易く出で多くは破裂を生ずることなし但し此際胎盤を捻振せずして單に牽引すべからず然る時は卵膜の一片破れて子宮腔内に残り危険なる出血或は産褥熱等の原因となることあるを以てなり胎盤娩出を補助する際卵膜の一片裂けて子宮内に遺残せんとするものは結紮糸を以て之を結び胎盤側より切離し嚴重に消毒法を施して放置すべし然る時は十二時間乃至二十四時間の後自然に排出し或は容易く之を出し得るに至るものなり

**小兒産出後** 三十分時を経るも胎盤下降せざる時は子宮を輪狀に摩擦し産婦に努責を命ずべし然るに尙娩出せず既に一時間餘を経過すればクレイデ氏の胎盤壓出法を

行なふべし

クレーデ氏胎盤壓出法

先づ子宮に輪狀摩擦を施し陣痛を發せしめて充分其收縮せる際腹壁上より一手の拇指を子宮の前方に他の四指を其後方に貼し手掌を子宮底部に抵て以て堅く子宮を握み全子宮を強く薦骨の内面に向て壓迫すべし之をクレーデ氏胎盤壓出法と云ふ此法は一回にして効なき時は再三反覆すべく且つ毎回必ず陣痛時に之を行ふべきものとす而して大抵五六回行へば容易く後産を娩出せしめ得るものなり但し此法を行ふこと早きに失する時は却て子宮に不正の收縮を起し以て容易に娩出し能はざらしめ或は未だ剝離せざる後産片を遺し後産期或は産褥熱等を發するの危険あるが故に其時期を誤たざるやう注意せざるべ

欠

MISSING

るを要す若し子宮硬く収縮せるに關はらす若しく出血す  
 る時は産道の損傷によるものを知るべし此際於ても亦  
 速かに醫師に托するは言を俟たず以上検査終れば一手  
 を以て子宮に輪狀摩擦を數回反覆之を施し以て子宮を充  
 分収縮せしめ再び其弛緩増大することを防ぐべし子宮能  
 く収縮する時は圓形硬固にして其底部は恥骨縫際の四指  
 横徑上部にあるものとす茲に於て助産婦は胎盤をとり出  
 し卵膜を擴張して丁寧に之を檢し胎盤卵膜共に欠損なきを  
 確認する時は豫め準備せる胎盤容器に納め醫士の來診あ  
 る場合於ては必ず之を保存し醫者の検査を受くべし後  
 産の検査終れば温かき百倍のゾル水中に浸せるガ  
 ン片又は脱脂綿を以て外陰部及び其周圍を軟かく拭除し  
 次に助産婦は成るべく産婦を動かさずして手拭く汚れ  
 たる敷物を悉く取り除き準備せる敷布と交換し下には



清潔なる折り重ねたる布片若くは前章述べたる方形の蒲  
團を敷き清潔なるガーゼ及び脱脂綿を外陰部に貼し丁字  
綯帯を施して之を固定し次で腹壁に腹帯を施すを要す産  
婦の衣服交換は身體を動かすの恐れあれば最も注意して  
巧みに之を行ふべし又濕潤せる褌衣を交換し難き時は一  
時温暖となしたる布片を背下部胸部肩胛等に褌衣と皮膚と  
の間に挿入し二三日を経過して清潔なる衣服と換ふるを良  
す又産褥床の設けある時は腹帯を施せる後ち静かに褥婦  
を移すべし

**腹帯** は腹壁の弛緩を防ぎ子宮の收縮を催進するの益  
あるものにして其法先づ腹壁殊に子宮上に綿花四五枚を  
折り重ねて之を貼し別に長さ三尺餘の布片二枚を取り其  
一枚のものを中央凡そ一尺餘を残して兩端を各々四片に  
裂き之を外方に他一枚を内方に重ね褥婦の背部より廻

らして其内方のものを腹壁に貼せる綿花上に於て左右相  
合せしめ其上を分裂したる布片を以て各々結合すべし  
の場合には醫の命令を請ふべし其他會陰に裂傷ありて其  
縫合を要せざる時は五十倍の石炭酸水に浸したるガーゼ  
を外陰部に貼し其上に乾燥せる棉花を抵て兩脚を閉ぢて  
臥せしむべし然る時は自然に癒合するものなるが故に決  
して無用の薬を貼布すべからず但し沃度防護を撒布する  
は良なりとす又腔口前庭等に小なる損傷ありて之より稍  
多量の出血を見ることがあり此の如き際に於ても尙ほ會陰  
の小さい傷に於けるが如き處置をなし外陰部の壓抵は殊に  
固からしむべし然る時は自然に止血し損傷も亦治癒する  
に至るべし而して此等の裂傷若くは損傷なき場合は褥婦  
を仰臥せしめて兩脚を伸展せしむるを良とす

**腔内の洗滌** は正規定に於ては之を要せず若し必要  
の場合には醫の命令を請ふべし其他會陰に裂傷ありて其  
縫合を要せざる時は五十倍の石炭酸水に浸したるガーゼ  
を外陰部に貼し其上に乾燥せる棉花を抵て兩脚を閉ぢて  
臥せしむべし然る時は自然に癒合するものなるが故に決  
して無用の薬を貼布すべからず但し沃度防護を撒布する  
は良なりとす又腔口前庭等に小なる損傷ありて之より稍  
多量の出血を見ることがあり此の如き際に於ても尙ほ會陰  
の小さい傷に於けるが如き處置をなし外陰部の壓抵は殊に  
固からしむべし然る時は自然に止血し損傷も亦治癒する  
に至るべし而して此等の裂傷若くは損傷なき場合は褥婦  
を仰臥せしめて兩脚を伸展せしむるを良とす

以上の處置終らば初生児を沐浴せしめ後再び子宮収縮の狀態并に出血の有無を検査すべし又褥婦は此際多く眠を催すものなるを以て妄りに妨ぐべからず若し飲食物を欲する時は薄き茶糜粥「ソップ」及び其他の流動性食物を暖め適宜に之を與ふべし而して助産婦は褥婦及び小兒を悉く處置し終ると雖尙二三時間褥婦の傍にありて母兒兩體に注意せざるべからず又歸宅せんとする際には更に子宮の状況出血の有無膀胱の緊満せざるや否や等を檢し若し膀胱緊満せる時は仰臥のまゝ股間に便器を挿入して排尿せしむ然れども自然に排尿し能はざる時は嚴重に消毒せるカテーテルを以て之を排泄せしむるを要す初生児に就ても亦臍帯の斷端を檢し出血なきや或は結紮糸の緩み居らざるや等を精査せざるべからず又呼吸の状態に注意し母兒兩體に危険なきを確認して後歸宅すべきものとす

第四十一章 雙胎分娩の經過及其取扱法

取扱法

雙胎分娩に於ては始めより醫士に托すを要す助産婦の取扱法としては正規分娩と異なることなし只一兒娩出後に於て最も精密なる注意を要するのみ

雙胎の分娩は單胎よりも一二週間早く發するを常とす而して其小兒は發育不良の爲め死すること多し母體にありては子宮の過度なる膨大のため屢々陣痛微弱を起すことあり又第二兒に於て骨盤端位横位等の不良なる位置を取ることも多し

分娩の經過は第一兒産出迄は正規のものと同じ次で第一兒娩出するも子宮収縮せずして尙一兒を残し暫時を経て第二兒の胎胞を形成す而して第二兒若し正規位置を取

れる時は其分娩は第一兒よりも容易なるものとす胎盤は第二兒娩出後一個又は二個共に出づるを常とすれども稀には各胎兒に伴ふて別々に産出することあり兩兒分娩の間は通常十五分乃至三十分なるも時として半日或は一晝夜を要することあり又第一兒娩出後數週若くは數月間を隔てて第二兒を産出することもありと雖頗る稀有の事なり

雙胎分娩の處置

さては勿論醫に任すべしと雖助産婦は之を補助せざるべからず即ち第一兒分娩して臍帶を結紮せんとするに至れば最も注意して第二結紮を施さんことを要す若し之を忽にする時は第二兒をして多量の血液を失はしむべし次で第二兒を娩出すべき陣痛發作すれば尙ほ第一兒に於けるが如く之を處置す此際注意して心音を聴取すべし是れ時として胎盤早期剝離のため第二

兒を危険ならしむることあればなり又兩兒兩性に於て良く似たる時は後に何れの小兒を先に娩出したるやを見別け難きことあれば助産婦は始めに産出せる小兒に記しをつけ置くべし而して雙胎の小兒は一般に發育不良なるが故に之を温暖に保たざれば死亡し易し

三胎以上の分娩に於ても雙胎に於けると同様の處置をなせば可なり

### 第五編 正規産褥の経過及其取扱法

#### 第四十二章 正規産褥

産褥とは全く分娩の終りたる時より妊娠の爲に變化せる生殖器及び全身の状態悉く回復するの間に於て凡そ六週乃至八週日を要す而して産褥中の婦人を褥婦と云ふ授乳せざる者に於ては産褥の終りに至れば再び月經を來すと雖も授乳せる婦人は分娩後凡そ九箇月を経ざれば來潮せざるものなり斯の如く産褥中に在りては褥婦全身の諸器は漸々常態に復すと雖も乳房のみは更に増大し乳汁を分泌するに至る者なり

#### 第四十三章 生殖器の復故機能

増大せる子宮及び其他の部分に産褥中漸々舊に復する

の機能を稱して復故機能と云ふ

#### 第一 子宮の縮小

子宮の縮小するは妊娠中に増殖せる筋組織が崩潰して其容積を減少すると後陣痛と稱する子宮の収縮とに基くものなり

後陣痛とは分娩後に發する弱き子宮の収縮にして恰も分娩時の陣痛に於けるが如く子宮の時々硬くなりて疼痛を伴ふを云ひ時を経るに従ふて次第に微弱となり遂に産後二三日にして消滅し久しきも五日以上に亘ることなし而して後陣痛の強弱は分娩時間の長短に關係することなしして其長きものは弱く短きものは強し故に初産婦は甚だ微弱にして時としては全く感ぜざるものありと雖も之に反し經産婦は強く往々其安眠を妨ぐるに至ることあり其

### 第五編 正規産褥の経過及其取扱法

#### 第四十二章 正規産褥

産褥とは全く分娩の終りたる時より妊娠の爲に變化せる生殖器及び全身の状態悉く回復するの間に於て凡そ六週乃至八週日を要す而して産褥中の婦人を褥婦と云ふ授乳せざる者に於ては産褥の終りに至れば再び月經を來すと雖も授乳せる婦人は分娩後凡そ九箇月を経ざれば來潮せざるものなり斯の如く産褥中に在りては褥婦全身の諸器は漸々常態に復すと雖も乳房のみは更に増大し乳汁を分泌するに至る者なり

#### 第四十三章 生殖器の復故機能

増大せる子宮及び其他の部分が産褥中漸々舊に復する

の機能を稱して復故機能と云ふ

#### 第一 子宮の縮小

子宮の縮小するは妊娠中に増殖せる筋組織が崩潰して其容積を減少すると後陣痛と稱する子宮の収縮とに基くものなり

後陣痛とは分娩後に發する弱き子宮の収縮にして恰も分娩時の陣痛に於けるが如く子宮の時々硬くなりて疼痛を伴ふを云ひ時を経るに従ふて次第に微弱となり遂に産後二三日にして消滅し久しきも五日以上に亘ることなし而して後陣痛の強弱は分娩時間の長短に關係する者にして其長きものは弱く短きものは強し故に初産婦は甚だ微弱にして時としては全く感ぜざるものありと雖も之に反し經産婦は強く往々其安眠を妨ぐるに至ることあり其

他凝血、胎盤片等の子宮内に遺存するときは強劇なるを以て注意せざるべからず(後)陣痛の作用に就ては前編分娩の條を参照すべし)又後陣痛は乳房の刺戟により促進せらるる者なるが故に褥婦自ら嬰兒に乳を授くる時は屢々其發作を來し速かに子宮を縮小せしむるの効ありとす

**子宮の状態** 子宮は分娩後直ちに之に觸るれば殆んど手拳大なれども再び増大して十二時間を経れば其底部は臍と恥骨縫際との中央に位すべく異常なれば決して之より上方に達することなし然れども膀胱充滿する時子宮は押し上げられて其底部の膈の高さに達することあり之を假性の増大と云ふ直腸の充滿せる時も亦略ぼ同一の狀を呈す若し膀胱直腸共に空虚なるに係はらず此の如き變狀を呈す時は子宮腔内に出血せるものにして甚だ危険の徴候なり而して子宮底は分娩後第二日若しくは第三日より漸

次に下降し第八乃至第十日に及べば恥骨縫際の後方に入り第十二日に至れば全く小骨盤中に降る又子宮は既に一定の收縮を營みて常體に復するの後ちと雖も未だ一回も妊娠せざる婦人の子宮に比すれば大約一仙迷長きものなり

**子宮内面殊に胎盤の剝離面** は分娩後無數の血管斷裂口あれども後陣痛の發作と凝血の生ずることによりて全く閉塞し止血するに至る者なり

**子宮頸管** は分娩直後に於ては尙ほ自由に手指を通過するも四五日を経れば僅かに一指を通すべく第八日の後ち子宮内口は全く閉鎖して一小指だに挿入すること能はず

**子宮腔部** 分娩直後に於て子宮口縁は二個の弛緩せる片狀をなして腔内に下垂し殆んど子宮腔部を區別し難し

と雖も十日を経過すれば明瞭に之を認め得べし然れども尙其形大にして短かく數個の小裂痕を有し凸凹不平を現はす且つ子宮外口は横裂状を呈し稍哆開せり是等は分娩の爲めに生じたる變化にして生涯消滅せざるものなり

### 第二 膣の状態

膣管は漸次に縮小すと雖も全く復舊せずして分娩前に比すれば頗る廣く其壁も皺襞を失ひ平滑となる膣入口に於ては分娩の際夥多の裂傷を生じ且つ處女膜の附着部も亦斷裂せらるゝが故に治癒の後ち處女膜は結節状の小隆起をなして遺残す之をミルチ状肉阜と云ふ其他の稍大なる裂傷は線状をなせる白色の癍痕を止むるものなり

### 第三 悪露の排泄

既に述べたるが如く子宮の内面は後産の剝離せるが爲め普く創面を呈し殊に胎盤の剝離せる部に著しく此等の創面より一種の分泌物を排泄す之を悪露と云ふ惡露は初め二日間は脱落膜の小片を有せる純粹の血液にして粘液を混するが故に稍粘稠なり之を血性惡露と云ふ第三日目に至れば其質稀薄となり血液亦減少して淡赤色を呈し恰も水中に血液を混じたるが如く且つ一種甘性の臭氣を帶ぶ之を漿液性惡露と稱し第八日目まで持續す第九日目以後に達すれば更に變じて帶黄白色をなし其質再び粘稠となるを白色惡露と云ふ惡露は褪色するに従ひ其量も亦共に減じ第三週以後に至れば其減少著しく凡そ第五週に於て全く盡くるものなり此く惡露の分泌止む時は子宮内面の創傷も全く治癒したるものとす而して授乳者は授乳せざる者より一般に其量少なし

**悪露の毒性** 悪露は通常子宮腔内にありては毒性を有せずと雖も一旦腔内に排泄せらるる時は此内に存在せる無数の細菌を混じて傳染毒を帶るに至る故に此悪露創面に附着する時は化膿を生ず然れども通常腔内にのみ存在する細菌は概して無害のものなるを以て褥婦の生殖器に存せる多数の創傷に附着するも危険なる疾病を來すことなし今若し助産婦にして不適當なる取扱法を爲し有害なる細菌腔内に浸入して悪露に混じたりとせんか忽ち創面より吸收せられて危険なる産褥熱の症状を呈するに至る助産婦の責任亦大ならずや

第四十四章 乳汁の分泌

**乳房の變化** 乳房は妊娠中既に増大し其末期に於て之を壓する時は水様の薄き乳汁即ち初乳を分泌すと雖も其

乳房發育は未だ完全ならず産褥期に至り始めて充分なる發育を成すものなり而して分娩後第二日又は第三日に於て著るしく腫脹し皮膚は緊満して皮下靜脈を現し感覺頗る過敏となり張り緊るが如くまた刺すが如き疼痛を發し時としては其痛み腋窩肩胛上膊等に及び或は上肢を運動せしめ能はざることあり此際三十八度以内の微熱を發すれども決して之より以上の高熱を現すことなし若し其熱三十八度を超ゆる時は必ず他に異常あるものと認めざる可からず而して此等の状況は一日乃至二日間持続し乳汁の排泄増進するに至れば漸く腫脹減退し疼痛も亦治するを常とす

**乳汁の分泌** は初め少量なりと雖も四五日目に至れば著るしく多量となる蓋し褥婦自ら乳を授け且つ小兒之を哺すること強き時は從て乳汁の分泌し來ること愈々速に



して其量亦益々多きものなり之に反し褥婦若し授乳せざる時は暫時の間乳汁自ら流出すと雖も泌乳の刺戟を缺くが故に分泌作用全く止み乳房も亦漸次に縮小するに至るべし又褥婦多量の液體を飲用する時は乳汁の分泌増多するものなり

初乳は既に妊娠末期より其分泌を始め凡そ産褥の第四日迄持續するものにして其性半透明にして粘液狀を帶び黄色の點狀若くは線狀物を混す之を初乳小體と云ふ而して初乳は稍々下痢せしむるの作用あるを以て初生兒之を飲ば胎糞を排泄するの効を有す然るを俗人往々空腹を爲め乳汁を求むる初生兒に各種の名稱を附したる下劑を飲用せしむるの舊習を固守す初乳既に此の如き天然の妙能を備ふるに何ぞ不完全なる人工の下劑を用ふるの必要あるべきぞ

常乳は分娩後凡そ第五日の頃より分泌するものにして滋養分に富み帶黄白色を呈し不透明なり又初乳小體を消失して之を認めず乳汁の白色を呈するは其中に乳球を混するが爲にして即ち乳球とは脂肪より成る小球なり顯微鏡を以て檢するに非ざれば見ること能はず

乳汁分泌の持續  
 すれば著るしく減少し漸次に止むを常とす故に哺乳期間限すれば小兒の始めて齒を發する頃即ち分娩後凡そ九箇月迄とす然れども往々哺乳を停止せざるが爲め其刺戟によりて二年若くは三年の久しきを經るも尙は分泌せるものあり此の如き乳汁は頗る稀薄にして滋養分に乏しく之を飲用せしむるも小兒に益なきのみならず却て母兒兩體に害あるものぞす

乳汁の變性  
 乳汁は種々の事情によりて其質變化を來

す即ち一強き精神の感動ある時或は其量を減じ或は性質不良となることあり二母體の疾病即ち脚氣梅毒等の病は乳汁中に移り行くものなり又高き熱を發する時は乳汁の性質頗る不良となる三乳房に疾患ある時は乳汁中に膿を混入することあり四多くの藥品は能く乳汁中に分泌せらる例之は母體に下劑を與ふれば小兒も亦下痢し梅毒の藥を與ふれば小兒にも効を呈するが如き是なり五食物中の成分も亦乳汁中に進入し屢く其性質を變化するものなり

### 第四十五章 褥婦全身の變化

分娩直後に於ける褥婦は概ね惡寒を覺ゆるも暫時にして温暖となり發汗を來し大に爽快を感じ以て疲勞の爲め睡眠を催すべし而して十二時間以内に於ては三十八度以下の微熱を發し更に十二時間を經過すれば下降して

平温に復し次で第三日の頃に至り乳房緊満し乳汁の分泌増進すれば再び三十八度以内の熱を徴し一二日に於て消退するものなり産褥中に在る婦人の脈搏及び呼吸は健康體に比すれば一般に緩徐なりと雖も頗る亢進し易く少しく臥床を離るるも忽ち常度を超えて著るしく増多す可し便通は腹壓の減少と身體運動の休止とにより秘結し易く殊に最初の一週間は甚だしき者にて又褥婦を惡露授乳發汗等の爲め多量の水分を排泄するを以て頻りに口渴を覺ゆ而して食欲は初め二三日は減すと雖も爾後増進し殊に授乳者に於て著るし

### 産褥中の分泌増進

とは汗尿惡露の分泌を云ふ即ち褥婦の皮膚は常に濕潤し殊に最初八日間は多量に發汗す此の如く産褥中汗の分泌亢進するを褥汗と云ふ尿も亦初め著るしく増量すと雖も腹壓の減ずると尿道の腫脹若く

は彎曲することあることによりて一二日間は自ら排泄し能はざることあり

### 第四十六章 褥婦の取扱法

褥婦は他の異常なき婦人に比すれば甚だ速に病に罹り易く若し一旦之に犯さるゝ時は頗る重症となり易し故に褥婦の取扱法に就ては最も注意を要すべく殊に清潔及び消毒法を厳守せざるべからず而して助産婦が毎常産家を訪問し之を處置するに當ては必らず小兒を先きに然る後ち褥婦を處置すべし褥婦に就て注意すべき最も緊要なる事項は發熱の有無露の性狀子宮の狀態乳房の狀況等にして若し異常ありと認むる時は直ちに醫士を招き其指圖を受くべし決して助産婦自ら處置すべからず今左に詳細なる取扱法を記さん

#### 第一 助産婦の訪問

分娩後八日間は毎日朝夕二回訪問するを規則とすれども母兒共に毫も異常なく経過可良なることを確むる時は時宜により一回となすも可なり爾後第二週の終りまでは必らず毎日一回宛褥婦を訪問し母兒兩體に注意すべし

#### 第二 體温及び脈搏の検査

助産婦は檢温器を以て毎訪問時に褥婦の體温を計測すべし異常なくして安靜なる者にありては三十六度五分より三十七度六分の間を昇降し脈搏は五十乃至七十を以て常とす若し體温三十八度を超え暫時を過ぐるも尙ほ下降せざる時は異常あるが爲めなるを以て速かに醫の診察を受くること必要なり

### 第三 乳房及び腹部の検査

乳房に就ては能く緊満し充分乳汁の分泌ありや否や乳頭に損傷を有せざるや又は乳頭能く突隆し小児の哺乳に適するや否や等にして腹部に於ては子宮底の高さ疼痛の有無及び膨満の如何并に膀胱の充満せざるや等を診すべし若し膀胱著るしく充満せる時は從て子宮も壓上せられ其底は高部に位するものなり

### 第四 悪露の検査

産褥中 假令正規の経過を取ると雖も悪露の附着せる壓布は一定の容器又は油紙製の袋に入れ財へしめ毎訪問時には必ず之を検査して異常なきや否やを確かめ然る後ち捨つべきものとす又産家により擔任醫士の屢々來

診することあり然る時助産婦は豫め壓布に番號を附し置き初めのものより順序よく并列せしめて醫士の検査に供すべし

### 第五 壓抵布の交換

産褥の初めに於ては悪露の排泄多量なるを以て其第一日にありては凡そ二時間毎に第二日乃至第三日の頃には三時間毎に交換せしめ爾後悪露の排泄減少するに従ひ漸次交換時間を延すべく第七日以後は一日二回となさむべし若し壓抵布の濕潤甚だしきに係はらず之を交換せざるか又は交換時間遷延する時は褥婦の不快なるのみならず臭氣甚だしく且つ悪露は腔内若くは空氣中の細菌の爲めに腐敗するに至る然る時は多數の裂傷を有せる生殖器より吸收せられて發熱を來し不慮の災害を生ずること